

モ其之ヲ犯セシ者ノ中或ハ悉皆大ニ德義ニ背キタリトナス可カラザルケモ其ノ
 故ニ能ク之ヲ參酌スルアラバ死刑ハ世論ト吻合シトナス可カラザルケモ其ノ
 譽ヲ損シズル此刑ニ當ルニ至ラントト參議院副議長ト雖モ死刑ハ加辱刑ニ非
 識ニ際シテ論ズル所ニ當ル兵權ナル附加刑ナキ時ト雖モ死刑ハ加辱刑ニ非
 ル説ヲ其非トセリ其言ニ云ク陸軍律ニ係ル區別ハ是レ過大ニ失シタルニ非
 死刑ト其非トセリ其言ニ云ク陸軍律ニ係ル區別ハ是レ過大ニ失シタルニ非
 ノ得ンヤ此意見ハ決シテ然ラズ第一ノ場合ニ於テハ死刑ニ備セルナラバ
 區別ヲ詳論セシト雖モ實際上ノ結果ヨリ刑ヲ細密ナル義解メハ學士ニ在
 或ハ之ヲ討論ス可キモ實際上ノ結果ヨリ刑ヲ細密ナル義解メハ學士ニ在
 言者ト得ザラザルナリ政府ノ委員ヨリ之ヲ死刑ヲ以テ死刑ニ目スル性
 ナト名譽ト云ヒシ文字ハ常ニ併立シ難キヲ覺フ今唯立法院ニ望ム所ハ一
 年四月二十日立法院會議録專制兵權ヲ謝絶ス可キヤレト問者ハ刑ヲ輕
 セラレテ無期徒刑ニ處セラル可キ時ニ謝絶ス可キヤレト問者ハ刑ヲ輕
 死刑ニテ加辱ノ決定セザリシ議論ノ運命ニ隨ヒシ者ノ如シ輕シノ名義
 何ニ如シテ加辱ノ結果アル刑ヲ輕減シ無期禁錮トナシ其月十二年二月
 ケヲ處シタル結果アル刑ヲ輕減シ無期禁錮トナシ其月十二年二月
 期禁錮ノ執行ニ遣送セリテモ減刑ノ執行ニ因テハ固ヨリ均シク言致サリ
 ズ

大赦ニ付テ
ノ區別

大赦ニ付テハ宜シク區別ヲ設ク可シ

凡ソ大赦ハ處刑前後ニ拘ハジズ其益ヲ受ク可キ者ニ關セル要件アル
 可ク例ヘハ佛國ニ歸ルニ非ザレバ其益ヲ受ク可カラザルガ如キ其要
 件ヲ充タスニ非ザレバ通法ヲ以テ之ヲ處置ス可シ

處刑ノ後大赦ヲ受クル者ニハ義務ヲ負擔セシムルヲ得可シ此義務ハ裁判宣告
 書ニ記シタル刑ヨリ輕小ナル以上ハ刑ト看做スヲ得可シ或ハ之ヲ
 駁シテ云ク大赦ニ付テハ罪狀ヲ法律上ニテ審明スル能ハズト想像ス
 ルニ非ズヤト曰ク實ニ然リ事實ノ大小輕重ノ證ヲ舉グ可カラズトス
 ルハ即チ事實ノ審明ヲ爲ス可カラズトスルニ在リ而シテ處刑ノ源因ヲ
 悉皆非ナリトセズノ能ク責任ノ輕重ヲ抛擲スルヲ得可シ
 處刑前大赦ヲ行フハ要件ヲ強ユ可キニ非ズ如何トナレハ此要件タ
 ルヤ毎子ニ刑ノ性質ニ關スルモノニシテ而シテ治罪程規ニ定マレル保護

大赦並ニ特赦ヲ論ズ

テ以テ司法官ニ非ザレバ刑ヲ施スヲ得可カラザレバナリ
 或ハ云ハン大赦ハ法律タリ命令ヲ本質トスル法律タリト然レモ其命
 令ハ誰ニ向テ之ヲ爲ス大赦ノ益ヲ受シメザルニ非ザレモ人ヲ指定セ
 ザルハ亦大赦ノ本質ニ非ズヤ又大赦ハ或ル等級ノ罪ヲ犯ス者ニ施行
 ス可キ者ナレバ其犯人ニメ未ダ確定ノ裁判ヲ受ザル以上ハ之ヲ目シ
 テ未知者トナスコトヲ得可シ

特赦大赦ノ
 事下不累加
 刑ノ定則ト
 ヲ照比ス

性質異ナル
 者

特赦大赦ノ効ハ不累加刑ノ原則ニ照比セザル可カラズ是レ亦大難題
 ナ起ス所ニメ理論ニ於テハ未ダ判然タル者ハアテズ
 性質相異ナル刑ニ該應セル二罪ヲ犯ス者其重キ刑ニ付キ特赦ヲ受ク
 ル時ハ其輕キ刑ニ處セラル可キ罪犯ノ爲メニ處分ヲナス可キ乎其重
 キ刑ハ二罪ニ付キ十分ナル責應トスルヲ以テ特赦アル上ハ二罪ヲ併
 免ス可シ

二罪ヲ犯スト雖モ其一ニ付テノミノ吟味アリ特赦ニ因リテ其刑ヲ免
 ス時ハ如何ニ決定セン其未ダ裁判ヲ經ザル犯罪ニ付テハ更ニ訴ヲ起
 ス可キ乎宜シク之ガ區別ヲ設クベシ其二個ノ犯罪即チ裁判ニ罹リシ
 犯罪及ヒ已後發顯シタル犯罪ハ性質相異ナル刑ニ該應スル乎或ハ然
 ラザル乎若シ之ヲ然リトセバ又其小別ヲ立テザル可ラズ處刑ノ源四
 因タル犯罪他ノ罪ヨリ重キ刑ニ處セラル可キ時ハ先犯罪ノ責應タル
 刑ハ又他ノ犯罪ノ責應タラザルヲ得ズ而シテ其責應ハ既ニ釋免ヲ受ケ
 タリ又若シ處刑ノ源因タル犯罪他ノ罪ヨリ輕キ刑ニ處セラル可キ時
 ハ其他ノ罪ニ付テハ更ニ訴ヲ起スヲ得可シ
 若シ二罪俱ニ同一ナル刑ニ當リ而シテ其特赦ヲ受ケタル犯人其最重刑
 ニ處セラレザリシナラバ假令特赦ノ典ヲ受ルモ更ニ訴ヲ起シ刑ノ殘
 餘ヲ行フニ於テ決シテ妨グ無カル可シ

大赦並ニ特赦ヲ論ズ

ルグラブラア氏云ク若シ甲罪既ニ極刑ヲ受ケ乙罪或ハ乙罪中ノ其一
 亦同刑ニ處ス可キ時ハ其特赦ヲ受ケタル者ヲ更ニ裁判ス可シ如何ト
 ナレバ此場合ニ於テ乙罪モ亦均シク同刑ニ處ス可キヲ以テ甲罪ハ乙
 罪ヨリ重シト謂フ可カラズ又國王ハ甲罪ニ付テ性質上他ノ諸刑ヨリ
 最モ重キ極刑ヲ免シタレバ其同刑ニ處ス可キ他ノ罪犯ニ付テモ亦其
 極刑ヲ免シ或ハ之ヲ免スヲ欲スタリト謂フ可カラズト此説ヤ非ナリ
 蓋シ死刑ハ再ヒ執行ス可カラザルガ故ニ甲罪ニ因リ此刑ニ處シタル
 時ハ是レ乙罪ニ付テモ亦此刑ニ處シタリト謂フ可シ
 處刑ノ後大赦ヲ行ヒシ時モ亦是ノ如ク定ム可キ乎
 例バ二罪ヲ同時ニ裁判セシニ其甲罪ハ治罪法第三百六十五條ニ據リ
 乙罪ト同刑ニ當ル而シテ其中一罪ノミ大赦ノ典ニ罹ル時ハ處刑ハ如何
 ナル可キ乎

其大赦ニ係レル犯罪ハ最重ナル刑ニ處セラル可キカ或ハ最輕ナル刑
 ニ處セラル可キカ又ハ大赦ニ係ラザル犯罪ト同一ナル性質ノ刑ニ處
 セラル可キカ各其場合ヲ異ニス可シ

第一ノ場合ニ於テハ其罰ス可キ罪ハ下等ノ刑ニ該應スルヲ以テ初メ
 言渡シタル刑ハ固ヨリ執行ス可カラズ故ニ更ニ吟味ヲナシ更ニ裁判
 ナスルヲ要ス

第二第三ノ場合ニ於テハ初メ裁判ヲナス時裁判官ニテ得タル所ノ法
 律上ノ證據ハ爾來消滅ス可キガ故ニ初メノ刑罰ノ度ニ於テ新發犯罪
 ナ計算セザリシヤ否ヤヲ知ル可カラザルヲ以テ更ニ吟味シ裁判ヲス
 ルハ最モ須要ノ事件トス

其既ニ裁判ヲ經タル犯罪ノミ大赦ヲ受シ時ハ其處刑以前ノ犯罪ニメ
 大赦ヲ受ザル以上ハ固ヨリ更ニ之ガ訴ヲナサ、ル可カラズ

大赦並ニ特赦ヲ論ズ

特赦狀並ニ
大赦ノ布告
ヲ解説シテ
用スルハ適
ニ在ル乎

特赦狀ノ登
記

司法官ニテ特赦狀ヲ解説セザルモ之ヲ適用スルハ其職務トナス而シテ
行政官ノ職務ハ自家決定セル特赦狀ノ義意ト區域トニ違背スルコトノ
無カラシム爲メ着目スルヲ要ス
若シ特赦懸リノ官吏及ビ共和政大統領ヨリ特赦ノ狀ヲ下附セシ時ハ
之ヲ釋解スルハ誰レノ任タル可キ乎斯ル特赦ニハ中性アレヒ立法上
ノ性質ニ關スル者ノ如シ然レヒ假令國會委員ノ協議ヲナスアルモ特
赦ハ爲メニ行政上ノ性質タル其本質ヲ失フ可カラザレバ之ヲ釋解ス
ルハ亦行政官ノ職務ニシテ而シテ司法官ノ權内ニ在ラザル可シ
法律ノ性質アル特赦ノ適用釋解ニ至リテハ司法官ノ職務トス
重罪ニ適用ス可キ刑ヲ釋免シ或ハ減輕スル特赦狀ノ送附アル時ハ處
刑ノ時ニ當テハ犯人住所ノ控訴院又ハ犯人新住所ノ控訴院又ハ刑ヲ
言渡シタル地方ヲ管轄スル控訴院ニテ各局ノ諸員ヲ會合シ一同ノ而

前ニテ之ヲ帳簿ニ發録スルヲ要ス而シテ一成規ノ外別ニ手續等ハ無シ
其成規トハ特赦狀ノ下附アリシ控訴院ニテ之ヲ發録スルヲ拒ム可カ
ラズ又異議ヲナス可カラズ是レナリ故ニ此登錄ハ唯特赦ヲ公ニスル
ニ過ギザルモノニテ特赦ノ効ノ與カル所ニ非ズ
輕罪ノ刑ヲ釋免減輕スルニハ右ノ如ク登錄スルヲ無シ
大赦狀ヲ下スハ法律布告ノ成規ニ隨フ

第二十六章

復權論

レニヒリタシヤ

免恕ノ處置タル特赦及ヒ政事上ト公益上トノ處置タル大赦ハ前章ニ
之ヲ詳述セリ今茲ノ章ニ於テハ復權ノ事ヲ論セン復權ハ犯人ニ於テ
強ヒテ求メ得ヘキ者ニ非ラザルヲ以テ細密ニ之ヲ言ヘハ正義ヨリシ
テ許可スル所ニ非ラス唯犯人カ刑ヲ執行シタルニ因リ成シ得タル美
事ト云フ可キ者ナリ

復權ノ事ヲ
論ス

復權論

復権ハ何所ニ於テ大赦並ニ特赦ナルト異ナラズ

特赦ハ刑ノ全部又ハ一部ヲ釋免シ大赦ハ罪スヘキ事實ヲ審明シ若クハ處刑ニ信ヲ措クベカラザラシム復権ハ然ラス刑人既ニ社會ニ對シ國庫ニ對シ被害者ニ對シテ其負債ヲ辨償シタルニ因リ或ル刑ノ確定又ハ執行ニ從屬スル無能力若クハ或ル犯罪ノ補充刑又ハ主刑トシテ言渡シタル無能力ヲ免サレノトテ乞願スルキハ政府ヨテ之ヲ許可スルコトナリ

刑ヲ履行セシ者復権ヲ得ルキハ一旦失ヒシ人事上ノ身分ヲ復スベク又特赦ノ効ノ及バザル處刑ノ結果ヲ滅除スベシ處刑ノ結果ヲ滅除シ得ルトハ其結果ハ即チ刑人が身分中ニ屬スレバナリ(注ヲ參觀スベシ)然レハ無能力ノ原因タル處刑ハ之ガ爲メニ全ク消滅セズ處刑ノ後大赦ヲ行フキハ下言ノ如クナルベシト雖モ復権ヲ得ルキハ然ラザルモノトス曰ク刑人ハ其實無罪タルモ知ル可ラズ裁判ノ誤謬ノ犠牲タル

復権ハ何レヨリ出ツル乎

モ亦未タ測ルベカラズト而シテ復権トハ唯刑人ハ社會ニテ再タビ其地位ヲ占ムベシ改心シタルガ故ニ再タビ從前ノ人トナリシト官ニテ公告スルニ外ナラズ故ニ刑罰ニ因リ一旦罹リシ法律上ノ不具タル汚穢ノ跡ヲ消滅スル法律上ノ洗禮ノ如キ者ナリ或ル人ノ名言アリ曰ク正義ハ平素嚴格ニシテ寸毫モ貸サザルガ故ニ刑ヲ變改若クハ廢除シ以テ當時ノ須要ニ適合セシメンガ爲メニ高上ナル特權即チ一特赦大赦ヲ行フノ權ヲ創定シタリ此理ヲ推シテ他ニ及ボシ遂ニ刑法ノ蘊義ニ基キ新制ヲ設ケ以テ其悔悟克己ノ確證アルモノヲシテ處刑ノ創痕ヲ亡滅セシメザルベカラザルニ至レリト○千八百五十二年七月三日ノ法案説明書ニ云ク特赦ト復権ト實際差別アル所是ノ如シ曰ク特赦ハ加刑有刑即チ刑ニ及シ復権ハ加刑無刑即チ無能力ニ及スト復権ハ司法行政ニ涉リテ兩性ヲ兼有スルモノナリ若シ復権ヲ得ルハ犯人カ權ナリトセハ復権ハ是レ司法ヨリ出ヅルモノニテ即チ裁判ナ

舊時ノ法

ラ
復權ノ制タル實ニ革命時代ニ起レリ其語其萌芽ハ既ニ我古法ニ散見
スト雖モ古法ニ於テハ復權狀ハ國王ヨリ施ス所ノ特赦仁恩ニ類シタ
ルガ故ニ之ガ爲メニ一モ要件ヲ設ケザルヲ以テ刑人再ビ社會ニ其他
位ヲ占定スルモ毫モ危害ナキヲ保ス可キ所ナカリキ

古法

ミニイヤール、ド、ブ、グ、ラ、ン云ク復權狀ハ既ニ言渡サレタル刑罰金及ヒ
其他ノ民事上ノ償等ヲ満足シタル後耻辱ノ痕跡ヲ醫治シ動作ヲ妨ク
ル准死ヲ取消シ生計ノ道ヲ得テ以テ其名譽ヲ回復セント國王ノ哀憐
ヲ仰ヒテ受クベキ所ノモノナリ其狀ニハ國王ヲ鈴シ之ヲ下附スルヤ
直チニ其効アルモノニテ其犯罪ニ適合スベキヤ否ヤヲ點檢スルコト
ク裁判官ニ於テ必ズ承認スベキモノトス但シ其別ニ意見アリテ國王
ニ建言セントスルハ此ノ限ニ在ラズト

一千七百九
十五年九月
廿五日ノ法

演劇類似ノ
程式

此ニ由テ是ヲ觀レバ復權狀ヲ附與スルノ目的タル刑人ガ准死若クハ
司法大藏ノ官ニ就クベカラザル如キ他ノ無能力ヲ免シ或ハ處刑ニ因
リテ受ケタル所ノ恥辱ヲ療治スルニアリタリシユト云ク復權狀ハ
所謂特赦狀ノ中ニ屬スルヲ以テ國王ヲ鈴セザル可カラズト刑人生存
中解放ヲ受ケタルキハ勿論其死後ト雖モ復權ヲ行ヒタリ
「アツサンブレ、コンスチ、ユアント」ハ大ニ復權ノ性質ヲ變更シ仁慈ヲ
以テ之レガ基本トセズ正義ヲ以テ其起ル所トセリ一千七百九十一年
九月二十五日ノ刑法ハ特赦ヲ與フルヲ廢シタル章ニ於テ重罪ノ刑期
ヲ終ヘン者ノ爲メニ 此ノ刑法ニハ無 其果シテ善ニ歸リ社會ニテ諸權
ヲ用ヒ諸義務ヲ遂ケ得ルヤ否ヤヲ證徴ス可キ方法ヲ定メタリ
其程式ハ極メテ早ク且ツ演劇ニ類セリ鎖肆ノ刑ハ即チ當時剝奪公權
トモ稱セシガ其刑ニ付テハ刑期ノ後ハ十年裁判ノ後モ亦十年ヲ經ハ

復權論

刑人ヨリ復權ヲ願フヲ得タリ刑人少ナクモ二年間住居セシ地ノ邑會ニテ其善行ヲ查證シ其邑附屬ノ役員二名之ヲ率ヒテ邑裁判所ニ至リ公ケニ宣告書ヲ讀ミ其後高聲ニテ下ノ如ク言ヘリ何某ハ己レガ刑ヲ行フテ重罪ヲ償ヒタリ今其品行タル批難スベキ所ナキカ故ニ余輩ハ其國ノ名ヲ以テ其痕跡ノ消滅センコトヲ乞願スト

裁判所長ハ別ニ評議セズ下ノ如ク言渡セリ汝カ國ノ證明及ヒ乞願ニ因リ法律並ニ裁判所ハ汝ガ重罪ノ跡ヲ消滅スベシト

司法官ハ復權ノ事ヲ擔任セス唯之レニ同意ノ旨ヲ表シ之レテ公ケニスト雖モ之ヲ附與スル等ノコトナシ又之レガ裁判ヲナサザルノミナラズ己レガ意見ヲ述フルコトナク一ニ邑役員ノ決定ニ隨ヒ其決定スル以上ハ異議ヲ起スコトナカリキ

右ノ刑法第一章第一款第十條ニ云ク「復權ヲ得タル者ハ處刑ヨリ生シ

タル諸効果諸無能力ヲ回復スヘシ」ト然レハ其處刑ハ全ク廢滅セザリキ

此制ニ於テハ懲治刑ヲ受ケルモノニ復權ヲ與ヘス又刑人が死後ニハ之レヲ與フルコトナシ

治罪法

治罪法ニハ復權ニ特赦ノ性質ヲ附セス又司法上ノ性質ヲモ附セス唯邑會ニテ刑人カ悔悟シタルヤ否ヤヲ判斷スルコトヲ廢シ之レヲ行政官ニ委シタリ而シテ行政官ハ之レヲ許ルスベシト決スルモ必ラズ司法官ノ意見ヲ問ハザルヘカラズ司法官ニテ若シ之レヲ不可トセバ防止スルコトヲ得タリ

治罪法ニテ定メル規則

此法ニ於テモ復權ハ裁判ヲ以テ與フルニ非ラズシテ上ニ言ヒシ如ク司法行政ノ兩性質ヲ兼テタル者ナリ司法官ニテ右願ヲ不可トスルキハ或ハ之レヲ裁判スベシト雖モ若シ之レヲ不可ナリトセバ是レ行政

官ノ意見ニ隨フ者ニテ之ヲ約言セバ司法官ハ第二位ノ職務ヲナシ行
 政官ノ可トスル所ニ非ラザレバ其意見ハカナシトス又施體加辱ノ刑
 ニ處シタル者ノミハ復權ヲナスベキモ加辱ノミノ刑ニハ之ヲ行フベ
 カラザル者トセリ
 又有期刑ヲ言渡シタルキニ非レバ之ヲ適用スベカラザルモノ、如
 シ而シテ第六百十九條ノ明文ニ據ルニ刑期後五年ヲ經テ始メテ之ヲ
 乞願スルヲ得ルナリ

但シ第六百十九條ハ下ノ如ク解釋セラレタリ曰ク若シ特赦ニ因リ主
 刑ヲ止メ或ハ減刑ニ因リ無期刑ニ換ヘタル刑其期ヲ終フルキハ其後
 五年ヲ經テ刑人ハ無能力ヲ免レンガ爲メ復權ヲ願フヲ得ベシト
 刑法第百條第百八條第百三十八條第百四十四條ニ據リ監視ヲ主刑ト
 シテ言渡シタルキハ之ニ復權ヲ適用スベカラス是レ其無能力トシハ

一千八百三十二年ノ改正

特赦ヲ拒絕シ無期トシテハ社會上ノ償ヲ終ヘタリト想像スル仁慈ノ
 典ヲ受クベカラスナルニ由ルナリ又一千八百十年ノ刑法ニ從ヘバ剝奪
 公權ハ附加刑ニシテ之ヲ以テ鎖肆ノ刑ニ易ヘタル一千八百三十二年
 四月二十八日ノ法律ニ據ルニ非ザレハ其主刑トナルコトナキガ故ニ剝
 奪公權ニ就ヒテハ別ニ疑問ノ生スルコト無カリキ
 一千八百三十二年四月二十八日ノ改正ニ於テハ復權ヲ得ルノ性質、効
 果及ヒ其程式ニ付テ毫モ變ゼザリシト雖モ唯無期刑ニ處セラレタル
 モノ特赦ヲ受クルニ於テハ有期刑ノ定期ヲ終ヘタルキノ効アルベシ
 ト云ヘル從前ノ解釋ヲ確固ニセリ蓋シ其定ムル所ヲ見ルニ減刑ノ場
 合ニ於テハ其刑期後五年ヲ經ルニ非ザレバ復權ノ願ヲナスベカラス
 特赦ノ場合ニ於テハ其特赦ヲ登錄シタル後五年ヲ經ルニ非ラザレバ
 其願ヲナスベカラストセリ而シテ有期刑ヲ釋免スル特赦及ヒ無期刑ヲ

主刑トシテ
剝奪公權ヲ
言渡サレタ
ル者モ亦復
権ヲ得

懲治刑ニ處
セラレタル
者ハ之ヲ得
ス

釋免スル特赦ニ付テ區別ヲ設ケザリキ

右一千八百三十二年ノ法ハ主刑トシテ言渡シタル剝奪公權ヨリ生スル無能力ハ其處刑確定セシ日ヨリ五年ヲ經ル以上ハ復權ノ願ニ因リテ之レヲ消滅シ得ベカラシメ又若シ刑法第三十五條ニ從ヒ剝奪公權ノ外尙ホ禁獄ノ刑ニ處シタルハ右五年ノ期限ハ其禁獄ヲ終ヘタル日ヨリ起算スベキニ定メタリ主刑トシテ言渡シタル監視ニ付テハ當時未タ復權ヲ許サス而シテ其無能力ハ特赦ヲ以テ止メシム可ラザル無期ナル性質ヲ依然保有セリ

懲治刑ニ處セラレタル者ニハ復權ノ事ヲ適用スルヲ得ザリキ抑モ無能力ノ如キ補助刑ハ刑人既ニ解放セラレタリト雖モ尙ホ之ヲ不適當ナリト推測シ此刑ヲ行フモノナルガ故ニ皮相ヲ以テスレハ懲治刑ニ處セラレタル者ニ於テハ是ノ如キ刑ヲ要セサル者ノ如シ夫レ懲治刑

ノ名タル之ヲ施行スルハ犯人ノ懲戒トナリ爾來其必ス善ニ歸ルベキヲ保スルニ起因スルナリ然ラバ則チ何ソ社會ニ於テ尙ホ未タ失望セズシテ原來懲治シ得ベシト慮リシ犯人ニ付テ其權ヲ復セシムルヲ須ヒンヤ果シテ犯人ヲ懲治ノ爲メニ刑ニ處シタルナラバ其再ヒ社會ニ地位ヲ占ムベカラズトセザル以上ハ其嘗テ毫髮モ失ハザリシ能力ヲ回復シタリト定ムルハ當然ナラズト謂フ可シ

此ノ如キ議論ハ佛國ノ法律ニ於テ無益ニ屬シタリ如何トナレバ刑法及ビ自餘數多ノ特別法ニ於テ懲治刑ニ無期無能力ヲ附帶セシメタル者アレバナリ現ニ刑法第七十一條第七十五條ノ如キ金銀證券等ヲ竊取シタルニ因リ刑ニ處セラレタル會計役員及ビ自ラ支配シ若クハ監視スル所ノ事業ニ付キ私ノ利ヲ得タル官吏ハ爾後公務ヲ行フベカラズトセリ

七月ノ立君
政府ニ於テ
起草シタル
法案

七十四條第三百八十八條第四百條第四百一一條第四百五條第四百六條
第四百十條ニ於テハ懲治罪ニ付キ二年以上二十年以下ノ無能力ニ處
スルコトアリ若シ無能力ノ基本トスル不適當ノ推測ニシテ無用ニ屬ス
ルニ至ルコトハ何故ニ其ノ定期前ニ於テ無能力ヲ取消スベカラザル乎
七月ノ立君政體ノ時代ニ於テ政府ハ懲治刑ニ處シタルモノニ復權ヲ
許ス議案ヲ再ビ兩議院ニ附シタルニ初メハ上院ノ委員タルフランク、
カレー氏ノ決定ニ從ヒ上院ニテ之ヲ排斥セリ其討議ノ際ニ於テ司法
卿及ビベランジョー氏ハ之ヲ可トシタルモ委員ナルアルゲー侯ハ之ヲ
不可トセリト云フ一千八百四十三年五月
二十日二十三日ノ會議
一千八百四十五年ニ亦同一ナル法案ヲ下院ニ付シタルニシユ、デスト、
アンジユ氏カ反對ナル意見書ヲ出セシ後此案ヲ廢スルニ決セリ一千
八百四十五年四月二
十五日ノ會議

一千八百四
十八年ノ布
告

一千八百四十八年四月十八日假設政府ハ懲治刑ニ處セラレタル者モ
復權ノ願ヲナスヲ得ベキ旨ヲ布告シタリ此法ニ據レハ刑期後三年ヲ
經ルニアラザレバ復權ノ願ヲナスベカラズ懲治刑言渡ニ付テノミナ
ラズ重罪刑言渡ニ付テモ司法卿ハ司法及ビ行政長官ノ職務ヲ兼有シ
刑人カ住所ヲ管轄スル大檢事ノ意見ヲ問ヘリ而シテ大檢事ノ之ヲ不可
トスル説ハ之ヲ可トスル説ノ如クカナク司法卿ハ總テ之レヲ決定
スル全權ヲ有セリ此ノ布告ニ右ノ規則ハ假定タル旨ヲ載セタリ
一千八百五十二年七月三日、六日ノ法ハ一千八百四十八年ノ布告ヲ廢
シ治罪法第二篇第七卷第四章ノ規則ニ有用ノ改正ヲナシタリ
其定ムル所ニ循ヘハ有期無期ノ刑タルヲ論ゼズ凡ソ重罪ノ刑ニ處セ
ラレタル者ハ復權ノ願ヲナスヲ得ヘク特赦或ハ減刑ニ因リテ其無期
ナル者ヲ消滅ス可シ

一千八百五
十二年七月
三日六日ノ
法

又主刑トシテ剝奪公權ノ刑ニ處セラレタル者ニ復權ヲ許スノ規則ハ
 舊規ニ依リ且ツ更ラニ擴張シテ主刑トシテ監視ニ處セラレタル者ニ
 モ之ヲ許スニ至レリ而シテ其出願ハ刑期後五年ヲ經ルニ非ザレバ之
 ナラスベカラズ其五年ノ期限ハ監視ニ處シタルキ又ハ禁獄ノ刑ヲ併
 用セザル剝奪公權ニ處シタルキハ其言渡確定ノ日ヨリ起算ス
 政府カ委員タリシルーエー氏ハ至正至理ノ意見ヲ以テ監視ニ係レル
 改正ヲ論證セリ其言ニ云ク此法案ノ起草者ハ監視ハ刑タルヤ將タ無
 能力タルヤ窮極セザルベカラザルニ至レリ若シ之ヲ刑トセバ特赦ヲ
 以テ之ヲ消滅セシムルヲ得ベシ又若シ之ヲ無能力トセバ無能力ハ他
 人ノ利益ニ關スル者ニテ司法上ノ事件ニ屬スルガ故ニ特赦ニ因リテ
 之ヲ剝除ス可ラズ是ヲ以テ政府ハ大ニ此ノ點ヲ疑ヒシト雖モ監視ニ
 處セラレタル者ニ付キ之ヲ免レシメンガ爲メ特赦ノ權ヲ行フベシト

決定セザリシナリ

又一千八百四十八年四月十八日ノ布告ノ懲治刑ニ處セラレタル者ニ
 復權ヲ許スニ係レル事項ハ保維セラレタリ右一千八百五十年ノ法案
 説明書ニ於テハ此點ニ付キ一千八百四十三年及ビ一千八百四十五年
 ニ生シタル駁説ヲ痛ク排論セリ蓋シ一千八百四十三年五月二十日上
 院ニ於テ其意見書ヲ出セシ者ノ言ニ云ク復權ノ利益ヲ確保センガ爲
 ノ懲治刑ヲシテ加辱ノ性質アシムト又下院ノ能辨ナル委員シユー、
 デスト、アンジユ氏同義ニ據テ論シテ曰ク是レ豈ニ懲治刑ニ處セラレタ
 ル者其刑期ヲ終ヘタルモ未ダ其負債ヲ償ハズ尙ホ加辱ニ罹ルト雖モ
 唯復權ニ因リテノミ之ヲ免レシムルヲ得ベシト想像スル者ニ非ラズ
 ヤト
 今法案説明書ノ之ニ答フル所ヲ舉示セン曰ク

此法ニモテ懲
 治刑ニ用ス
 ラ適ラフ由
 可シクシテ
 告シタル源

一千八百八年ノ法典ニ據レハ復權ノ目的タル處刑ヨリ生ズル無能力ヲ止メシムルニアルナリ分散ニ付テハ復權即チ特別ナル復權ニ因リ商業上ノ能力ヲ復セシムルハ固ヨリ之アリト雖ヒ是レ豈ニ前ニ加辱ノ事アリテ而シテ復權ニ因リ其汚點ヲ洗滌スル者ナランヤ懲治刑及ビ加辱刑ヲ終ヘタル後ニ存スベキ無能力ニ付キテ總テ復權ヲ得ベシトスルキハ右二刑ノ混同ヲ免レズト豫メ臆想スルハ能ク理ニ適ヘル説タル乎蓋シ是ヨリ尙ホ甚シキ者アリ抑モ極輕ノ刑ヲ行フキハ本刑スラ互ヒニ相觸ル、ニ非ラズヤ將タ之ニ因リテ其特別ナル性質及ビ無形ノ名ヲ失フトスル乎假設政府カ布告ヲ出シテヨリ既ニ四年其間ノ經驗ヲ以テスルニ種々ノ性質アル罪惡ノ所爲ニ付テ人ノ混同視スルヲ見ザルナリ世人カ重罪ト輕罪トヲ混同スルハ未ダ嘗テ之レ裁無ナリト

蓋シ此答辨タル博識ナル先進者ボリスラソベル氏ガ一千八百四十六年ノ後司法卿ノ諮詢ヲ受ケ治罪法改正草案ニ付キ我法學大學校ノ名ヲ以テ作爲セシ所ニ係カル其言ニ云ク
蓋シ論者ハ懲治刑ニ付キ復權ノ願ヲ許スキハ或ハ爲メニ施體若クハ加辱ノ刑ニ存スル法律上ノ加辱ヲシテ右懲治刑ニ附帶セシムルガ如ク見ヘンカチ憂ヒタルナリ是ノ如キ憂慮タル固ヨリ至當ノ者ニ非ラズ假令懲治刑ニ處セラレタル者ノ状態ヲ輕寬ニスルモ此ノ刑ト重罪ノ刑トヲ分割セル隔離ヲ減少スルハアラザルベキナリ蓋シ懲治刑ノ言渡ニ付テ復權ヲ緊要ナリトスル所以ハ懲治刑ニ附屬スル無能力ノ無期或ハ其期限ノ長キガ爲メニシテ而シテ無能力ヲ消滅セシム可キ方法ニ非ザルナリト
或ル人ハ云ク重罪ニ因リ處スベキ所ノ無能力ハ刑ニアラズシテ刑

ノ確定若クハ執行ヨリ生ズル所ノ結果タリ裁判官ハ之ヲ宣告セズ宣
 告書ニハ之ヲ載セズ之ニ反シ輕罪ニ付テハ償ノ名義ヲ以テ無能力ヲ
 科ス又或ハ宣告ノ要目タルコトアリテ當然之ニ附帶スルコト無キコトアリ
 ト
 之ニ答ヘン至良ノ説ニ簡アリ其第一ノ説ハ我大學校ノ説及ビボワス
 ランベル氏ガ意見トス其論ニ云ク法律ニ循ヒ處スベキノ無能力ト法
 律ノ明文ニ因リ裁判官ニ於テ宣告シ得ベキ或ハ宣告セザルベカラザ
 ル無能力ノ差別トハ甚タ大ナラザル者トス現ニ剝奪公權ニ付テハ立
 法者ニ於テ深ク右ノ差別ヲ意トセザリシナリ故ニ剝奪公權ハ或ハ他
 ノ刑ノ結果タルキアリ刑法第二條或ハ主刑タルキアリ第八條及ヒ第三十五條而シ
 テ總ベテ此ノ場合ニ於テハ復權ニ因リ之ヲ止メシムルコト得ベシ
治罪法第六條又若シ無能力ヲ以テ尋常ノ刑トセバ國王ニ於テ固ヨリ之ヲ

釋免スルヲ得ベシト雖モ抑是ノ如キ場合ニ於テハ復權ニ付キ治罪法
 第六百二十條以下ニ記シタル定規ヲ履ミ仁慈ニ頼ランヨリ寧ロ裁判
 官以テ一旦失ヒタル諸權ヲ回復スルヲ勝レリトス可シト
 第二ノ答ハ一千八百五十二年ノ法案説明書ニ記載セラレタリ曰ク教
 育ニ係レル法或ハ選舉ニ係レル法ノ如キ特別ナル法律ニ於テ定メタ
 ル所ノ禁止ヲ如何シテ眞ノ刑ト混同スル乎將タ既往ニ及ボサンガ爲
 メ今日更ニ刑ヲ創定シ得ベシトスル乎三四十年前以前既ニ其罪ヲ償ヒ
 シ者ヲ再ビ刑ニ處スルヲ得ベシトスル乎抑刑タル者ハ是ノ如ク既往
 ニ及ブベキ乎ト
 蓋シ此ノ説ヨリ良キ者ハ莫カルベシ夫レ或ル禁止ノ刑タラザルノ確
 證ハ其言渡ニ直チニ附加スベク唯以後ノ法律タリト云フノミニテ別
 ニ裁判セズシテ之ヲ附加スベキニアリ

或ル再犯者
ハ復権ヲ得
ズ

一千八百八年ノ立法者が十分顧慮セザリシ場合ニ復権ナル藥劑ヲ施行スルニ至リシ一千八百五十三年ノ法ハ余實ニ之レヲ贅稱スルナリ然レモ此ノ新法ハ或ハ之ヲ刺激シタル意思ニ違フテ再犯者ニハ復権ヲ許ササルノ規則ヲ擴張シタルナキニ非ザル乎
治罪法第六百三十四條ニ從ヘバ再犯ノ爲メニ刑ニ處セラレタルモノハ決テ復権ヲ得ベカラザルナリ而シテ此ノ條款ハ一千八百三十二年四月二十八日ノ法ニ於テモ又一千八百四十八年四月十八日ノ法ニ於テモ改正セラレザリキ

新法ハ何ノ
點ヲ舊治罪
法ヨリ重ク
シタル乎

一千八百八年ノ治罪法ノ規則ニテハ重罪ノ刑ヲ受ケタルモノ其言渡ノ確定セシ後更ニ輕罪ヲ犯スルハ之ヲ再犯トセズ何トナレハ其犯人ハ刑ヲ増重セラル、トナク唯其更ニ犯シタル罪ノ刑ノミヲ受ケ而シテ輕罪ニ付テハ復権ヲ許サレザルヲ以テ再犯ノ處斷ハ復権ニ因リ取消

スベカラスト云フハ無用タレバナリ

之ト同一ナル理由ニ因リ重罪ノ刑ニ處セラレタルモノ其言渡ノ確定セシ後又重罪ヲ犯スモ減刑情狀アリテ懲治刑ニ處スベキハ其再犯ノ爲メニ刑ヲ増重セザルヲ以テ亦之ヲ再犯者トセズ
又之ト同一ナル理由ニ因リ初メ輕罪ノ爲メニ刑ヲ受ケ後更ニ重罪ヲ犯セシ者ハ復権ヲ得可シ是レ復権ハ再犯ニ因リ増重セラレタル施體加辱或ハ加辱ノミノ刑ノ結果ヲ消滅ス可カラザレバナリ
唯重罪ニ因リ刑ニ處セラレタル者其重罪ノ刑或ハ懲治ノ刑タルヲ論ゼズ其ノ言渡確定ノ後更ニ施體若クハ加辱ノ刑ニ處スベキ重罪ヲ犯シタルモノミ復権ノ利益ヲ受クルヲ得ザリキ蓋シ一千八百十年ノ刑法第五十六條ニ據レハ是ノ如キ再犯ハ施體或ハ加辱ノ刑ヲ増重セラレタリ然ルニ一千八百三十二年四月二十八日ノ法ヲ以テ校閲セラレ

タル第五十六條ニ從へバ前ニ犯セシ重罪モ施體或ハ加辱ノ刑ニ處セラレタルモ非ザレバ更ニ犯セシ重罪ニ付キ施體或ハ加辱ノ刑ヲ増重スルヲ無シ故ニ刑法第五十六條ニ關セル治罪法第六百三十四條ニ於テハ再ビ施體或ハ加辱ノ刑ニ處セラレタルモノ、ミニ付キ復權ヲ不適當トセリ

一千八百五十二年七月三日六日ノ法ハ治罪法第六百三十四條ヲ修正スルニ付キ一千八百三十二年ノ法ヲ以テ校閱ヲ經タル一千八百八年ノ刑法第五十六條ニ據リ參酌較定シタル乎治罪法第六百三十四條ノ文ニ云ク「初メ重罪ヲ犯シタルニ因リ刑ヲ言渡サレタル後更ニ重罪ヲ犯シ施體又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレタル者ハ復權ヲ得可ラズ」ト

將タ此ノ新第六百三十四條ニ於テハ刑ノ向タルヲ論ゼズ初メ刑ヲ受ケタル者唯重罪ノ爲メタル以上ハ更ニ罪ヲ犯シタルニ付キ施體又ハ加辱ノ刑ニ處セラレタル者ハ復權ヲ得可ラズトスル乎

若シ第六百三十四條ノ義意ヲシテ是ノ如クナラシムルモハ刑法第五十六條ノ現今ノ文面ト吻合セザルナリ然レモ此ノ條目ハ尙ホ第五十六條ニ照準ス可キ者アルモ第五十七條第五十八條トハ毫モ關係セサルナリ蓋シ再犯ニ因リ刑ニ處セラレタル者ハ舉テ復權ニ不適當ナリトセラル、ニ非ズ又再犯ニ因リ増重刑ヲ受ケタル者ハ舉テ是ノ如ク不適當視スヘキニ非ズ刑法第五十七條第五十八條ニ照シ再犯ニ付キ刑ヲ増重セラレ、モ之レガ爲メニ復權ノ望ヲ失フヘキニ非ザルナリ然レバ則チ第五十六條ニ於テ立法者カ再犯人ニ復權ヲ得ベカラザラシムル者ハ是レ再ヒ重罪ヲ犯スノ再犯ニシテ而シテ再ビ施體或ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレタル者ニアルヲ知ルナリ

或ハ之ヲ駁シテ云ク再犯ノ爲メニ刑ヲ増重セラレ、トナキモ初メ重

罪ニ付キ刑ニ處セラレ後又施體或ハ加辱ノ刑ニ處セラレタル以上ハ
宜ク復權ヲ得サラシムベシト然レモ再犯ニ付キ刑ヲ増重セラレタル
者ニハ復權ヲ許シ而シテ再犯タルモ刑ヲ増重セラレサリシ故法律ノ眞
義ニ從ヘバ再犯タラサル者ニハ復權ヲ許サズトスルハ法律ニ於テ決
テ制定シ得ベカラサルノ事タリ

政府カ法案ニ於テハ如何ナル再犯人ニモ復權ヲ得セシム可カラズト
セザルヲ以テ此點ニ付テハ全ク一千八百九十一年九月二十七日ノ刑
法ニ適合セリ又タ輕罪ノ爲メ刑ニ處セラレタル者ニハ復權ヲ得セシ
メザルヲ以テ治罪法ニハ再犯重罪ヲ犯スノ再犯ニ付テノミ復權ヲ得
ベカラズトセリ

一千八百五十二年七月ノ法律討議ノ際立法院ノ議員フワウワール氏ハ
再犯輕罪ヲ犯シタル再犯ニ付テモ又再犯重罪ヲ犯シタル再犯ニ付テ

モ復權ヲ許スベカラザルヲ發論セリ

ド、ボーウエル、シエー及ビド、モントルイユノ二氏ハ又再犯重罪ヲ犯セル再
犯ニ付テノミ復權ヲ得セシム可カラザルノ修正說ヲ立テタリ

立法院ノ委員ハラウワール氏カ說ヲ可認セリ

フワウワール氏カ論文ヲ參議院ニ送附シタルニ參議院ハ政府カ法案ヲ
廢棄シ以テド、ボーウエル、シエー及ビド、モントルイユノ說ニ同意セリ現今
ノ法ハ乃チ右ノ修正說ナリ

ランクレー氏カ立法院委員ノ名ヲ以テ草定セル意見書ハ治罪法ニ於
テ如何ナル再犯ニ付テモ皆ナ復權ヲ得ベカラザルノ主意ニテ一千八
百三十二年ノ立法者ガ論シタル意思ヲ惹キ起セシ者ノ如シ

其意見書ニ云ク委員ハ參議院ニ治罪法第六百三十四條ヲ再行スベキ
修正說ヲ可決セラレノヲ乞フト其修正說トハ即チフワウワール氏

カ修正説ナレハボーウエルシエー及ヒモントルイユノ二氏が説ハ第六百三十四條ニ付テ嚴ナル規則ヲ設クルニ非ラズシテ之ヲ寬ニセントシタルガ如クナリキ

博識ナル法學士シユウエルシエー氏カ新第六百三千四條ニ付テ論ズルノ説ハ立法院カ意見ト相稱フ者アリ曰クフツワール氏ハ如何ナル再犯人ト雖モ皆復權ヲ得ベカラザルヲ欲セリ是レ治罪法第六百三十四條ニ歸シテ論ズル者ナリト

然ルニ是ノ如キハ復權ニ付キ治罪法ノ要譯ヲ全ク顛倒セル者ト謂フベシ抑、一千八百五十二年七月ノ法ハ刑法ノ舊第五十六條ト相須ツ所アル乎一千八百三十二年ノ改正ニ據リ參酌スル所ナキ乎再犯ニ係ル第二章スヘシ

余政府カ法案ヲ可トシ如何ナル再犯ニ付テモ復權ヲ許サザルベカラ

ズトスルナリ夫レ再犯人ハ惡業ニ流レ易ク法律ヲ蔑視スル者ト推測シ得ベシト雖モ復タ省思悔悟ノ望ナシトハ斷定スベカラザル者アリ若シ其深ク往時ノ非ヲ悔ヒ追懷慚愧シ數、美事善行ヲナシ以テ其舊惡ヲ贖フコアラハ何ソ推測上ノ不適當チシテ永ク存セシムルヲ須ヒンヤ又再犯ハ情狀ニ因リ刑ヲ輕減スルヲ妨ゲザルヲ何故ニ復權ヲ妨クルト謂フ乎

第六百三十四條第三項ニ於テ施體又ハ加辱ノ刑ヲ更ニ言渡シタル者ニ付キ設クル所ノ規則ヲ尋究スルニ當テ重罪ヲ犯シタルニ付キ施體又ハ加辱ノ刑ニ處セラレタル者ノミニ此規則ヲ適用スベシトシタルヲ知ルニ足レリ是ノ如ク之ヲ解釋スルハ一千八百五十二年ノ法ヲシテ一千八百三十二年四月ノ法ヲ以テ校閱テ經タル第五十六條ト能ク相適合スベカラシムルナラン

復権ノ要件
及ビ手續

新第六百三十四條ニ據ルニ既ニ復権ヲ得タル者更ニ罪ヲ犯シタルハ復権ヲ得ベカラズ法案説明書ニ云ク「此ノ思惠ハ濫施スベカラズ專ラ之ニ依頼シ其本旨ニ戻リ一般ノ信用ニ背ク者ニハ決テ之ヲ附與スベカラズ」下此言眞ニ然リ蓋シ社會ニ於テ確證ヲ得ル所アリシ故テ以テ復権ヲ許シタルニ其ノ確證スル所却テ犯罪ノ具タリシ上ハ復タ其眞ニ悔悟自改テ期ス可ラザルナリ

復権ノ要件及ビ其手續ハ如何

事實上ノ要件四個アリ

第一 刑人其刑ヲ終ヘ或ハ之ガ釋免ヲ得タルニ因リ解放ヲ受クルヲ要ス期滿免除ヲ以テ解放セラレタルハ此要件ノ内ニ入ラズ

期滿免除ヲ以テ解放セラレタルヲ右ノ要件内ニ入レサル者是レ佛國法律ニ於テ刑ノ期滿免除ヲ以テ心思上ノ責罰ヲ終ヘタリトシ若クハ

刑ノ代事ニシテ責罰ヲ受ケタリト推測セサルノ一證ナリ

第二 解放ノ後自由ヲ得タルニ因リ行狀ノ如何ヲ試ミラル、トテ要ス其時間ハ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ五年ニシテ懲治罪ノ刑ニ處セラレタルモノハ三年トス

又其期限ハ主刑トシテ宣告シタル監視及ヒ剝奪公權ニ付テハ處刑確定ノ日ヨリ起算ス但シ剝奪公權ニ禁獄ノ刑ヲ附加シタルハ剝奪公權ニ付テ其期限ハ禁獄ノ解放ヲ受ケタル日ヨリ起算ス

第三 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ解放後少ナクモ五年間同一ノ郡中ニ住スルヲ要ス懲治罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ其期限ヲ三年トス而シテ右二箇ノ場合ニ於テ復権ノ願ヲナス迄少ナクモ二年間同一ノ邑中ニ住スルヲ要ス

此三箇ノ要件ハ均シク同一ノ義ヨリ出ツル者ニテ未タ復権ノ願ヲナ

復権論

スベカラサル時間ハ即チ行狀検査ノ時間トス蓋シ住所ヲ定ムルニ非
レハ行狀ノ善美ヲ證スルモ其詮ナカル可キナリ

第四 復権ヲ願フ者ハ既ニ裁判所ノ費用並ニ其言渡サレシ罰金及び
償額ヲ拂フタルノ證ヲ立テ又ハ此等ノ金額ヲ拂フベキ義務ノ釋放ヲ
得タル證ヲ立ツルヲ要ス若シ其證ヲ立テサルキハ法律上ニテ定ムル
所ノ期限間民事上ノ禁錮ヲ受ケタルノ證ヲ立テ又ハ被害者ニ於テ之
ヲ禁錮セシムルノ權ヲ拋棄シタル證ヲ立ツルヲ要ス治罪法第四百二十
條ニ記シタル旨
證ヲ以テ費用辨納ノ證ニ換ユルヲ得ス又一千八百六十七年七月二十二日ノ法
律ニ於テハ政府ニ納ムベキ費用ニ付キ民事上ノ禁錮ニ處スル規則ヲ廢シタル
カ故ニ治罪法第六百二十三條第二項ニ記シタル若シ其證(費用辨償)ヲ立テザル
ハハ法律上ニテ定ムル所ノ期限間民事上ノ禁錮ヲ受ケタルノ證ヲ立テ又ハ被
害者ニ於テ之ヲ禁錮セシムル權ヲ拋棄シタル
證ヲ立ツベシト云フ規則ヲ行フナカリキ

詐偽倒産ニ
付キ特別ナ
ル規則

詐偽ノ到産ニ付キ刑ニ處セラレタル者ハ其刑ニ特別ナル性質アルチ
以テ更ニ一規則ヲ設クルニ至レリ然ルニ其規則タル外形ヲ以テスレ

ハ例外ナル者ノ如キモ其實ラングレイ氏ノ言ノ如ク凡ソ刑ニ處セラ
レタル者ハ復権ヲ得ル前ニ其爲シタル損害ヲ償ハサルベカラスト云
ヘル原則ノ實施タルニ過キザルノミ其詐偽倒産者ハ借金ノ元利並ニ
裁判所費用ヲ拂フタルノ證ヲ立テサル可ラズ

ラングレイ氏ノ説ニ云ク詐偽倒産ノ罪ハ特別ナル性質アリ特別ナル
性質トハ衆人ヲ害シ而シテ其衆人ハ衆債主ノ權ヨリカアル權ヲ行フ
ヲ得サル是レナリ故ニ倒産者ハ復権ヲ得ルモ其犠牲者ノ損害トナ
ルヲナカル可シ又政府ハ問題ヲ斷決セリ如何トナレバ詐偽倒産者ハ
盡ク其負債ヲ拂フタルキニ非ラザレバ復権ヲ得ベカラサレバナリ何
故ニ行政ノ事ハ法律ヨリ道德ヲ重スルヲ要スル乎ト

復権ノ願ヲナス程式ハ治罪法第六百二十二條第六百二十四、二十五、二
十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三條ニ於テ之ヲ記載

復権論

ス
既ニ刑期ノ終リシ犯人ハ復權ノ願書ヲ其郡ノ檢事ニ差出シ且左件ヲ申立ツベシ

第一 刑ヲ言渡サレシ日附

第二 刑期ノ終リシ後第六百二十條ニ記スル期限ヨリ更ニ長キ期限ヲ經タルキハ其刑期ノ終リシ以來住居セシ地第六百二十條

檢事ハ郡長ヲシテ右願人住所ノ邑會議員ニ左ノ諸件ヲ證明スル爲メノ會議ヲ爲スヘキヲ命ゼシムベシ

第一 願人邑内ニ往シタル期限但シ何月何日ニ其邑内ニ住スルヲ始メ何月何日ニ之ヲ止メタルヤヲ詳明ナラシムベシ

第二 其邑内ニ住シタル時間ノ行狀

第三 其時間生計ヲ營ミシ方法

邑會ニテ此等ノ諸事ヲ證明スル書面ニハ復權願ノ法ニ適シタルヤ否ヤヲ知ルベキ爲メニ特ニ之ヲ記シタル旨ヲ附記スベシ

又檢事ハ願人ノ住居シタル邑ノ長及び其縣ノ治安裁判官並ニ其郡ノ長官ノ意見ヲ聽クベシ第六百二十四條

檢事ハ左ノ書類ヲ受取ルベシ

第一 刑ノ言渡書ノ寫

第二 願人ノ行狀如何ヲ證スル禁錮場ノ簿冊ノ寫

檢事ハ總テノ書類ヲ己レノ見込書ト共ニ檢事長ニ送ルベシ第六百二十五條

復權ノ願ハ願人住居ノ地ヲ管轄スル控訴院ニテ之ヲ吟味スベシ

檢事長ハ總ベテノ書類ヲ其控訴院ノ書記局ニ納ムベシ第六百二十六條

其書類ヲ書記局ニ納メタルヨリ二月内ニ重罪取調局ニテ其願ヲ吟味

シ檢事長其申立書ヲ差出スベシ

重罪取調局ニテハ檢事長ノ求メニ從ヒ又ハ其公務ヲ以テ更ニ改メテ其願ノ趣ヲ取調グベキトテ言渡スヲ得ベシ但シ是レガ爲メ六月以上ノ遅延ヲ爲スベカラズ第六百二十七條

重罪取調局ニテハ檢事長ノ申立ヲ聽キタル上ニテ其見込書ヲ記スベシ第六百二十八條

若シ重罪取調局ノ見込書復權ノ願ヲ允許セサルノ説タルキハ更ニ二年ノ後ニ非ラサレバ再ビ其願ヲ爲スヘカラズ第六百二十九條 ○ 重罪取調局願ヲ允許セサルモ之カ破毀ヲ大審院ニ乞フヲ得ズ

重罪取調局ノ見込書復權ノ願ヲ允許スベキノ説タルキハ檢事長其見込書ト諸書類トヲ遅延ナク司法卿ニ送呈スベシ但シ司法卿ハ嘗テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニ相談スルヲ得ベシ第六百三十條

皇帝ハ司法卿ノ申立ヲ聽タル上ニテ復權ノ願ヲ允許シ又ハ廢却スベシ第六百三十一條

シ第六百三十一條

皇帝ヨリ復權ノ願ヲ允許シタルキハ復權狀ヲ渡スヘシ第六百三十二條

其復權狀ハ嘗テ見込書ヲ差出セシ控訴院ニ送ルヘシ

又嘗テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニモ亦タ復權狀ノ公正ナル寫ヲ送ルヘシ但シ其復權狀ノ寫ハ刑ノ言渡書ノ正本ノ端ニ記入スベシ第六百三十三條

一千八百五十二年七月三日、六日ノ法律草案説明書ニ云ク行政官ハ檢事ヨリ願書ヲ受ケ取り之が見込ヲ立ツベシ而シテ司法官ハ其見込書ヲ考査シ又自ラ所見ヲ陳ブベシ若シ其所見復權ヲ允許セザルノ説タルキハ右願ヲ却下スベキモノトス

行政官之ニ付キ相談ヲ受クルトキハ可否ノ答ヲナスヘシト

輒近ノ治罪法ニ於テハ一千七百九十一年九月二十五日ノ法ノ如ク演劇ニ類スル復權ノ程式ヲ保存セズシテ願人ノ裁判所ニ出頭スルヲ要

セズト雖也必ズ此願ヲ公ニセサルベカラズトセリ故ニ其願ノ公
 告ハ之カ見込ヲ立ツベキ裁判所々在ノ地ノ裁判日誌及ヒ刑ヲ言渡シ
 タル地ノ裁判日誌ニ登録セリ是レ即チ衆人ニ意見ヲ問フガ爲メナリ
 ト雖也抑是ノ如クシテ得タル所ノ意見ハ果シテ信ヲ措クニ足ルベキ
 乎其意見ヲ立テタル心思ハ純然タリシヤ否ヤ決テ怨恨忌惡ノ情ヲ
 發セザリシ乎誰彼レノ別ナク一同問接ノ諮詢ヲ受ケタルニ温良ノ
 徒アリテ其誠心ヲ致シ能ク平心眞實ヲ明ス者アリトスル乎且ツ夫レ
 現今ノ行狀ヲ查明セント欲シ故ラニ舊惡ヲ今日ニ提出スルハ嘗テ省
 思悔悟シ自改淬勵シテ僅ニ得タル所ノ多年ノ果物ヲシテ幾ンド無用
 ニ歸セシムルナキヲ得ンヤ論者ハ云ク罪惡ヲ白狀シタル後ハ國君ニ
 テ其責罰ノ完了シタルヲ公告スベシト然レモ是ノ如ク痛ク行狀ヲ查
 驗セラレタリトテ其美効ヲ奏スルヲ必ス可カラズ況ンヤ一旦美効

新誌ニ登載
 スルヲ廢シ
 タル

ヲ致スアルモ之ガ爲メニ全ク罪惡ヲ償フタリト謂フベカラザルヲヤ
 是ノ如キガ故ニ復權ノ願ヲ新誌ニ登載スルヲ廢止シ唯之ヲ邑會ニ附
 スルニ決セリ

司法官ノ見込ニ於テハ復權ヲ允許スベシト決スト雖也行政官之ヲ許ス
 ベカラズトスルモハ刑人ニ於テ永久若クハ一定ノ時間第六百四
 十九條
 ○(恐ラクハ六百二十九條ニ非ラサル乎)ニ更ニ其願ヲナスベカラザル乎
載セタル規則ヲ推シテ二年トスル如キ曰ク否此ノ條目ニ付テハ法律ニ明文ナシ唯之ヲ廢棄スルハ第六百三
 十一條
 願人ヲ不適當トスルガ故ニ非ラズシテ乃チ其行狀ノ試未ダ十分ナラ
 ズトスルガ故ノミ
 復權ノ効ハ如何

復權ノ効

第六百三十四條ニ云ク復權ヲ得タルモノハ嘗テ刑ヲ言渡サレタルニ
 因リ失フタル權利ヲ全ク復スベシト

復權論

フホスタン、
エリイ氏ノ
説ト合ハザ
ル

復権ヲ得タル者ハ處刑ノ結果ヲ廢滅スト雖モ其刑ノ言渡ヲ消滅ス
ルヲ得ズ刑ノ言渡ハ法律上ノ事實トシテ依然ト存シ既往ニ効果ヲ
生シ或ハ生シ得タルモ將來ニ之ヲ生スベカラザル事實タルヘシ
フホスタン、エリイ氏ノ言ニ云ク復権ニ因リテ刑ノ言渡ヲ消滅セザル
キハ復権ノ制ハ是レ唯無力徒爲ノ制度ノミト
余此説ヲ可トスルヲ得ズ蓋シ法律上ノ處分ヲ壞滅シ眞實上ノ推測
ヲ犯シ以テ裁判ノ正當ヲ剝取シ得ルモノハ唯彼ノ大赦ノミニアリ然
ルニ復権ニ於テハ裁判ヲ正當ナリトスルハ勿論犯人モ既ニ此裁判ニ
服從シタルヲ以テ刑ノ言渡ヲ執行シ或ハ特赦ニ因リ此執行ヲ釋免ス
ルヲ得ルナリ是レ即チ立法院委員ノ名ヲ以テラングレー氏ガ明言
セシ所ナリ曰ク民事ノ復権ヲ得ル者ハ其重罪ヲ消滅セズ裁判ヲ破壞
セス刑ノ言渡ヲ破壞セスト此議論ヲ以テ文字上ノ論トナスベカラズ

抑此問題タル重大ノ結果ヲ生スベキ者ニテ今余カ駁スル所ノ説ヲ推
スニ下ノ如キ結果ヲ生スベシ曰ク復権ニ因リ刑ノ言渡ヲ廢滅シタル
ガ故ニ復権ヲ得タル者更ニ罪ヲ犯スト雖モ刑ヲ増重スベカラズト其
説ニ云ク復権ヲ得タルキハ其之ヲ得タル者ノ生命ヲ二部ニ分ツ可シ
而シ其二分ハ互ニ混同スベカラズ故ニ以前ノ罪惡ハ既ニ消滅シ以後
ノ罪惡ノミヲ證明シ處刑スルヲ得ベシト
若シ復権ヲ得ルニ因リ刑ノ言渡ヲ消滅セザルキハ再犯ノ章ニ於テ余
カ既ニ論ゼシ如ク復権ヲ得タル者更ラニ罪ヲ犯シテ刑法第五十六條
第五十七條第五十八條ノ要件ヲ具フル以上ハ刑ヲ増重セラルベシ
原則上ヨリ論スレハ是ノ如キ義ヲ生ズルノ事ハ正義ト公益トニ能ク
適合スル者ト謂フベシ如何トナレバ犯人悔悟スルニ因リ社會ニ於テ
ハ早く之ニ信ヲ措キタリト雖モ全ク其悔悟ハ誠實ヨリ出ザルカ或ハ

復權ヲ得ル者ハ公私ノ諸權ヲ悉ク復スヘキ

永續セサリシヲ明ナレバナリ又詐偽修飾ニ因リ犯ス所ノ罪ニシテ刑ヲ加重ス可カラズトスルノ謂ハアラザル可キナリ

復權ヲ得タル者ハ處刑ニ因リ失フタル諸權ヲ盡ク復スルヲ得ル乎即チ民事上ノ能力ト共ニ公務ヲ行ヒ表勳ノ裝飾ヲ帶フル如キ權ヲ復スルヲ得ル乎或ル人ハ之ガ別チ設ケザルベカラズト主張シ刑法第三十四條ノ字面ニ據リテ其證ヲ舉ケタリ刑法第三十四條ニハ剝奪公權ヲ以テ剝奪スベキ諸權ヲ列載シ總ベテ五項アリ論者ノ言ニ云ク第三十四條ノ五項中第三第四項ニ記ス者ハ無能力ニシテ其二項ハ乃チ民權ニノミ關スト

其第一第二第五項ハ諸權ヲ刮取シ除去シ剝奪スルノ事ヲ載セ公事ニ與カルベキ利益即チ諸權ニ關スル者ニテ一旦之ヲ失フハ將來ニ復スベカラズ其不適當ヲ醫治スベカラズトスルナリ蓋シ純然タル人

爲ナ以テ公事ニ與カルノ權ヲ創造スヘカラザルガ故ニ第六百三十四條ニ照シ復權ニ因リ復シ得ヘキ者ハ唯無能力ノミニシテ即チ刑法第三十四條第三第四項ニ記載スル所ノ者ノミトス

一千八百四十三年ニ於テ上院ノ委員巧ミニ前說ヲ詳述セシト雖モ余ハ之ヲ可トスルヲ得サルナリ乃チ以謂ラク復權ヲ得タル者ハ實剝奪公權ノ數箇ノ元素ヲ復スルノミナラズ其全部ヲ盡ク復スベシ公私ノ諸權ヲ舉ケテ舊ニ復スベシト

一千八百五十二年七月三日ノ法律討議ノ際再ヒ前說ヲ發シタルガ如シセントルイユ氏ハ重罪ヲ犯シタルニ付キ刑ヲ受ケタルモノハ復權ヲ得ルト雖モ公權ヲ復スベカラズト論セリ

委員ハ之ニ答ヘテ云ク民權ヲ復セシムルニハ十分ノ保證アリトシ而シテ政權ヲ復セシムルニハ不適當ナリトスルハ是レ豈ニ領會ス可ナザ

商法第六百
十二條ニ據
リテ失ヒタ
ル債ハ復シ
テ得ルモ之
ヲ復ス可ラ
ズ

ルノ事タルニ非ラズヤト
但シ詐偽倒産ノ罪ニ因リ刑ニ處セラレタルモノハ民法上ノ諸權ヲ復
スルト雖モ商法第六百十二條ニ因リ失フタル商法上ノ復權ヲ得可
ズ第六百三 立法院委員ラングレイ一氏云ク民法上ノ復權ヲ得タル者
ハ其刑ノ言渡ニ因リ失フタル諸權ヲ復ス可キモ商法上失フタル諸權
ヲ復ス可ラズ是レ民法上ノ復權ヲ得タル者ハ罪人復權ヲ得タルニ
テ商人復權ヲ得タルニ非サレバナリト

第二十七章 一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及

ビ五月三十日、六月一日ノ法

特赦及ビ復權ノ性質並ニ効果ハ既ニ前章ニ論述シタレハ今廢止准死
ニ付キ一千八百五十四年五月三十一日、六月三日ノ法ヨリ生スル所ノ
二三ノ問題ト徒刑執行ニ付キ一千八百五十四年五月三十日、六月一日

轉遷

右ノ法ヲ以
テ政府ニ委
托シタル權

其性質

ノ法ヨリ生ズル所ノ數箇ノ問題トチ討究セント欲ス亦無用ノ業ニ非
サル可シ若シ前章ニ於テ疾ノ此問題ヲ提擧シタラシムニハ讀者チノ甚
タ解シ難カラシメン
蓋シ廢止准死ノ法第四條ニ據レバ無刑ノ刑ニ處セラレ贈與遺囑チ以
テ財產ヲ授受スルノ權ヲ失ヒタル者ハ政府ニテ其權ヲ復セシムルチ
得ルナリ
余前キニ第十二章ニ於テ大赦ト特赦トチ論ズルニ際シ是ノ如キ權ハ
簡易ナル特赦ノ權ニ非ズノ大概特赦ノ及フ可カラザルチ以テ主刑チ
終リシ後復權チ得ルニ非サレハ消滅ス可カラザル無形ノ加辱ニ就テ
特別ニ特赦ノ權チ擴張シタル者ナリト云ヘリ今茲ニ論ズ可キモノハ
缺ク可カラザル附屬トセズノ附加セラレタル附加刑チ主刑執行中ニ
釋免スルニ在リ

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及ビ五月三十日、六月一日ノ法

犯人ヲシテ
再ビ其權ヲ
失ハシムル
可キ乎

政府ニ於テハ犯人ガ既ニ失フタル權ヲ復セシムルト雖モ再ビ之ヲ失
ハシムルヲ能ル乎
即チ一旦無能力ヲ釋免シタルモハ復タ之ヲ取消ス可カラヤル乎
是ノ如ク釋免スルモハ其効既往ニ及テ他人ガ既得ノ權ヲ害ス可キ乎
此等ノ問題ハ既ニ討究セシテ以テ讀者ノ前章ニ就テ考閱センコトヲ欲
ス

政府ニテ專
權ヲ有スル
源由

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日ノ法第四章ニ記ス所ノ場合
ニ於テハ刑人特赦ヲ受ルモハ他人ニ關スル其失フタル諸權ヲ復スル
ヲ得可シ其例外タル所以ノ理ハ亦既ニ之ヲ説ケリ此場合ハ乃チ刑人
ガ失フタル所ノ權ヲ其刑期中ニ復セシムルニ在リ然ラバ則チ主刑ヲ
終リ解放ノ後行狀端正ナル等ニテ復權ヲ允許スル如キコトハ無用ナル
ガ如シト雖モ決テ然ルニ非ズ一日モ早く刑人ガ悔悟自改スルコトハ國

有期刑ニ處
セラレタル
者復權ヲ得
ルニハ必ず
之ヲ願ハザ
ル可カラズ

刑ニ處セラ
レタル者復
權ヲ得タル

家ノ大益タルヲ以テ法律ハ縱令其未ダ主刑ヲ終ヘサルモ諸權ヲ復ス
ルヲ熱望シ以テ勉メテ自改ノ美効ヲ表セント欲スルヲ獎勵シ容易ナ
ラシムル可キ方法ヲ政府ニ附與セリ是レ即チ行政官ガ特別ニ專權ヲ
有スル所以ナリ苟モ是ノ如クナレバ其原因ノ後ニ於テ右ノ專權ヲ行
フ可キ乎

若シ無期刑ニ處セラレタル者減刑ニ因リ有期刑ヲ受ケ而シテ其刑期ヲ
終リシモハ其刑ノ附加トシテ失ヒシ所ノ諸權ヲ復セント欲セバ復權ノ
願ヲナシ諸般ノ法式ヲ履マザル可カラザル乎余ハ之ヲ然リトスルナ
リ夫ノ所謂例外ハ法律ニテ制限シタル區域内ニ於テ之ヲ行フモハ固
ヨリ正當ナリト雖モ若シ之ヲ擴張シテ其目的外ニ及サシムルコトアレ
バ是レ其當ヲ失スル者ト謂フ可シ

第四條ニ據レハ第三條ノ規則ニ因リ刑人ガ失ヒシ諸權ノ全部若クハ

片ハ其管テ
取結タル遺
囑契約ハ効
ヲ生ス可キ
別手及ビ其區

一部ヲ政府ニ於テ復セシムルヲ得ルト雖モ其無期刑ニ處セラル、前
取結ビタル所ノ遺囑ノ契約ヲ効アラシムルヲ得ルノ專權アル可キ
乎

恩惠ニテ授與スルノ權ヲ失ヒシ者死シタルキハ政府ニ於テ其契約ヲ
シテ効アラシム可カラザルハ勿論トス何トナレハ則チ若シ之ヲ効
アラシムルキハ是レ其特赦タル既往ニ及ビ血縁ノ相續人が既ニ得タ
ル所ノ財產ヲ剝奪スルニ至レバナリ

然ルニ今其刑人生存スルトセン其主刑執行中政府ハ贈與遺囑ノ權ヲ
復ス此ノ如キ場合ニ於テ前ニ刑ヲ言渡サレタルニ因リ取消シタル遺
囑ノ契約ハ當然効アルヲ得ル乎特赦ハ固ヨリ將來ニノミ効アリテ既
得ノ權ヲ害ス可カラズト雖モ相續ハ未ダ開ケザルヲ以テ何人ノ權ヲ
モ害セザル可シ然ラバ則チ何故ニ特赦ヲ受タル者ハ將來遺囑ノ契約

ヲナシ得可キヲ以テ更ニ舊約ヲ改結セザル可カラズトスル乎蓋シ法
律ニ於テ遺囑ノ舊約ヲ既ニ取消シタレハナリ抑刑人ニ於テハ自ラ其
契約ヲ取消スト、雖モ今日ニ在テハ舊意ヲ變シタルモ未ダ知ル可カラ
ズ又前キニ情意ヲ表シタルモ刑ニ處セラレタルニ因リ全ク無用ニ屬
シ舊約ハ復タ今日ニ存セズト思惟セシガ故ニ之ガ取消ヲナサハルモ
亦未ダ測ル可カラザルナリ是レ道理ノ當サニ然ルベキ所ニシテ法理
ニ適フモノナリ故ニ遺囑ノ契約ヲ取消スハ無能力ノ結果ニシテ其失フ
所ノ權ハ將來ニ向フテノミ復スルヲ得ル者トス
若シ遺囑者ハ終身其失ヒシ權ヲ復サザリシトノ推測ノミヲ以テ其
遺囑契約ヲ取消ス可シトセハ其未ダ死セザル前ニ於テ右ノ契約執行
ヲ妨ク可キ者消滅シタルキハ其契約ハ下ノ規則ニ從テ効ヲ生セザル
可カラズ曰ク中間ノ時ヲ以テ損害ヲ生ズ可カラズト

若シ新法ニ於テ唯終身其失フタル權ヲ復サベリシ者ノナシタル遺囑
 契約ノミハ効ナカル可シトセントナラハ無期施體ノ刑ノ言渡ニ付テ
 ノミ不求償ニテ財產ヲ贈遺スル權ヲ剝取ノ十分ナラン何トナレハ遺
 囑者死スル時ニ當テハ遺囑ノ權ヲ復シ月日ノ何如ヲ論ゼズ其遺囑ノ
 契約ハ効アル可キヲ以テナリ然リ而シテ法律ハ無施體ノ刑ニ處セラレ
 タル者ハ養給ノ故ニ非ザレハ遺囑ヲ以テ財ヲ贈與ス可カラズトノミ
 言ハス尙ホ之ニ附加ノ云ク「凡ソ通常處斷ハ前ニ取結ビタル遺囑ノ契
 約ハ既ニ確定スルト雖モ無効タル可シト」

シユウエル
 エー氏ノ
 説ト合ハス

シユウエルエー氏云ク「相續ノ開クル迄不適當タルニ非ザレハ其遺囑
 ナシ無効タラシム可カラズト」
 然レモ何故ニ刑人カ受タル遺囑ハ据置キ其自ラナシタル遺囑ノミチ
 ノ無効ニ歸セシムル乎是レ遺囑者ガ死ニ當リ遺囑ヲ受タル者財產ヲ

受ルノ權ヲ復シタルトキハ其遺囑契約ノ執行無カル可カラズト雖モ
 遺囑ヲナシタル後無期施體ノ刑ニ處セラレタルモハ唯無能力トナル
 ノミナラス全ク其契約ヲ無効タラシムルヲ以テ之ガ執行ヲナス可カ
 ラザルニ非ズヤ或人ハ云ク「刑ノ執行前遺囑ヲナシタル者復權ニ因リ
 遺囑ヲナスノ權ヲ復シタル時ハ一千八百五十四年五月三十一日六月
 三日ノ法律布告ノ前ニ在リテハ其契約ヲ執行スルヲ得タリ是レ那波
 翁法典第二十五條ニ於テハ財產ヲ擅ニスル權ヲ失フ時ハ處刑以前ニ
 ナシタル遺囑ヲ取消ス可シトナサザルニ由ルナリト然レモ第四條ニ
 據レハ法律ヲ以テ刑ノ言渡ニ付キ契約ヲ取消ス可キ政府ニ於テ免ル
 スノ權ヲシ余ガ見ル所ヲ以テスレバ縱令明ニ右ノ取消ヲ免スモ其効
 ナカル可シトスルナリ此問題タル決テ無用ノ者ニ非ス例ヘバ刑人精
 神錯亂シ十分其意思ヲ表シテ効アラシムルヲ能ハズトセン其相續ヲ

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及五月三十日、六月一日ノ法

復権ノ効ヲ引照ス

政府ニ附與シタル他ノ權

其血縁ノ者或ハ設定ノ相續人ニ附スルハ政府ノ關スル所ナラン乎蓋シ釋然タル可シ

處刑以前ニナシタル遺囑ニ付キ一千八百五十四年五月三十一日六月三日ノ法第四條ニ因リ政府ニ於テ有スル所ノ專權ニ關シテ上ニ論シタル所復權ニ付キ亦之ヲ適用スルヲ得可シ刑ニ處セラレタル者其失ヒシ諸權ヲ復スト雖ヒ其既ニナシタル遺囑ノ意思ヲ復ス可カラズ

一千八百五十四年五月三十一日六月三日ノ法律ニ據レハ政府ニ於テハ刑人法律上ノ禁ヲ受ルニ因リ失ヒタル民權ノ全部又ハ一部ヲ刑ノ執行地ニテ使用スルヲ許ス可キ權アリ是ノ如ク政府ニテ寬典ヲ行フハ刑人カ行狀ヲ試驗スルガ爲メニシテ假リニ其權ヲ行フヲ許スモ之ヲ取消スヲ得可キ者乎

此問題モ亦讀者ノ大赦特赦ノ後章ニ就テ考究セシトテ欲ス

復権ヲ得テル者ガ管テ取結タル契約ノ効ニ付キ第四條ハ何ノ義ヲ以テ之ヲ制限スル乎

第四條ハ刑人ガ權ヲ制限シテ其回復シタル權ヲ用ヒテ取結タル契約ハ刑ノ執行地ニテノミ効アリトスル者ノ如シ是ノ如キ制限ヲ立ツルハ甚タ解ス可カラザル事タリ夫レ法律ハ其民權ノ全部又ハ一部ヲ復セシニ因リ取結タル契約ハ執行地ニテ其効アル可キモ他ノ場所ニ於テハ力ナシトセント欲セシ乎余ヲ以テスレハ法律上ノ禁ハ婚姻ノ障礙トナルヲ以テ凡ソ此ノ禁ヲ受タル者ハ婚姻ヲ取結ブヲ得ズ然ルニ今政府ハ其障礙ヲ除去セリ將タ被禁者ガ取結タル婚姻ハ諸所ニ於テ正當ナラザル者トスル乎

法律上ノ禁ヲ受ル者ハ後見人ノ如キ媒介人ニテ行フ可キ諸權ノミヲ失フトセン乎然レハ被禁者政府ノ許可ヲ受タルニ因リ刑ノ執行地ニ於テ自ラ借金ヲナスコアラシニ其財產ノ所在如何ヲ論ゼズ法律ニ於テ擅ニス可カラズト定メザル所ナリト云ノミヲ以テ其有スル所ノ總

テノ財産ニ對シ右ノ義務ハ効ナク且執行ヲ求ム可カラザル乎又刑ノ
 言渡ヲ受タル後自己ノ名ヲ以テ要償ノ契約ニ因リ得タル所ノ總財産
 ニ對シテモ其所在ノ如何ヲ論ゼズ亦右ノ義務ノ執行ヲ求ム可カラザ
 ル乎曰ク萬々此理ナシ必ズヤ執行地外ニ於テ民權ノ行用ニ迫及スル
 ヲ得可シ

又法律ハ刑ノ執行地外ニ於テハ後見人ニ托スルニ非ザレバ他ノ代理
 人ヲ用ユ可カラズトシタリシ乎刑人代人ヲ撰ミ政府ニ於テ刑人ニ自
 ラ爲スヲ得可キ權ヲ與ヘタル事ヲ其代人ニ托スルヲ得可カラザル乎
 一千八百十年ノ刑法第十八條ニ據レバ流刑ニ處セラレタル者ハ准死
 ヲ受タル時ト雖モ政府ニ於テ其失ヒシ諸權ノ全部又ハ一部ヲ謫所ニ
 テノミ行用スルヲ許スノ權アリシガ今上ニ舉タル事項ノ如キハ能ク
 之ニ類似スルナリ

流刑ニ引照
 ス○一千八百
 十年ノ刑
 法第十八條

一千八百十年二月十二日ノ法案説明書ニ於テオーヘルサールノ載セ
 タル論ニ云ク仁恩ナル政策ヨリ出デシ此條目ニ因リテ流刑ニ處セラ
 レタル者ハ勉テ美事善行ヲナシ孳々トシ事業ヲ罷メ通常ノ人トナリ
 テ以テ植民ノ分限ヲ得ルニ汲々タラシ故ニ此規則ハ善良ノ人トナル
 ヲ獎勵スルモノナリ又植民制ニ付テモ囚人ノ住居スルヨリ良民ノ住
 居スルハ利アル可ク而シテ所有及ビ國民ノ分限ヲ得セシメテ茲ニ永住
 スルニ至ルハ最モ益アルヲ以テ此方法タル植民ノ目的ニ於テモ亦利
 ナキニアラザルヘシト

一千八百九年二月二十一日ノ參議院會議始末書ニ於テ右ノ特別法ヲ
 施行スルニ付キ實際生ズ可キ困難アリシニ皇帝ノ英敏ナル之ヲ等閑
 視セザリシ事情ヲ詳載セリ其文ニ云ク

皇帝陛下問テ曰ク流刑執行ニハ一定ノ方法アリ而ルニ其刑ニ處シタ

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及ビ五月三十日、六月一日ノ法

ル者ニ民權ノ全部或ハ一部ヲ復セシメントスルハ實際如何ニ之ヲ施行セント欲スル乎ト

ドレイヤール之ニ答ヘテ云ク唯謫所ニ於テノミ其權ヲ復セシメントスルノミト

其時ルギニヨ一ノ言ヒケルニ既ニ住民アルノ地ニハ罪人ヲ送クル可カラズ從前ノ住民ハ法令ヲ犯シ刑罰ノ耻ヲ受タル輩ト雜居スルヲ欲セザル可ケレハ何事モ棄テ置キ先ツ流刑人移植ノ方法ヲ論定セザル可カラズ而シテ其方法タルボタニ一ニ一ニ英國ニテ罪囚ヲ送致スルノ如キ居留地ヲ創設スルカ或ハ唯一定ノ地ヲ設ケテ此ニ居ラシムルカ蓋シ此二者アルノミト

デフェルモンモ亦起立シテ云ク其罪人ト雖也以前ノ罪惡ヲ贖フ可キ功勞ヲ致ス一アリ例ヘハ國家ノ寇讎ヲ却ケタル如キ實ニ協力シテ危急

ヲ救ヒシコアル他ノ住民ハ主トシ其國民タラシキ願フ可シト

皇帝陛下謂テ曰ク他ノ住民ノ在ラザル地ニ之ヲ集ムルヲ要セバ唯一

區ヲ限リテ住セシメテ可ナリ例ヘハ他ノ住民ノ居地ニ於テ廣サ六

ユ一我一里餘ハ四方ト定ムルガ如キ可ナリ而シテ若シ其罪人民權ヲ復

スルハ右四方六リユ一以內ノ地ニ於テハ其權ヲ行フ可キモ其以外

ニ於テ之ヲ許サズトス可シ然レ其他尙決定ス可キ問題許多アリ例ヘ

ハ謫所ニ於テ民權ヲ復シタル者ハ遺囑ヲナスヲ得可キ乎又刑ヲ言渡

サザルハ既ニ結婚セシ者ハ更ニ婚姻ヲ取結フヲ得可キカ到底流刑ノ

事項ニ付テハ一章ヲ供スルヲ要ス可ク又此草案ニ付テハ立案委員ノ

尙ホ熟考ヲ遂ケ適切ノ説明ヲナス可キガ爲メニ暫ク之ヲ廢却スト然

ルニ其後ニ至リ之カ説明ヲナス者アラザリキ

一千八百三十二年四月二十八日ノ法第十八條ニ於テハ謫所ニ於テト

一千八百三十二年四月

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及五月三十日、六月一日ノ法

法二十八日ノ

一千八百五十年六月八日ノ法第三條

云ヘル制限文字ヲ削除シタルガ故ニ嘗テ廣狹ノ判然セザリシ制限ヲ消滅スルニ至レリ

一千八百五十年六月八日ノ法第三條ニ於テハ輕流刑ニ處セラレタル者ハ法律上ノ禁ヲ受シ時ト雖ヒ謫所ニ於テ民權ヲ行フヲ得可シトセリ

當時既ニ准死ハ廢セラレタルヲ以テ流刑ノ執行ニ付テ之ヲ受ルル無カリキ

一千八百四十九年二月九日ロダ一氏ガ國會ニ呈セル意見書ニ云ク法律上ノ禁ヲ受シ者ハ何レノ地ト雖ヒ其失ヒシ權ヲ行フ可ラスト雖ヒ第二等ノ流刑ニ處セラレタル者ハ謫所ニ於テノミ民權ヲ行フヲ得可シト又云ク其處刑ニ因リ確定セラレ踰越ス可カラザル地内ニ於テハ全ク自由タラザル可カラズ其限界ノ只自由ノ行用ヲ制限スルト均シク

民權行用ト取結ヒ得可キ契約ノ効トヲ制限スルコトヲ要スト

之ニ由テ是ヲ觀レハローダ氏ハ其謫所ニ於テ取結タル契約ハ謫所ニ於テノミ効アリカアル可クモ謫所以外ニ於テハ効力ナシトスルナリ然ラバ一千八百五十年六月八日ノ法第三條ノ末項ニ記ス所果テ何ノ爲ゾヤ第三條ノ末項ニ云ク

「政府ハ其輕流刑ニ處セタル者ノ財產ノ全部又ハ一部ヲ復スルヲ許スヲ得可シ

其財產ヲ復スル場合ヲ除クノ外其謫所ニ於テ取結ビタル契約ハ其刑ヲ言渡サル、ニ際シ有スル所ノ財產及ビ相續或ハ贈與ニ因リ受タル所ノ財產ニ付テ執行ヲ求ムルヲ得可カラズト

若シ流刑ニ處セラレシ者ノナシタル契約ハ謫所ニ於テノミ効アルナレハ其契約ハ刑ヲ言渡サレシ前ニ得タル所ノ財產及ビ其後無求償ニ

テ得タル所ノ財産ニ付テ執行ス可カラズト言フハ抑、何ノ爲メグヤ此規則ハ原來其謫所ニ在ル所ノ財産ニ就テ其義務ヲ執行スルヲ妨止スルガ爲メノミ乎其是クノ如キ特別例外ナル場合ノ爲メタラザルハ明カナリ

余ハ此論ヲ細述セザルヲ得ザルナリ如何トナレハ一千八百五十四年五月三十一日六月三日ノ法第四條ニ於テモ亦同一ナル問題ヲ生ズルヲ以テ同一ナル決定ヲ爲ササル可ラザレハナリ第四條ノ文ニ云ク其謫所ニ於テ取結タル契約ハ其刑ノ言渡サル、時有セシ所ノ財産或ハ其後無求償ニテ受タル所ノ財産ニ就ヒテ執行ヲナス可ラズト若シ此契約ハ刑ヲ執行スル地ニ非ザレハ効ナシトスルキハ何ノ故ニ其刑ノ言渡前後ニ有スル所ノ財産ヲ擅ニス可ラサル者トナス乎
常法ニ從テ贈與或ハ遺囑ニ因テ財産ヲ擅ニス可キ權ヲ政府ヨリ得タ

刑人ノ復シタル遺屬又

ハ贈與ノ權

ル者ハ其刑ノ言渡前後ニ有スル所ノ財産ヲ擅ニスルヲ得可キ乎若シ贈遺ス可キ權ヲ全然得タルキハ其財産ヲ擅ニスルヲ得可シ又第四條ノ此末項ハ無求償ニテハ從前ノ如ク財産ヲ移轉ス可ラズト雖モ唯法律上ノ禁ノ制限ヲ受ケ自己ニテ契約ヲナス可キ權ヲ復シタルヲ以テ取結タル契約ニノミ適用スルヲ得可シ即チ後見ヲ免レタル者ニノミ適用ス可ク而シテ第三條ニ記シタル無能力ヲ復シタルニ付毫モ其結果ヲ制限スルコトナシ第四條ノ第三項ハ其第二項ニノミ對照ス可シト雖モ之カ區域ヲ制限スルガ爲メ其第一項ノ規則ニ涉ルコトナシ刑ヲ執行スル地ニ於テ法律上ノ禁ヲ解カル、モ之ニ因リテ生存中ノ贈與或ハ遺囑ヲ以テ財産ヲ移轉スルノ權ヲ復ス可カラズ然レモ其贈與遺囑ヲ以テ財産ヲ移轉スルノ權ヲ復シタル時ハ法律上ノ禁ノ幾分ヲ解カル可キ筈ナリ何トナレハ則其復シタル能力ヲ行ヒ得ルニ非サ

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及ビ五月三十日、六月一日ノ法

レハ遺囑ヲナスモ其効無カル可ケレハナリ尤モ贈與ヲナス時ハ後見人ヲ以テ代理トナスヲ得ベケレ凡ソ後見人ノ職務ニ事物ヲ管理スルニ在ルヲ以テ是ノ如キ事ハ乃チ其權限ニ踰ユル者ナルニ何故ニ刑人ニ於テ其權ヲ復シタル時ノ爲メ法律ニ於テ豫メ定メタル代人トシテ後見人ヲ以テ之ヲ紹介ヲサシムル乎蓋シ贈與遺囑ノ權ヲ復スレハ法律上ノ禁ノ幾分ヲ解カル、ヨリ甚タ緊要ニ屬ス可ク而シテ復セシ時ハ至ク其自由ヲ行フヲ得可シ

無期刑ニ處セラレタル者贈與遺囑ノ權ヲ復シタル時ハ其刑ノ執行地ニ於テ取結タル要償ノ契約ニ付キ其初メ刑ヲ言渡サレシ時有スル所ノ財産若シクハ其後無要償ニテ受シ所ノ財産ヲ以テ之ヲ保證トナス可キ乎第四條ノ末項ノ文面ニ依レハ之ヲ然ラズトス可キ者ノ如シ然レ果シテ法律ノ真意タル乎蓋シ如何ナル財産ト雖モ刑人ハ無要償ニ

テ之ヲ擅ニス可カラサルハ刑ヲ言渡サレシ後己レカ名ヲ以テ他人ガ得タル所ノ財産ノ上ニ非サレハ義務ヲ創立スルヲ得サルハ至當ナル可シト雖モ而モ法律ハ無要償ノ契約ニ付テハ寬ニシテ要償ノ契約ニ付テハ嚴ニシテ事物管理上ノ契約ハ或ル財産上ニ付テノミ其執行ヲ求ムベキ者ナルニ恩惠ノ契約ニハ總財産ヲ包括ストスルハ果シテ至當ナラン乎

以上新法ヨリ生ズル所ノ至要ナル疑議ニ就テハ其二三ヲ舉ケタリ是レ其疑議ヲ決定セントノ目的ニハ非ズ唯タ讀者ヲ能ク之ヲ了解セシメント欲セシノミ蓋シ是ノ如キ者ハ多年ノ後ニ非サレハ其適切ヲ知ル可カラサルモノニテ理論實際ニ於テモ亦未タ善良ノ確説ヲ得ザル程ナレバ今敢テ遽カニ之ヲ決定ス可キニ非ズ今之ヲ茲ニ舉示シタル者ハ其條目ハ固ヨリ實際生スル所ノ諸般ノ問題ニ適切セズト雖モ

要略

一々之ニ慣熟セシメンガ爲メニ其豫備ヲナセシニ過ギズ
 又以上論ズル所ヲ畧言センニ無期刑ニ處セラレタル者ノ民事上ノ分
 限ハ其唯贈與遺囑ノ名ヲ以テ財産ヲ受クルノ權ヲ失フニ因リ有期加
 辱ノ刑ニ處セラレタル者ノ分限ト異ナルノミ又法律上ノ禁ヲ受タル
 時ハ自然贈與遺囑ノ權ヲ失フ可キガ故ニ有期刑ニ處セラレタル者モ
 無期刑ニ處セラレタル者モ均シク贈與遺囑ノ權ヲ失フ可シ唯其無能
 カハ法律上ノ禁ヲ受ケタルニ因リテノミ生ジタルキハ一定ノ期限ノ
 至リシカ特赦ヲ受シカ若クハ期滿免除ヲ得タリシ時ハ其理由即チ主
 刑ト俱ニ止ム可キナリ
 之ニ反シ無期刑ノ結果トシ言渡シタルニ因リ贈與遺囑ノ名ヲ以テ財
 産ヲ受ルノ權ヲ失ヒシキハ政府ニ於テ之ヲ復セシム可キ權ヲ行ハザ
 ル以上ハ縱令特赦ヲ受ルト雖モ滿免ノ期ニ至ルト雖モ其權ヲ復ス

ヲ得ザルヘシ

今一千八百五十年五月三十日、六月一日ノ法律ニ於テ徒刑執行ニ付キ
 生スル所ノ問題ヲ説カザルベカラズ

凡ソ徒刑ニ處セラレタル者ハ解放後永久或ハ日數ヲ限リテ其刑ヲ執
 行セシ地ニ住居スルヲ要ス此レ即チ附加刑ニシテ社會保護ノ爲メナリ
 犯人若シ八年以下ノ刑ニ處セラレタル時ハ其住居スル期限ハ其執行
 ス可キ主刑ノ期限ト同一ナル可シ其特赦ヲ受タルニ因リ實際執行ス
 可キ期限ニ比ス可カラザルナリ

特赦ハ常ニ此住居ノ義務ヲ免ス可キ乎

一千八百五十四年ノ法ハ第六條ニ於テハ蓋シ十分ニ問題ヲ決定セザ
 リシナリ

全主刑ノ釋放或ハ其尙ホ經歷ス可キ殘餘ノ時間ノ釋放ヲ受ルト雖モ

一千八百五
 十四年五月
 三十日六月
 一日ノ法

其法ニ記ス
 處ノ附加刑

特赦ヲ受ク
 ル時ハ右ノ
 義務ナキ乎

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及ビ五月三十日、六月一日ノ法

特赦狀ニ明
文ナシト雖
モ其刑ヲ終
リシキハ右
ノ義務ヲ免
ル可キ乎

當然住居ノ義務ヲ免ル可カラズ特赦狀ニ明文アルニ非ザレバ此釋
免ヲササルモノトス是レ乃チ第六條ニ記載スル所ナリ
此條ノ末項ハ主刑ヲ釋免セシ時ニノミ適用ス可キ者ニテ政府ハ此刑
ヲ釋免スルト共ニ刑人ヲ其親族及ビ其利益ヲ受ク可キ地ヨリ離レ
シム可キ所ノ刑ヲモ併セテ釋免スルヲ得可シ或ル人ハ以爲テク特赦
ヲ以テ主刑及ビ附加刑ナルニ刑ヲ併止シ以テ刑人ノ失望ヲ防キ以テ
其復善ヲ獎勵ス可シト
其刑ヲ終リシカ或ハ之ガ釋免ヲ得タル者特赦ヲ受ルキハ其特赦狀ニ
第六條ニ記シタル如キ明文ナシト雖モ刑ヲ執行シタル地ニ住居スル
ノ義務ヲ免カル可キ乎第六條ニ因リ政府ガ特別ニ有スル所ノ專權ハ
行フ可カラザル乎蓋シ此ニノ場合ニ於テハ復權ハ必ズシモ力ナキニ
非ズ歲月ヲ經ルキハ之ヲ適用ス可キニ至ル可シト雖モ然モ刑ノ執行

徒刑ニ處セ
ラレタル者
附加刑トシ
テ附刑トシ
テ監視ハ特
赦ノ因リ免
ル可キ乎

地ノ制ハ其要件ト矛盾スルコトナキ乎又法律ノ意ハ政府ヲ善行ヲ獎
勵スルノ方法ヲ行ハシムルニ在ラザル乎主刑執行中ニ非ザレバ此專
權ヲ行フ可カラズトスルキハ是レ其專權ノ効ノ一部ヲ失ナハシムル
ニ非ザル乎
一千八百五十年ノ法律ノ後ニ於テモ尙ホ有期徒刑ノ結果トシ監視ナ
ル附加刑ヲ受ル者ハ特赦ニ因リ之ヲ釋免セラル可キ乎
先ツ刑法第四十七條ハ徒刑ニ關シテハ暗ニ既ニ廢セラレタルニ非ザ
ルカ
八年以下ノ徒刑ニ處セラレタル者其言渡サレシ刑ノ期限ニ等シキ時
間刑ヲ執行シタル地ニ住居セシ後ハ固ヨリ佛國ニ歸ヘルヲ得ベシ故
ニ又社會ハ之ヲ監視ニ附セザル可カラズ
其八年以上ノ刑ニ處セラレタル者モ特赦狀ノ明文ヲ以テ住居ノ義務

一千八百五十四年五月三十一日、六月三日及ビ五月三十日、六月一日ノ法

チ免ル可キガ故ニ社會保護トシテ又之ヲ監視ニ附セザル可カラス之
 ニ由テ是ヲ觀レハ刑法第四十七條ノ有期徒刑ニ關スル者ハ一千八百
 五十四年ノ法律ヲ以テ暗ニ廢除セラレザルコトヲ知ル可シ
 果シ然ラバ則チ監視ハ是レ刑人カ分限ヲ變換シ其自由ニ住居ヲ定ム
 ルノ權ヲ奪フガ故ニ特赦ノ効ノ與カル可キ所ニ非ストス故ニ監視ハ
 例外ニ屬ス可キモノニ非スノ普通法ニ隨ヘハ獨リ復權ニ因リテノミ
 釋免スルヲ得可キ者ナリ

一千八百五十四年ノ法第十二條ニ依レバ政府ハ有期徒刑ニ處セラレ
 タル者ニ刑ヲ執行スル地ニ於テノミ其法律上ノ禁ヲ受タルニ因リ失
 ヒシ所ノ民權ノ全部或ハ一部ヲ行フヲ許スコトヲ得ルナリ此ノ條ハ上
 ノ第四條ト大ニ關係スル者ニテ前文ニ講究シタル問題ヲ生出ス可シ
 即チ刑ヲ執行スル地ニ於テ取捨タル契約ハ他處ニ於テハ無効ニ屬ス

一千八百五
 十年五月三
 十日第六十
 二條ヲ以テ
 政府ニ附與
 シタル權

可キカ其契約ハ刑ヲ言渡サレシ時有所ノ財產若クハ其後相續贈
 與遺囑ニ因リテ得タル所ノ財產ニ付テ効力ヲ有セザル乎刑ヲ執行ス
 ルノ地ノ外ニ於テハ必ス後見人ヲ以テ己レガ代人トナサザル可カラ
 ザル乎刑人が自己ノ使用ノ爲ニ或ル財產ヲ授與セシ契約ハ取消ス可
 カラザルニ非ザル乎

政府ニ於テ財產ヲ擅ニスル權ヲ有スルハ是レ法律上ノ禁ヲ受ル者生
 存中ノ贈與及ビ遺囑ノ權ヲ失フト云フノ義乎蓋シ法律ニ於テ特別ナ
 ル附加刑トシテ贈與遺囑ノ權ヲ奪フ者唯其無期刑ニ處セラレタル者ノ
 ミニ在リテ而シテ有期刑ニ處セラレタル者モ亦其期限間ハ此無能力ア
 リト雖モ是レ唯法律上ノ禁ヲ受タルノ效ナルノミ政府ニ於テハ右法
 律上ノ禁ノ全部或ハ一部ヲ免ル可キ權アルヲ以テ若シ贈與遺囑ノ
 權ヲ與フルヲ欲セサル時ハ之ヲ例外ニ附セザルヲ得ザル可シ故ニ第

一千八百五十四年ノ法其布告以前言渡サレシ刑ニ適用ス可キ乎

十二條ノ第二項ハ必要ナルモノニ非ス第一項ノ實施ニ過ギサルナリ
一千八百五十四年ノ法ハ唯刑ヲ執行スル方法ノミヲ變換シタルヲ以
テ既往ニ及ブコトナク其布告前ニ言渡サレシ刑ニモ之ヲ適用スルヲ得
タリ然レ主刑ヲ執行セシ後其地ニ住居スルノ義務ハ前ノ法ニ於テ制
定セラレサリシ所タルガ故ニ固ヨリ之ヲ適用ス可カラサルナリ如何
トナレハ此住居ノ義務ハ追加ノ刑タル性質アリテ刑人が地位ヲ増重
ス可ケレバナリ然レ若シ特赦狀ヲ以テ舊法ニ隨フテ言渡サレタル無
期徒刑ヲ易ヘ有期徒刑トナシ其要件トシテ命ゼシ時ハ敢テ不可ナ
ルナキカ余ハ之ヲ然リトセサルヲ得ズ

第二十八章 期滿免除論

夫レ事實ハ歲月ノ久キヲ經ルニ隨ヒ漸々忘却シテ終ニ全ク復タ念ハザ
ルニ至ル者ナレバ犯罪及ビ處刑ニ於テモ亦特赦大赦ノ如キ効ナキ能

期滿免除ノ理ニ基クテ論ス

ハズ法律ヲ犯セシトヨリ數多ノ星霜ヲ經バ犯罪ノ有無性質若クハ其
犯人トノ關係ヲ證明シ得ベカラサルノ一屢之アリ假令僅ニ之ヲ證明
シ得ルモ其困難タル極テ大且誤謬ヲ免レザルベシ是ノ如ク漠然曖昧
タル事件ヲ強ヒテ搜索發顯セント欲スルハ危殆モ亦甚シク又斯ル搜
索ハ果ソ社會ニ利益アルベキ乎何故ニ社會ノ命令ヲ犯シテ刑罰ニ罹
ラザリシ念ヲ再ビ發起セシムベキノ搜索ヲナス乎抑、失念セシノ犯罪
ヲ罰セザルハ危險タル者ニ非ズ蓋シ之ヲ罰セザリシ者ハ刑罰上應報
ノ無効ノ證ニ非ズ夫レ訴ヲ起シ犯人ヲ捕拿スルモノハ先ヅ之ガ證憑
ヲ獲ザレバ不可ナリ少シク證憑ヲ獲稍、爲事人ヲ責アルベシトスルニ
アラサレバ訴ヲ起シ之ヲ捕拿セザルハ是レ治罪ノ通例タリ而シテ今其
失念シタル犯罪ヲ罰セザリシ者誠ニ其刑ニ處スベキ所爲タリシト判
然セザルナリ何ゾ刑罰ヲ要セザリシ犯罪ヲ今日ニ提醒スルコトナサ

ンヤ
 法律ノ權威ヲ表示センガ爲メ經久ノ犯罪ヲ罰セント欲スルモノ是レ
 故ラニ其無力ヲ公示スルニ異ナラサルベキナリ
 或ル場合ニ於テハ之ヲ罰スルモ能ク正理ニ適ヒ裁判官ノ心中ニ於テ
 モ安靜ナルコアルベシト雖モ衆庶ハ其證據ヲ測量シ得ザル者ナレバ
 必スヤ安靜ナラザルコアリテ其處刑ヲ以テ斷然無缺トスル能ハザル
 ベシ抑處刑ノ處刑タル所以ノ者其唯正理ニ適フノミナラズ衆人ニ於
 テモ亦之ヲ然リトスルコト要ス故ニ時アリテ犯人ヲ罰スベキ確證ア
 リト雖モ法律ノ誠實ナル或ハ之ヲ默止ニ附スルコト命ズルナリ是レ
 社會ト其法律ノ濫恣ニ流レンコト欲スレバナリ
 今メスナール氏ガ説ヲ舉テ之ヲ釋明セン曰ク犯罪ノ日ヨリ許多ノ星
 霜ヲ經テ刑罰ヲ加フルキハ其刑罰ノ犯罪ニ適合スル處實ニ僅少ナリ

又其刑罰ノミニ就テ之ヲ觀察セハ其惡ヲ生ズヘキヤ甚タ大而ノ不正
 過分ニ涉ルヲ覺ユルナリ如何トナレバ此犯罪ニハ既ニ妄失消滅セシ
 所アルヲ以テ其刑タルヤ嚴刻ナレバリナリト
 公訴ノ權ヲ消滅スベキ期滿免除ノ根源ハ大赦ノ由ル所ノ道理ト其趣
 キチ同フスベシ
 犯人ガ期滿免除ヲ得ルモノハ其多少ノ時間罰セラレザリシガ故ニ非
 ズ其罰セラレザリシヲ以テ之ヲ罰セザルノ理由ハアルベカラズ蓋シ
 其未ダ刑ニ罹ラザルヲ以テ之ヲ刑ニ懸クベカラズト決定スルヲ得ベ
 カラザルナリ
 又期滿免除ハ犯人心中心ニ於テ責應ヲ受タリト推測スルガ故ニ非ズ何
 トナレバ心中ノ責應ハ社會ニテ施行スベキ所ニ非ザルヲ以テ其事ノ
 確證アリト雖モ社會ノ刑罰ヲ免ルスベキノ理アラザレバナリ況ヤ其

公訴ノ期満
免除ニ付キ
レアル氏ハ
ルイウエ氏
ノ説チ排斥
ス

確證ナキニ於テハ其推測ヲ真正トス可カラザルヲヤ
レアル氏ハ法案説明書ニルイウエ氏ハ立法院ニ呈セル意見書ニ於テ
期満免除ノ説ハ心中責應ノ推測ニ由ルヲ論シル、セリエーロシエール
フホースタン、エリーノ諸氏ハ之ヲ和唱スト雖モ余ハ以テ不可トスルナ
リ抑、公訴權ノ期満免除ノ證ハ大赦ノ如ク爲事人ガ一己ノ私益ノ爲メ
ニ非ズ社會ニ於テ利スル所アルニ由ルナリト夫レ有無ノ判然セザル
犯罪ヲ罰シ不辜タルモ末タ知ルベカラザルノ爲事人ヲ搜索シ爲メニ
公安ヲ擾スガ如キハ社會ニ於テ利アラサルヲ以テ是ノ如キモノハ措
ヒテ問ハザルヲ可トス又其罪狀ノナキヲ必スルニアラズト雖モ唯其
完全ナル確正ノ證明ナキニ由ルナリ
時間ナル者ハ或ハ大赦ノ二三ノ効ヲ生ズト雖モ盡ク之ヲ生ズルモノ
ニアラズ故ニ推測ニ因リ裁判ヲ經タルモノヲ眞實トスルヲ妨グズ又

刑ノ期満免
除ニ付レア
ル氏ハ
ウエ氏ノ説
ヲ排斥ス

刑ノ言渡ヲ消滅セズ其言渡ニ付テハ唯特赦ノ効アルニ過ギズ蓋シ結
果ヲ遏止スルト雖モ源因ヲ存シ置クナリ
刑ノ言渡一旦確定セシキハ罪犯ノ證據既ニ立チ確保スベキ者タルヲ
以テ之ヲ舉ルハ容易ノ業ニシテ復タ甚ダ危険ナル所ナケレバ其刑ノ
期満免除ハ舉證ハ危殆ヲ以テ基本トナサザルヲ知ルベキナリ
然ラバ則チ何ヲ以テ刑ノ期満免除ノ基本トナスベキ乎心中責應ノ推
測ナリトハ法案説明書及ビ立法院ニ呈セル意見書ニ言フ所ニシテボ
ワターロロビエール氏モ亦之ヲ主張ス是レ正義ト公益トヲ以テ刑權
ノ基本トスル説ニアリテハ至當ノ議論ト謂フベシ
然レモ余ハ既ニ是ノ如キモノヲ以テ刑權ノ基本トナサザルガ故ニ又
是ノ如キモノヲ以テ期満免除ノ基本トナサザルナリ若シ心中責應ヲ
受タル確證アリシナラバ其當該セル刑法上ノ責應ヲ免レ刑ノ言渡ヲ

期満免除論

受クベカラストスル乎又其刑ニ處セラレタルモノハ刑名ノ如ク之ヲ受ケズト雖モ之ニ等キ者ヲ受タルガ故ニ其處セラレタル刑ノ執行ヲ免ルスベシトスル乎然レバ則チ其確證ナキニ於テハ是ノ如キ推測ヲシテ如何ニ力アリ効アラシムベキ乎期滿免除ノ基本ハ決テ是ノ如キ者ニ非ズ其利益ヲ受ル者ノ一己ノ私益ハ其由ル所ノ義意ニ拘ラザルナリ訴訟ノ期滿免除ノ基礎タル公益ハ即チ刑ノ期滿免除ノ基礎タルベキナリ

抑刑罰ヲ適用シ執行シテ能ク正理ニ適フ者何ゾヤ

即チ法律ヲ遵奉シ其權力ヲ確立セシムルノ缺クベカラザルニ在リ社會ノ命令ヲ犯スルハ社會ノ刑罰ナカルベカラズ若シ之ニ刑罰ヲ加ヘザルキハ命令ハ唯教諭タルニ過ギスシテ復タ命令タラザル可シ未タ裁判ヲ經ザル犯罪ヲ忘レタリト推測スルキハ之ヲ裁判ス可カラ

ス既ニ刑ヲ言渡シタルヲ忘レタリト推測スルハ之ヲ執行ス可カラズ其故何也トナレハ源因公訴權ノ期滿免除ニ付テハ犯罪ニシテ既ニ公衆ノ意中ニ存セズ感覺ヲ生ゼザルキハ法律ノ利益上ニテ復タ其結果ヲ命ス可カラザレバナリ今夫レ犯罪或ハ罪言渡ノ念ヲ發起セントスルモノ是レ會社ノ害惡ヲ醫セント欲テ却テ之ヲ復セシムルニ異ナラザルベキナリ

又其二種ノ期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ輕重ニ隨フテ變ゼザル可カラズ違警罪ハ輕罪ヨリ忘ル、一速ニシテ輕罪ハ重罪ヨリ忘ル、一速ナル可シ

證明スベキ事件ニ於テ適實ナルモノハ刑ノ言渡ヲ以テ證明セラレタル事件ニ於テモ亦宜ク然ルベキナリ然リト雖モ既ニ證明セラレタル事件ハ未ダ公ニ證明セラレザリシ事件ヨリ其念ヲ遺ス、一久カルベク

レハ刑ノ期滿免除ノ期限ハ公訴權ノ期滿免除ノ期限ヨリ長カラサルヲ得ズ

此原則論ニ就テ尙ホ叙述セン何トナレバ則チ其釋義ニ於テ實際上ノ結果ヲ生スベク又刑權基本ノ説ノ切要タルヲ證ズルニ足ル者アレバナリ

二種ノ期滿免除ハ宜ク犯罪ノ性質ニ隨フベシ其該應シ若クハ既ニ適用シタル刑罰ノ性質ニ隨フベカラザルナリ期滿免除ノ基本ハ余ガ上ニ言ヒシ如クナル以上ハ犯人ガ身分ニ因リ其責ヲ輕フシ其刑ヲ減スルハ如何宥恕スベキ理由アルカ或ハ刑ヲ輕減スベキ情狀アルニ因リ刑ヲ變換セシムルハ如何代事ナルモノニテ責應ヲ受タリトノ推測ヲ以テ期滿免除ノ基本トスルハ勿論期滿免除ヲ以テ爲事人及ビ刑ニ處セラレタルモノ、一己ニ係レル恩惠トスルハ其唯刑ノ性質ニ隨

フテ變ゼザルベカラザルノミナラズ又其期限其輕重ニ隨ハザルベカラザルハ明カナリ而シテ重罪ヲ犯シ懲治刑ニ處セラレタルモノハ施體加辱ノ刑ニ等キ心中ノ責應ヲ受ク可カラズ又有期ノ施體加辱ノ刑ニ處セラレタル者ハ無期ノ施體加辱ノ刑ニ等キ心中ノ責應ヲ受クベカラズ

二種ノ期滿免除ハ犯人或ハ刑人ノ地位ニ關セザルモノニテ犯罪ニ三種ノ別アルヲ以テ亦各三種ノ別アルノミ唯其各種ノ犯罪ニ於テ刑ノ期滿免除ノ期限ハ公訴權ノ期滿免除ヨリ長カル可カラズ

以上法理ニ據リテ之ヲ論ゼリ今歴史ニ就テ之ヲ述ブベシ
羅馬法ニ於テハ最短ナル期限ノ滿免ヲ除クノ外一般ノ規則トスル所ハ重罪ノ訴權ニ於ケルノ期限ハ二十年トセリ弑父母ノ罪ハ決テ期滿免除ヲ以テ之ヲ免ル、トテ得ザリキ

歴史
羅馬法

古法

刑ノ期滿免除ニ付テハ羅馬法ニ明文ナシ然ラバ則チ刑ハ意ニ期滿ニ
 因リテ免ルベカラズトスル乎曰ク否ニ且刑ヲ言渡タル時ハ事實外ノ
 訴權ヲ生ジ三十年ヲ經ルニ非ザレバ之ヲ免ル、エキスヂエシカトトテ得ズ
 佛國刑法史第一期第二期ニ於テ二種ノ期滿免除ノ制ヲ設ケシ乎カビ
 チュレールニ於テハ重罪ノ期滿免除ヲ載セタリト雖モ當時刑罰トスル
 所ハ公益ニ基カザリシヲ以テ能ク此制ト適合スルモノナカリキ又ウ
 シゴットノ法ニハ之ガ明文ヲ載セタリウキシゴットノ法ノ自餘ノ野蠻法ニ卓
 越スルハ世人ノ能ク知ル所ナリ
 封建期ニ於テハ其一定ノ規矩アルヲ見ズ蓋シ其制タル區々ニ別レ僅
 ニ一年ヲ經ルト雖モ重罪ノ訴權ヲ消滅スル源因ト看做セリ
 一千二百四十二年五月聖ルイイ王ノ更ニ布告シタルエイギユ、モルト
 ノ法ハ十年ヲ以テ重罪訴權ノ期滿トセリ

羅馬ノ法典ハ百般ノ事件ニ其勢ヲ與ヘタルモノナレバ此事ニ付テモ
 亦影響ヲ及シ法學士ハ二十年ヲ以テ重罪訴權ノ消滅スベキ期限トナ
 サントテ欲シ既ニシテ實際裁判ニ於テモ亦斯ノ如ク決定スルニ至レ
 リ此期滿免除ノ制タル寛宥ノ規則アリテ既ニ訴ヲ起シ下吟味ヲナス
 ト雖モ續テ之ヲナサバリシトハ亦其訴ヲ免ルヘキノ制ナリキ
 謀殺弑父每放火ノ如キ最大ナル重罪モ亦期滿免除ニ因リテ免ル、
 得タリト雖モ又例外ナルモノナキニ非ズ例ハ天人ノ威權ヲ具シタ
 ル君上ヲ害シタル重罪ノ如キ又一方ノ者訴ヲ起シタルカ或ハ官ニテ
 既ニ訴ヲ起シタル決闘ノ罪ノ如キハ期滿免除ニ因リテ免ル、トテ得
 ザリキ
 或ル重罪ニ於テハ其期滿ノ期限ハ二十年ヨリ短キコアリ
 期滿ノ期限ハ大概重罪ヲ犯セシ日ヨリ起算シ之ヲ發顯シ或ハ其確證

期滿免除論

チ得タル日ヨリ起算セザルナリ
 此期滿免除ハ犯人ニ於テ申立ルチ得ヘキ乎又裁判官ニ於テ其申立チ
 聽クヘカラザル乎刑事上ノ訴權ト共ニ民事上ノ訴權チ消滅スヘキ乎
 此二點ハ議論ノ起リシ所ナリト雖モ根源タル原則ニ付テハ確乎タル
 說アルチ見ルナリ
 一千六百七十年ノ王命ニハ既ニ言渡シタル刑ノ期滿免除ニ付テ明文
 ナシ又抗傳裁判言渡ト雖モ既ニ以形執行アリシキノ期滿免除ニ付テ
 モ亦明文ナシ
 一千七百九十一年九月二十五日ノ刑法ニ於テハ刑ノ特別ナル期滿免
 除ノ制チ設ケタリ
 第三條 刑事裁判所ヨリ言渡シタル裁判ハ如何ナル裁判ト雖モ之チ
 言渡タル日ヨリ滿二十年チ經ルキハ刑ニ付テハ之チ執行スルチ得

中法

可カラズト章第六

刑ノ期滿免除ニ付テハ甚ダ省畧セリ

第一條 滿三年ノ中些少ノ訴モ受ザルキハ重罪ニ付キ訴チ起スチ得
 ヘカラズ章第四

第二條 重罪ニ付キ既ニ訴チ起シタルキハ滿六年ノ中吟味陪審ニ於
 テ吟味スヘキ事アリト申立テザルカ或ハ其訴ノ當不當チ申立テザ
 ル以上ハ右重罪ニ付キ復タ訴チ起スヘカラズ此條ト前條トニ記シ
 タル期限ハ重罪發覺シ或ハ法律上ノ證アリシ日ヨリ起算スヘシ
章第四

第二條ノ末項ハ佛國古法ノ原則ニ反スルチ以テ期滿免除ノ源由トハ
 能ク相適ハザリシナリ期滿免除ノ源由トハ歲月ノ久チ經バ社會ニ於
 テ刑罰チ行フノ利益チ漸微々タラシメ終ニ以テ消滅スルニ至ルヘク

又之ヲ窮査シ得ヘカラザルニ非ズト雖モ其判然タラザルニ因リ或ハ
 誤謬ナキ能ハザル是ナリ
 此期滿免除ハ重罪ノ訴ニノミ適用スヘキモノナリト雖モ一千七百九
 十一年七月十九日、二十二日ノ布告ニ於テハ邑警懲治裁判所ニ付キ別
 ニ明文ナキヲ以テ亦輕罪ニ適用スルヲ得ヘシ
 共和第四年第二月三日ノ法律第九、第十條ニ於テハ滿免ノ期限ニ付キ
 一千七百九十一年ノ法律ニ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ重輕ノ二罪ニ適
 用シ其犯罪ヨリ生ズヘキ公訴ノ權及ビ民事ノ訴權ニ付テモ右同一ノ
 規則ニ準據シ又其犯罪發覺シ且法律上ノ證アルニ非ザレバ期滿免除
 ノ期限ヲ起算スヘカラストセリ是レ其法ニ稍、嚴重ノ規則ヲ設ケタル
 所ナリ

帝國刑法

帝國刑法ニ於テ制定スル所ノ規則ハ甚ダ能ク道理ニ適ヒ決テ舊規ノ

期滿免除ノ
 フノ等級ハ犯罪
 テ變更ニ隨ス

比ニ非ズ
 刑ノ期滿免除ノ期限及ビ訴ノ期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ性質ニ因リテ
 變更シ重罪ニ付テハ其罪ヲ犯シタル日ヨリ滿十年ヲ要シ又若シ既ニ
 訴テナシタルモ其最終ノ手續ノ日ヨリ其期限ヲ算フ輕罪ニ付テハ
 其期限ハ滿三年ニシテ起算ノ方ハ重罪ト同シ違警罪ニ付テハ既ニ訴
 テナシタルモ雖モ其期限ヲ一年トス治罪法第六百三十七條第六
 百三十八條第六百四十條
 七十條ニ載スル左ノ如シ
 第六十七條 死刑或ハ無期懲役ニ處スベキ重罪
 十年以上ノ施刑ノ最重刑ニ處ス可キ
 十年以下ノ施刑ノ最重刑ニ處ス可キ
 罪ニ付テハ之ヲ體刑ニ處ス可キ重
 罪ニ付テハ之ヲ禁獄ノ最重刑ニ處ス可
 キ
 三月以上ノ禁獄ノ最重刑ニ處ス可
 キ
 輕罪ニ付テハ之ヲ最重刑ニ處ス可
 キ
 自餘ノ輕罪ニ付
 テハ滿三年トス

期滿免除論

之違ヲ警罪ニ付テハ
 右ノ其ノ効ノ限ハ生シタル日ヨリ起算
 第七條 既ニ裁判ヲ經テ言渡タル刑ノ
 執行ニ付キ期滿免除ノ期限ハ左ノ如シ
 第一刑ニ死刑シタルハ懲役ノ刑ニ無期禁錮
 第二處十年以上ノ懲役ノ刑ニ十年以上ノ禁錮
 第三或ハ十年以上ノ懲役ノ刑ニ五年以上ノ禁錮
 第四或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第五或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第六或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第七或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第八或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第九或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮
 第十或ハ二年以上ノ懲役ノ刑ニ一年以上ノ禁錮

既ニ罪ノ訴
 ノ手續ヲナ
 シタルハハ
 期限ヲ妨
 グ

既ニ罪ノ訴ノ手續ヲナセシニ因リ期滿得免ノ期限ヲ防止スベキハ唯
 其訴ヲ受タル者ニ於ケルノミナラス其未ダ訴ヲ受ケタル者ニ於テモ

モ

亦其期限ヲ防止スベキモノトス治罪法第六百三十七條第二項

モアシルハ
 モレス氏ノ
 駁論

其故何ソヤ蓋シ若シ犯人ガ一己ノ私益ヲ以テ期滿免除ノ基ク所トセ
 バ右ノ規則ハ甚ダ不當ナラン治罪法手續ノ如キハ犯人ニ關セサル者
 ナルニ何故ニ之ガ爲メニ其期限ヲ長フセサル可カラザル乎
 此駁論タルアシイルモレン氏之ヲ詳述セリ其言ニ云ク「既ニ治罪ノ手
 續ヲナセシニ因リ其未ダ訴ヲ受ケタル者ニ於テモ期滿免除ノ期限ヲ防
 止スルトセバ是レ甲者ニ對シテノミ告訴ノ手續ヲナシ他ノ者ニ付テ
 ハ一切此等ノ事ナカリシニ多年ノ後其罪ヲ犯セシハ實ニ乙者ナルコ
 發覺セバ其受ベキ所ノ期滿免除ノ期限ハ嘗テ他人即チ甲者ニ對シテ
 告訴ノ手續ヲナセシニ因リ防止セラレタリトシテ乙者ヲ訴フルコト
 得ベシ此ノ如キ規則ハ奇怪モ亦甚シク且重疊法ナラント
 然レモ期滿免除ノ制ハ社會ニテ犯罪ヲ忘却スルニ由ル證ヲ立ルノ難

答辨

期滿免除論

隱蔽ノ罪ハ犯人情ヲ知リテ其贓物ヲ秘隱匿藏スルノ間連續ス可キガ故ニ即チ無斷犯罪トナス然レモルセリエーフォースタンエリー氏ノ説ノ如ク該犯ニハ是ノ如キ性質アルニ因リ其贓物ヲ手ヨリ離シタル日ヨリ期滿免除ノ期限ヲ算フベシト決定セサルベカラザル乎特種ナル盜罪トシテ此罪ヲ罰スルナレバ二氏ノ説ハ其當チ得タリトナスヘキモ佛國法律ニ於テハ隱蔽ノ罪ハ附從罪ニ過ギズ而シテ附從罪人ハ自己ノ所爲ニ因リ罰セラル、ニアラズ主犯タル所爲ヲ助成シ若クハ容易ナラシメタルガ故ニ他人ノ所爲ニ因リテ罰セラル、ナリ又其主犯ハ滿期免除ヲ受ク可ク而シテ其期限ハ一時ノ犯罪タル盜ヲナセシ日ヨリ算フヘキカ故ニ其一事ニテハ罰スヘカラサルノ附從タル所爲ニ付キ主犯タル盜罪ト同様ニ右ノ期限ヲ算フベカラサルノ道理アルコト能ハズ蓋シ主犯者失踪シ或ハ死去スルニ拘ハラズ附從犯者ニ於テ其罪

ノ訴ヲ受ルコトアリト雖モ是レ其附從ノ犯罪タルヤ罰スベキ所爲ノ性質ヲ保有シ而シテ其性質ヲ查明シ得可キヲ以テナリ然リ而シテ今此場合ニ於テハ盜罪ノ訴權ハ期滿免除ニ因リ既ニ消滅セシヲ以テ復タ罰スベキ所爲タル者ノ存スベキ理ナク其附從罪ヲ犯セシ者ハ外國人外國ニアリテ犯ス所ノ罪ニ付キ佛國^{佛國}人佛國^{佛國}ニアリテ之ガ附從タルコト全一般ナリ故ニ是ノ如キ場合ニ於テハ其隱蔽者ヲバ罰スベカラザルモノトス

滿免ノ期限ヲ起算ス可キ日ヲ定ムルハ集合犯罪ニ於テモ無斷犯罪ニ於ケルガ如ク亦難カラザルニアラズ無斷ニ非ズシテ集合タル犯罪トハ許多ノ元素ヲ含有シ而シテ其各箇ヲ別異ニスルハ罰ス可キ所爲タラサルモ其總元素ノ互ニ絡結連續スルニ因リ罰ス可キ犯罪トナル者是レナリ例ハ一度高利貸ヲナス者ノ如キハ乃チ犯罪タラスト雖モ其

高利貸ヲ慣
習ノ如クス
ル罪○新ノ
期満免除ノ
期限ヲ起算
スベキ日
三説

慣習ノ如ク屢之ヲナスハ法律ニ於テ之ヲ罰スルナリ
去レバ高利貸ヲナシタルモノハ集合シテ犯罪トナルベキ其數爲シタ
ル總テノ所爲ノ日ヨリ未ダ三年ヲ經サルキハ期満免除ニ因リ其罪ヲ
免ルベカラザル乎或ハ其一回ノ所爲ノ日ヨリ三年ヲ經ザル以上ハ爾
餘ノ所爲ハ如何ナル舊時ニ係ルト雖モ之ヲ高利貸慣習トナシ刑ニ處
スルヲ得可キ乎又三年ノ最終期中其屢高利貸ヲナスコト必要トセザ
ルモ以前ニ係レル所爲ト最終ノ所爲トノ間三年以上ヲ經ザルキハ尙
ホ之ヲ罰スルヲ得可キ乎ルグラフラン、ルセリエー、フホースタン、エリ
ノ諸氏ハ第一説ヲ可トセリ又大審院ノ數判決スル所ヲ觀ルニ假令三
年ノ最終期ノ外ニナセシ高利貸タルモ之ヲ慣習ト看做スヲ得可シト
セリ蓋シ以爲ラク更ニ高利貸ヲナスハ犯罪タル所爲ノ一元素ヲナ
シ之ニ連結ス可キガ故ニ其新シキ所爲毎ニ期満免除ノ期限ヲ妨グル

ナリト此説ヤ能ク道理ニ合フト雖モ大審院ハ之ヲ赦行シ一千八百四
十一年十月二十一日ニ於テ十年ノ最終期內ニ一タビ高利貸ヲナシタ
リト雖モ三年以上ノ舊時ニ係レル所爲ニ連合シ得可シト決定セリ其
判決書ニ云ク以前ニ其所業ヲナシタル日ヨリ三年以上ノ時間ヲ經ル
ト雖モ其數回ノ所爲其數貸金ヲナシタル日ニ拘泥シ之ヲ免ルス可カ
ラズト

此説タルヤルグラフラン氏カ著書ノ刊行ナキ前ニアリテハ未ダ詳明
ナラザリシニルグラフラン氏ハ之ヲ豫見シタリト見ユ其之ヲ駁スル
ノ言ニ云ク「若シ六七回モ高利貸ヲナスヲ以テ之ヲ慣習ト看做スベケ
レハ人アリテ其從來ナシタル貸金ノ契約ヲ尋ヌルニ多年ノ時間ヲ隔
テ一回ノ高利貸ヲ爲シ漸ク積テ四五回ニ及ビ其三四年モ舊時ニ係ル
ヲ以テ自分ニモ既ニ之ヲ忘レタルニ後日ニ至リ一タビ高利貸ヲナス

期満免除論

此ハ直チニ以テ慣習トナシ之ヲ罰セザル可カラズト
 ルグラブラン氏ハ一千八百四十一年以前ノ大審院ガ判決ノ義意ヲ擴
 ノ過ギタルナリ一千八百四十一年ノ判決ニ於テハ如何程久キ時間ヲ
 隔テ、數回ノ高利貸ヲナシタルニモセヨ皆之ヲ慣習ニテ高利貸ヲナ
 スモノナリトハ言ハザリシナリ只其最終ノ所爲ト新所爲トノ間僅ニ
 三年ヲ隔ルルニ之ガ爲メニ新所爲ト舊時ニ係レル所爲ト連繫セズトハ
 ナスベカラザルガ故ニ其法律ニ背キタル數箇ノ所爲ハ全ク互ニ連絡
 セズト看做スベカラサル旨ヲ決定セシノミ實ニ大審院ハロテール氏
 ガ説ヲ適用シ其増減セシ所モ亦擧テ之ニ遵從シタルニ過ギス
 然レモ余甚ダ此説ノ可ナルヲ疑フナリ蓋シ三年ノ最終期內ニ於テ一
 タビ高利貸ヲナスキハ是レ一箇ノ所爲ニシテ高利貸ヲ慣習トナス犯
 罪ニ非ザルナリ彼ノ舊時ニ係レル數回ノ所爲ハ最終ノ所爲ト別異ニ

スルキハ期滿免除ニヨリテ其刑罰ヲ免ルヲ得可シ夫ソ其數回ノ所爲
 ハ全ク刑罰ヲ免カルベキノ所爲ナルニ一回ニテハ罰ス可カラザルノ
 所爲ニ因リ復タ刑スベキニ至ルト云フハ抑何ノ故ゾ又其各所爲ヲ互
 ニ連絡セシムルニハ三年以上ノ時間ヲ隔テザルヲ要セザル乎或ル
 人ハ云ラク是レ期滿免除ヲ犯罪ニ適用スルニ非ズシテ其各元素ニ適
 用スルナリト何ゾ然ランヤ現ニ犯罪タル所爲ノ元素中ニ三年以上數
 多ノ歲月ノ前ニ係レル元素ヲ算入スルニ非ズヤ只其元素ノ生シタル
 日ヨリ三年以上ノ時日ヲ經過スル間全ク高利貸ノ所爲ナキキニ限リ
 右ノ元素ヲ算入セザルノミ

一千八百五十年二月十九日ノ法律第三條ニ於テハ毫モ大審院ガ説ヲ
 維持セシムル所ナキ乎第三條ニ云ク

「高利貸ヲ慣習トスル罪ニ因リ既ニ刑ニ處セラレタル者其刑ヲ言渡

一千八百五
 十年十二月
 十九日ノ法
 律ノ權力

サレタル日或ハ裁判ノ取消ス可カラザルニ至リシ日ヨリ五年ヲ經ズシテ更ニ高利貸ヲナスキハ其所爲一度ダリトモ之ヲ犯罪トナスベシト

既ニ刑ニ處セラレタル所爲ニ合セザル以上ハ其一事ニテハ犯罪トナスベカラザル所業ヲナス者ト雖モ其刑ヲ言渡サレタル日ヨリ未ダ五年モ經ザルニ更ニ之ヲナシタルキハ再犯ノ所爲トナシ之ヲ罰スルナリ今夫レ高利貸ノ罪タルモノヲ結成スルニ既ニ刑ニ處セラレタル所爲ト雖モ之ヲ算入ス可シトセバ何故ニ唯三年間訴ヲ受ズト云フノミヲ以テ嘗テ刑ニ處ス可キ理由トナラザリシ所爲ヲハ罰スベカラズトスル乎

余ハ一千八百五十年ノ法第三條ハ別格ノ規則ニシテ類似スト云テ以テ他ノ事項ニ援引スベカラザルモノト答ノノミ況ヤ今論ズル所ノ場合ト類似スル所ナキヤ抑此輕罪ニ付キ三年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナス者ハ其以前ニ係レル所爲ヲ查明スルニ難カルベシト推測スルヲ以テナリ然ラバ則チ三年以上ノ時間ヲ隔ル所爲ヲハ互ニ連絡セシムルコトハ亦難カルベシト推則スベキニ非ズヤ蓋シ其關繫未ダ絶タズ如何ナル三年ノ期中ト雖モ高利貸ノ所爲ナクシテ經過セザリシキハ三年以上ノ舊時ニ係レル元素ト雖モ亦高利貸ノ所爲中ニ算入スルヲ得ベシ是レ其更ニナシタル所爲ハ期滿免除ノ期限ノ前ニ往時ニ係レル所爲ノ念ヲ惹キ起スベキ者タルヲ以テナリ然リ而シテ期滿免除ノ期限ノ間一タビモ高利貸ノ所爲ナキキハ常ニ其經久ノ所爲ヲ忘レタリト推測スベク且之ヲ查明シ難シト推測スベシ然ラバ則チ其復タ判然タル成跡ナキノ舊事ヲ以テ新事ト相連絡セシムルヲ得ベカラザルナリ之ニ反シテ若シ高利貸ノ所爲タル既ニ刑ニ處セラレシキハ舊事ノ

罪スベキ者タルニ付キ判然ナラザルコトナク本人ニ於テモ亦少ナク
 五年間ハ其刑ニ處セラレタルヲ忘レザルベキナリ
 此論ノ如何ヲ論ゼズ凡テ高利貸ノ期滿免除ノ期限ハ最終ニ此所爲
 ナシタル日ヨリ起算スベキ乎將タ最終ニ高利ヲ収メタル日ヨリ起算
 スベキ乎大審院ノ判決ニ於テハ其最終ニ高利ヲ収メタル日ヨリ起算
 スベシト云ヘリ

コンゼン氏ノ説ク所モ亦此ノ如シ

此説タル犯罪ヲ生シタル元素ト其元素ヨリ生シタル利益トヲ混同ス
 ル者ト謂フベシ夫レ其法ニ背キタル所爲トハ何レニ在ル乎其是ノ如
 キ貸金ヲナシタル所爲ニアルナリ犯罪ハ其數回貸金ヲナシタル總所
 爲ニアリ高利貸ヲ慣習トナス者是レ法律ニ於テ制抑セント欲スル所
 ノ者ナリ故ニ犯罪ハ法律ニ背キタル利子ヲ収ムルニ拘ハラザルモノ

ナレハ未ダ訴ヲ受ザル前其利金ヲ拋棄スルモ之ニ因リテ犯罪ヲ消滅
 スルコトナカルベシ

刑ノ期滿免
 除ノ期限ハ
 新ノ期滿免
 除ノ期限ヨ
 リ長シ

刑ノ期滿免
 除ノ期限ヲ
 起算スヘキ
 日

既ニ言渡サレタル刑ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ訴ヲ免ルベキ期滿
 免除ノ期限ヨリ長カラザルベカラズトハ上文ニ於テ述ベシ所ナリ是
 レ蓋シ一旦證ヲ立シ者ハ唯疑ノ存スルモノヨリ多ク其跡ヲ遺シ其念
 ナ存スベキガ故ナリ帝國法典ハ乃チ此義ニ據レリ
 重罪ニ付キ言渡サレタル刑ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ二十年トス
 輕罪ニ付キ言渡サレタル刑ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ五年トス
 違警刑ニ處セラレタル者ニ付テハ其期限ヲ二年トス
 重罪ニ付テハ其裁判ノ通常タリ抗傳タルヲ論ゼズ刑ヲ言渡シタル日
 ヨリ其期滿免除ノ期限ヲ算フ蓋シ抗傳裁判ハ取消スベキモノナリト
 雖モ其以形執行ヲナスベキガ故ニ亦確定タル者トスルヲ得ルナリ既

大審院ニ上
告シタルニ
付キ生スヘ
キ効

無刑言渡ニ
付キ檢事ヨ
リ上告シタ
ルキノ効

凡ソ上告ヲ
ナスキハ公
訴ノ期滿免
除ヲ妨グベ
キ乎

ニ其刑ヲ執行スベケレハ刑ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ始ラザルベ
カレズ而シテ期滿免除ニヨリテ一旦裁判ニ罹リシ訴ヲ免ル、ニ非ズ
通常裁判ニ付キ大審院ニ上告スルモ之ガ爲メニ刑ノ期滿免除ノ期限
ヲ妨グルコトナシ

裁判所ニテ無刑ヲ言渡シタルニ付キ檢事ヨリ之ヲ上告スルキハ公訴
ノ期滿免除ノ期限ヲ妨グベシト雖モ之ヲ停止スルコトナキナリ是レ其
檢事ヨリ大審院ニ上告スルコトハ犯罪訴ノ手續キタルニ外ナラザレバ
ナリ治罪法第
四百九條

刑ノ言渡ヲ受タル者或ハ檢事ヨリ其言渡ニ付キ上告ヲナスキハ其刑
ハ未ダ確定セザルヲ以テ期滿免除ニ因リ之ヲ免ル、コト得ズ其公訴
ハ未ダ結局ニ至ラザルヲ以テ十年ヲ經ルニ非ザレハ期滿免除ニ因リ
之ヲ免ル、コト得ズ夫レ其上告ヲナスキハ期滿免除ヲ妨グト雖モ其

判決ナキ間ハ之ヲ停止セザルニ非ザル乎

又之ニ停止ノ効アラシムルト否トニ付テハ刑ヲ言渡サレタル者ノ上
告ト檢事ノ上告トニ區別ヲ立テザルベカラサル乎余ハ以爲テ刑ヲ
言渡サレタル者ニ於テ上告ヲナシタリト雖モ之ガ爲メニ公訴ノ期滿
免除ヲ停止スベカラズト若シ其期滿免除ノ期限ニ迫リニキハ檢事ハ
宜ク裁判ノ決定ヲ促スベシ

公訴ノ期滿免除ノ規則ヲ適用スルコトハロテ一氏ノ説ノ如ク上告ノ成
否ニ關ラザルナリ故ニ若シ上告セシ後十年以上ノ時間之ヲ棄テ置ク
キハ復タ其上告ノ當否ヲ審理スルコトナク既ニ言渡シタル刑ヲ効ナキ
モノトス是レ上告ヲナスキハ其成否ニ關ラズ公訴ノ期滿免除ヲ妨グ
ベキヲ以テナリ

懲治刑若クハ違警刑ノ期滿免除ハ控訴ヲ受タル裁判所ニテ之ヲ言渡

懲治刑及ビ
違警刑ノ期
滿免除ノ期

シ又ハ確固ニシタル以上ハ其通常裁判言渡ヨリ起算シ大審院ニテ上
告ヲ判決シタルノ如何ニ拘ハラザルナリ然レモ一旦上告ヲナシタル
片ハ公訴ノ期滿免除ヲ妨グベキヲ以テ其期滿免除ニハ關係スルモノ
トス

通常裁判ニテ言渡サレタル刑ノ期滿免除ノ期限ハ初等裁判所ニテ其
刑ヲ言渡シタル片ハ控訴スベキ期限ヲ終リシ日ヨリ起算ス

懲治刑或ハ違警刑ヲ言渡シタル片ハ其刑ノ期滿免除ノ期限ハ其裁判
ノ故障ヲ述ベ又ハ控訴スベカラザルニ至リシ日ヨリ起算ス故ニ其故
障ヲ述ベ又ハ控訴ス可カラザルニ至ルト雖モ之ガ爲メニ公訴ヲ免ル
ハニ非ズ唯其期滿免除ヲ防止スルノミ

ロシエール
氏ノ説ヲ排
付ス

ロシエール氏ハ以爲ラク欠席裁判ヲ受タル者其言渡書ノ送達ヲ受ザ
リシ片ハ期滿免除ニ因リテ刑ヲ免ルベキモ公訴ヲ免ルベカラザルナ

リトロシエール氏ハ欠席裁判ト抗傳裁判トト全視シタリト雖モ此二
者ヲ全視スルハ不可ナリト云フベシ蓋シ欠席裁判ヲ受タル者其裁判
ニ付キ故障ヲ申立又ハ控訴ヲナスベキ間ハ之ヲ執行スベカラズト雖
モ抗傳シテ受タル言渡ニ付テハ以形執行ヲナスベキガ故ニ抗傳裁判
ヲ受タルモノハ刑ノ期滿免除ヲ受ベキモ他ノ期滿免除ノ利益ヲ受ベ
カラザルナリ

治罪法第六
百四十條ノ
釋解

治罪法第六百四十條ニ據レハ控訴スルヲ得ベキ違警刑ノ言渡アリシ
片ハ刑事民事ノ訴ヲ受ベキ期滿免除ヲ妨グルヨリモ他ノ効ヲ生スベ
キガ如キヲ以テ二三ノ論士ハ此言渡ヲ受タル者之ヲ控訴セザル以上
ハ期滿免除ニ因リテ刑ノミヲ免ルベキモ刑事民事ノ訴ヲ免ル可カラ
ズト思惟セリルセリエール氏モ亦此義ニ據テ裁判ヲ言渡タル後其書ヲ
送達セラル、フナクシテ一年ヲ經過スト雖モ公訴ノ權ヲ消滅スル

期滿免除論

ナキヲ論ゼリマンゼン氏ハ是ノ如クスレバ不都合ニシテ殊ニ其書送達ノ遅延ハ畢竟檢事ノ罪タレバ犯人ノ害トナルベカラズト論シ以テ前説ヲ駁セリ然レ凡言渡書ノ送達ヲ受ル前ニ控訴ヲナスベシト言フテ此駁論ニ答フルヲ得ベシ抑第六百四十條ニ於テ控訴狀ノ送達ヲ受タル日ヨリ滿一年ヲ以テ期滿免除ノ期限トスル者ハ何ゾヤ元來違警罪ニ付キ訴訟ノ手續及ヒ其吟味ヲ受タルハ期滿免除ヲ妨ゲザルノ規則ナルニ何故ニ控訴ヲナシタル時ニ限リテ之ヲ妨ゲシムルヲ定メタル乎又何故ニ控訴ヲナスハ期滿免除ヲ停止スルヲナキモ更ニ其日ヨリ滿一年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナスノ規則ヲ設ケタル乎是レ唯一旦裁判ノ言渡ヲ受タルハ上控ノ結局如何ヲ論ゼズ期滿免除ニ因リテ其刑ヲ免ルベキモ其訴訟ヲ受ルヲ免ルベカラズトシタリシノミアシイルモレン氏云ク控訴スベキ裁判ノ言渡アリシハ刑ハ期

違警罪裁判
ニ付キ檢事
ヨリ上控セ
シハ期滿
免除ノ期限
ヲ妨グベキ
乎若クハ停
止スベキ乎

滿免除ト訴ハ期滿免除トハ相混全スベスト是レ大ヒニ然ラズ期滿免除ハ刑ノ執行ヲ止メシムベカラズ訴訟ヲ消滅セシムルノミ
檢事ハ違警罪裁判ニ付キ控訴ヲナスヲ得ズ治罪法第百八十二條其刑ニ處セラレタルモノ、ミ之ヲナスヲ得之ニ反シテ上告ハ檢事ヨリモ被告人ヨリモ之ヲナスヲ得ベキモノトス第七百七十七條夫ノ第六百四十條ニハ上告ノ付キ明文ナシト雖モ違警罪ノ裁判ニ付キ檢事ヨリ上告ヲナシタルハ期滿免除ヲ妨グベキ乎將タ停止スル乎大審院ガ斷例ニ據レバ其上告ニ付キ防止ト停止トノ二効アリトシ白耳義ガ斷例ニ據レバ之ニ停止ノ効ノミヲ許セリ故ニ違警罪ヲ犯シタル日ヨリ經過セシ日ト大審院ニテ裁判破毀ノ言渡ヲナシ他ノ裁判所ニ送附セシ日ヨリ經過セシ所ト合セテ一年以上ノ時間トナルハ期滿免除ト云フヲ以テ如何ナル裁判ト雖モ言渡スヲ得ザルニ至ルベシ余輩ヲ以テスレバ

違警罪裁判ニ付キ大審院ニテ之ヲ破毀セシキハ防止ノ源由トナルベキ乎
刑ヲ言渡サレタル者ヨリ上告セシキハ期限ヲ妨グベキ乎
ハ停ムベキ乎

檢事ヨリ上告ヲナスモノハ是レ唯訴訟ノ手續ニシテ而シテ違警罪ニ付テハ法律ハ被告人ノ刑ノ言渡ヲ受ケ控訴ヲナシタルキニ非ザレバ期滿免除ヲ防止スルコトナカル可シ違警罪裁判ニ付キ上告アリシキハ決テ之ガ爲メニ期滿免除ヲ停止スベカラズトス猶ホ上文ニ重罪懲治罪ニ付キ上告アリシキハ之ヲ不可ナリトシタルガ如シ
大審院ニテ違警罪裁判ヲ破毀シタルキト雖モ爲メニ期滿免除ヲ妨グルコトナカルベク又之ガ吟味ヲ移サレタル裁判所ニ於テハ該罪ヲ犯セシ日ヨリ滿一年以内ニ非ザレバ其刑ヲ言渡スコト得ベカラズ
又違警罪裁判ニ付キ刑ヲ言渡サレタルモノヨリ上告ヲナセシキハ其期滿免除ヲ妨グベキ乎
治罪法第六百四十條ニハ控訴ノコトニ付キ明文アルヲ以テ聊カ疑議ヲ生ズベク而シテ其控訴トハ刑ニ處セラレタルモノ、ナスベキ所タ

ルナリ然レモ其刑ヲ言渡サレタルモノヲシテ上告ヲナスニ因リ刑期ノ制限ヲ搖カサシムベキ乎若シ其上告ヲナスモ公訴ノ期滿免除ノ期限ヲ妨グルコトナカリセバ其期限ニ迫ルニ際シ言渡サレタル裁判ニ付テ上告ヲナスキハ其根據トスル所不可ナリト雖モ期限既ニ過ギ去リ或ハ之ヲ執行スルコトナキニ至ルノ危險アルハ必セリ然ラバ則チ刑ヲ言渡サレタルモノ、控訴ノコトニ付キ第六百四十條ニ定ムル所ハ全一ナル理ニ因リテ亦其上告ノコトニモ適用セザル可カラズ而シテ其上告ハ訴訟ヲ受クベキ期滿免除ノ期限ヲ停止セザルナリ
裁判ノ破毀アリモ期滿免除ヲ妨グルコトナク唯之ガ吟味ヲ移サレタル裁判所ニ於テハ上告ノ日ヨリ滿一年間ニ之ヲ審理セザル可カラザルモノトス
之ニ由テ是ヲ觀レバ法律ハ或ハ上告ノ結局如何ニ因リ刑ノ期滿免除

期滿免除論

ヲ得ザルベカラズトシ或ハ唯上告ヲナスニ因リテノミ之ヲ得ベカラズトシタルヲ知ルベシ

右ノ規則ハ刑法第二十三條ニ記ス所ノ規則ト相矛盾セザルヲ得ル乎
 刑法第二十三條ニ據レバ懲治罪ニ付キ假禁錮ニ處セラレタル特別ナル場合ノ外刑ノ期限ハ裁判言渡ノ確定セシ日ヨリ起算スルナリ何故ニ刑ヲ言渡サレタル者遁逃シテ之ヲ免レザリシキト雖モ有期刑ノ期限ニ算入スベカラザル時間ヲ期滿免除ノ期限ニ算入スルヲ得ル乎
 又如何シテ期滿免除ニ因リ未ダ執行スルニ至ラザル刑ヲ免ルベキ乎
 若シ刑ヲ執行スルキハ其期滿免除ノ期限ハ始マラザルモノトス例ハ二十年ノ施體加辱ノ刑ニ處セラレタルモノ第十九年ニ至リ遁逃スルキハ其期滿免除ノ期限ハ刑ヲ言渡サレシ日ヨリ算ヘズシテ遁逃セシ日ヨリ算フルナリ故ニ其唯一年間ニ捕縛シ得ベキノミナラズ尙ホ二十年ノ間捕縛シ得ベキモノトス然レモ反對ノ說ヲナス者アリ治罪法第六百三十五條ヲ援引シ重罪ニ付テノ裁判言渡書ニ記スル刑ハ其言渡ノ日ヨリ滿二十年ノ時間ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトシ區別ヲ設クベカラズト云ヘリ諸ノ斷例及ビ諸家ノ說ニ於テハ此論ヲ排駁セリ蓋シ法律ノ茲ニ規定スル所ノ者ハ刑ニ處セラレタル者其刑ヲ受ケ始メザル通常ナル場合ノミニアリテ言渡サレタル刑ノ幾分ヲ既ニ執行セシ場合ニ於テハ刑罰ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ刑罰ノ止ミタル日ヨリ算フベシ刑ヲ執行スルト此執行ヲ免ルベキ期滿免除ヲ受ルトハ全時ニアルベキモノコ非ズ又効ヲ生スベキ者ニ非ズ但シ心中ニ償フ所アルベキノ推測ヲ以テ刑ノ期滿免除ノ由ル所トセバ犯人ニ於テ既ニ社會上ノ償ノ幾分ヲナセシキハ固ヨリ期滿免除ノ期限ヲ略省セザルベ

刑ノ執行中
 期滿免除ノ期
 間ハ始マラズ

十年ノ間捕縛シ得ベキモノトス然レモ反對ノ說ヲナス者アリ治罪法第六百三十五條ヲ援引シ重罪ニ付テノ裁判言渡書ニ記スル刑ハ其言渡ノ日ヨリ滿二十年ノ時間ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトシ區別ヲ設クベカラズト云ヘリ諸ノ斷例及ビ諸家ノ說ニ於テハ此論ヲ排駁セリ蓋シ法律ノ茲ニ規定スル所ノ者ハ刑ニ處セラレタル者其刑ヲ受ケ始メザル通常ナル場合ノミニアリテ言渡サレタル刑ノ幾分ヲ既ニ執行セシ場合ニ於テハ刑罰ヲ免ルベキ期滿免除ノ期限ハ刑罰ノ止ミタル日ヨリ算フベシ刑ヲ執行スルト此執行ヲ免ルベキ期滿免除ヲ受ルトハ全時ニアルベキモノコ非ズ又効ヲ生スベキ者ニ非ズ但シ心中ニ償フ所アルベキノ推測ヲ以テ刑ノ期滿免除ノ由ル所トセバ犯人ニ於テ既ニ社會上ノ償ノ幾分ヲナセシキハ固ヨリ期滿免除ノ期限ヲ略省セザルベ

カラス現ニ余輩ガ今排駁スル所ノ説ヲナス者ノ中其主義ニ據テ斯
 ク論シ來リシモノアリ然レモ法律ノ此制ヲ設ルモノ決テ斯ル推測ニ
 由ルニ非ザルヲ以テ尙ホ刑ヲ執行スベキ殘餘ノ期限ノミヲ釋免ス
 ル期滿免除ト全ク刑ヲ釋免スル期滿免除トハ其期限ヲ全クスベシ
 白耳義刑法第九十五條ニ於テハニ義ヲ挿入セシムルハ似タリ第九十五條
 ニ云ク若シ刑ニ處セラレタルモハニ義ヲ挿入セシムルハ似タリ第九十五條
 ヲヨリ期滿免除ノ期限ヲ算フベシ但此場合ニ於テ有期重罪ノ刑ニ處セ
 ラレタルモハ五年間懲治刑ニ處セラレタルモノハ二年間既ニ刑ニ處セ
 受シキハ其時間ヲ期滿免除
 ノ期限内ニ算入スベシト

若シ期滿免除ノ期限ハ刑ノ執行ニ拘ハラズ之ヲ言渡セシ日ヨリ始マ
 ルトセハ無期刑ヲ言渡サレシモノ二十年ノ終リニ遁逃スルキハ復
 タ捕獲スベカラザルナリ又一步ヲ進メテ論ズルモ不可ナカルベシ
 刑ヲ言渡サレシ日ヨリ二十年ヲ經テ遁逃スルキハ既ニ自由ヲ得刑
 罰ヲ解放セラレタリト決定セザルヲ得ザルナリ果テ此説ノ如クン

ハ是レ我が刑典ノ中ニ無期刑ヲ塗抹スルモノナリト言ハザルヲ得ズ
 刑ノ期滿免除ハ防止スベキ乎死刑ニ處セラレタルモ二十年ヲ經テ受
 日前ニ捕獲セラレタルハ此二十年ヲ經過セシ後ハ刑ノ執行ヲ受ベキ乎
 獲ハ即チ執行ノ手續ニシテ於テ期滿免除ノ問題ヲ左ノ如ク決定セリ
 受帝國刑法第七十二條ニ於テハ右ノ問題ヲ左ノ如ク決定セリ
 刑ヲ執行スベキ手續ニシテ於テ期滿免除ノ問題ヲ左ノ如ク決定セリ
 期滿免除ノ手續ニシテ於テ期滿免除ノ問題ヲ左ノ如ク決定セリ
 者ヲ捕獲スル手續ニシテ於テ期滿免除ノ問題ヲ左ノ如ク決定セリ
 三十七條ノ未取ニ於テハ刑ノ期滿免除ヲ妨グベキモ諸般ノ手續
 ルニ過ザルヲ得ズ蓋シ捕獲ハ其捕獲ヲ以テ防止スルノ性質アルカ
 止スルノ性質アルカ其ノ問題ハ甚々緊切ナリ例ニ就キ刑ヲ受シ日
 年ニシテ又逃スル乎又十年ヲ過ギタルハ之ヲ免ルニ非ザレバ捕獲
 免ル可カラザル乎又十年ヲ過ギタルハ之ヲ免ルニ非ザレバ捕獲

第二十九章 期滿免除論

刑事ノ期滿免除ニ付テハ既ニ前章ニ敘述セシ所アリト雖モ尙ホ未ダ
 悉サザル者アリ左ノ二箇ノ大問題即チ是レナリ

期滿免除論

區別

第一 訴及ビ刑ノ期滿免除ノ期限ハ各ニ程度アルガ故ニ如何ナル者ニ據リテ其程度ヲ定メザル可ラザル乎

第二 期滿免除ノ効ハ如何

以上二個ノ問題又各小別ス訴ノ期滿免除ト刑ノ期滿免除トハ分論セザル可ラザルヲ以テナリ

然レ凡諸般ノ問題ニ付テハ前章ノ如ク右二種ノ期滿免除ヲ併論ス可シ是レ其互ニ關係スル所ト其差別ヲ明ニスル唯一ノ方法タレハナリ

訴ノ期滿免除ニ付キ何ヲ以テ其適用ス可キ者ハ十年タリ三年タリ一年タルヲ知ル可キ乎
刑ノ期滿免除ニ付キ何ヲ以テ其適用ス可キ者ハ二十年タリ五年タリ二年タルヲ知ル可キ乎
先ツ訴ノ期滿免除ニ付テハ何ニ據リテ之ヲ考定セザル可ラザル乎

訴ニ付キ何ヲ以テ其期滿免除ノ適用ス可キ者ヲ知ラン乎

既ニ付キ指定セル名稱ナラン乎

訴ヲ受ケタル裁判所ノ

訴ヘシ者カ指示セル事實ノ名稱ニ據ル可キ乎訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ性質ニ據ル乎或ハ言渡ス可キ刑ノ性質乎將タ裁判言渡書ニ指定ス可キ事實ノ名稱乎

訴ヲ以テ附與シタル名稱ハ固ヨリ依ル可ラザル明ナリ例ハ檢事ニ於テ通常盜ノ訴ヲナス時ノ如キ其刑ヲ増重ス可キ情狀アルニ因リ重罪トナル可キヲ推量シ十年ノ期滿免除ノ期限ヲ以テ三年ノ期滿免除ノ期限ニ換フ可ラザルナリ故ニ若シ檢事ヨリ通常盜ノ訴ヲナスニ誤リテ其刑ヲ増重ス可キ情狀アリト陳ヘタル時モ三年ノ期滿免除ヲ避クルコトヲ得可カラザルモノトス依テ陪審ニ於テ刑ヲ増重ス可キ情狀無シト決定シタルモハ輕罪ノ性質アリト看做ス可キ所爲ノ訴訟ヲ既ニ期滿免除ニ因リ免レタル以上ハ何等ノ言渡モ受クルコトナシ能ク事實ヲ詳ニシ之ヲ訴ヘシ時ト雖モ其訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ性

期滿免除論

其依テ定ム
可キ者

刑ノ期免滿
除ニ於テハ
如何

ニ於テ刑ヲ輕減ス可シト決定スルニ因リ往々被告人ヲ無刑トスルニ
至ル可シ是レ論理ヲ推スニ當サニ然ル可キ所ニソ又フホースクンエ
リ一氏が可トスル所ノ說ナリト雖モ大審院ニ於テハ刑ヲ輕減スル情
狀アルニ因テ期滿免除ノ期限ヲ變ズ可ラズト決定セリ
實ニ適用ス可キ期滿免除ノ種類ヲ定ムルハ其訴ラレタル犯罪ノ性質
ニ隨フ可キモノトス現ニ治罪法第六百三十七條第六百三十八條第六
百四十條ノ如キハ此義ニ據ル可シ何トナレハ施體加辱ノ刑ニ處ス可
キ重罪若クハ懲治刑ニ處ス可キ輕罪又ハ違警罪ニ因リ期滿免除ノ期
限ヲ異ニセシムレハナリ
刑ノ期滿免除ニ付テモ右同様ニ決定ス可キ乎
訴訟ヲ以テ指示セル名稱ト訴訟ヲ受ケシ裁判所ノ性質トニ依ル可ラ
ザルハ亦明ナリ又前ノ問題ニ於テ提擧セシ所ノ諸ノ源由ヲ之ニ當ツ

ルヲ得可シ然レモ既ニ適用シタル刑ノ性質ニ依リテノミ此刑ヲ免レ
シム可キ期滿免除ノ性質ヲ定ム可キガ如ク見ヘザル乎違警刑執行ニ
付テハ決テ五年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナス可カラザルガ如ク又懲
治刑ニ付テハ決シテ二十年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナス可ラザルガ
如ク然リト雖モ是レ大ニ然ラズ蓋シ刑ヲ免ル可キ期滿免除ハ亦訴訟
ノ期滿免除ノ如ク犯人が一己ノ事ニ就テ之ヲ設ケタルニ非ズ社會上
ノ應報ヲ効アラシムルノ必需ナルヲ以テナリ而シテ其必需ノ程
度ハ刑ニ處ス可キ所爲ノ性質ニ隨テ變シ適用ス可キ刑ニ隨テ變ゼザ
ルナリ故ニ減刑情狀アルニ因リ或ハ十六歳以下ノ幼者タル身分ニ因
リ重罪ニ付キ懲治刑ニ處セラレタルキハ二十年ヲ以テ期滿免除ノ期
限トナス可シ治罪法第六百三十五條第六百三十六條第六百三十九條
ノ規則ハ即チ此義ニ由ル如何トナレハ其記スル所ハ重罪ニ付キ刑ヲ

期滿免除論

決セリ

若シ抗傳シテ刑ニ處セラレタル日ヨリ期滿免除ヲ防止ス可キ手續ナク三年ヲ經過セシ時ハ被告人ニ於テ既ニ其訴ノ期滿免除ヲ受タリト申立ツルコトヲ得可キ乎曰ク否ラズ抗傳裁判ナル者ハ欠席裁判ト異ナリテ唯訴訟ノ期滿免除ヲ防止ス可キ手續ノ如キ者ニ非ズ抗傳裁判アル時ハ訴ノ期滿免除ハ刑ノ期滿免除ト變シ而シテ此變換ハ取消ス可ラザルモノニテ抗傳裁判ノ對決裁判ニ換ラザルニ關スルモノニ非ズトス

減刑情狀アルカ或ハ宥恕ス可キ情狀アルニ付キ對決裁判ニ於テ懲治刑ヲ以テ施體刑ニ換ル時ハ其犯罪ハ即チ重罪タルガ故ニ期滿免除ノ期限ハ固ヨリ五年ナラズノ二十年タル可シ而シテ更ニ刑ヲ言渡シタル日ヨリ其期限ヲ算フ可キナリ

期滿免除ノ効ハ如何

期滿免除ノ効ハ如何

第一 訴ノ期滿免除ノ効ハ如何

訴ノ期滿免除ノ効ハ如何

訴ノ期滿免除ノ効ハ大赦ト同一ニシテ犯人ト犯罪トヲ連結スル關係ヲ查明スルヲ得ザラシムルノミナラズ又犯罪ノ事跡ヲモ證明スルコトヲ得ザラシム

刑事ノ訴ノ期滿免除ノ効ハ如何

期滿免除ニ因リテ公訴ヲ消滅スル時ハ又民事ノ訴ヲモ消滅ス可キ乎契約及ビ准契約アル時ハ民事ノ訴權ヲ生ス可ク而シテ其期限ハ大抵三十年ナリ今犯罪ヨリ生ズル所ノ訴權ニ付テハ期滿免除ノ期限ハ稍短ク犯罪ノ等級即チ其重罪タリ輕罪タリ違警罪タルニ因リ期滿免除ノ期限ニ長短アル可キ乎抑モ犯罪ハ毎ニ公益ヲ害スルヲ以テ公訴ノ權ニテ此公益ヲ保護スト雖モ又往々私益ヲ害スルコトアルガ故ニ民事ノ訴權ナル者ニ據リ之ヲ償ハシメ以テ之ヲ保護スルナリ

重罪ニ付キ公訴ヲナス可キ者ハ唯檢事ノミト雖尼輕罪、違警罪ニ付テハ檢事并ニ被告人之ヲナスコト得可シ
 民事ノ訴ハ公訴ト俱ニ同一ナル裁判官ニ之ヲナスヲ得可ク又別ニ之ヲナスコト得可シ民事ノ訴ヲ別ニセシ時ハ民事裁判所ニ其訟書ヲ差出ス可シ此場合ニ於テハ公訴ニ付キ確手タル言渡ナキ間ハ民事訴訟ノ權ヲ行フコト停止セラレ可シ
 毫モ動カズ可ラザルノ點アリ公訴ノ附屬トスルニ非ザレハ刑事裁判所ニ民事ノ訴ヲナス可カラザルニ因リ公訴ノ期滿免除アル時ハ之ヲ吟味ス可キ二箇ノ裁判所ノ其一ニハ民事ノ訴ヲナス可カラザル是レナリ

然レモ公訴ノ期滿免除アル時モ被害者ニ於テ其受ケタル所ノ損害ノ償ヲ得ント民事裁判所ニ訴フ可カラザル乎理論ト實際トニ於テハ概

世人ノ大ニ
 信スル説ヲ
 排付ス

子之ヲ可トセリメルラングラブランマンゼンボワタールロテール
 ルセリエーロシエールフホースタンクースチエーウワン、ウールベック
 アシイル、モレンスールダノ諸氏ノ如キハ之ヲ賛成シ又大審院ハ其許
 多ノ判決ニ於テ此説ニ從ヘリ蓋シ犯人死スル時ハ公訴ノ權ヲ消滅ス
 ト雖モ其代人ニ對シ民事ノ訴ヲナシ得可カラザルニ非ズ又大赦ヲ行
 フ時ハ公訴ノ權ヲ消滅スト雖モ當然民事ノ訴權ヲ消滅ストス可
 カラザルナリ故ニ公訴ノ權ハ消滅スルモ民事ノ訴權ハ存シ得可キ
 者トス何故ニ期滿免除ニ因リ公訴ヲ免ル、時ハ犯人カ死スル時及ビ
 大赦ヲ行フ時ヨリモ大ナル効力ヲ民事ノ訴權ニ與フル乎多少ノ時間
 ヲ經シ後ハ犯罪ノ跡不明瞭トナリ之ヲ查明スルモ或ハ誤謬ヲ免レサ
 ル可シトハ公訴ノ權ニ就テ推測スル所ナレハ民事ノ訴權ニ就テモ亦
 斯ノ如ク推測セザル可ラズト言フ者アラン夫ノ大赦ナル者ハ亦即チ

斯ノ如キノ推測ヨリ起ル者ナリト雖其私益ニ於ケルヤ決テ斯ノ推測ヲ下ス可カラズ或ハ云ハン刑ノ言渡ニ付キ犯人ニ於テ期滿免除ニ因リ之ヲ免ル可キ以上ハ民事ノ訴ニ因リ世人ノ之ヲ賤ルヲモ期滿免除ヲ以テ亦免ル可キナリト余ハ乃チ之ニ答ヘントス大赦ヲ受クル者ハ刑ヲ免ルト雖其自己ヨリ出タル損害ニ付テハ民事ノ訴ヲ免ル可カラザルナリト蓋シ大赦ノ場合ト雖其期滿免除ノ場合ト雖其公訴ノ權ト民事ノ訴權トヲ同視ス可キノ理由ハナシ此解説ヲ措テハ此點ニ付キ法律ニ明文ヲ載スルニ非ザレバ他ニ要トス可キ者ナシ又果シ明文ヲ載スルヲアラハ是レ唯擅恣ニ出ヅルニ外ナラザル可シ故ニ余輩ハルセリエー氏カ自著ノ刑法書ニ於テ此點ニ付キ附與シタル所ノ源由ハ賠償ノ推測即チ德義ニ對シ犯人ガ負債ノ償却ヲ以テ訴訟ノ期滿免除ノ基ク所トスル説チナス者モ亦滿足ス可キモノトハ信

セザルナリルセリエー氏ノ言ニ云ク刑事裁判所ニ關スル民事ノ訴權ハ期滿免除ニ因リ之ヲ免ル可シト雖其民事裁判所ニ於ケル訴訟チ之ト同ク免レシムルハ不可ナリトセバ治罪法第六百三十七條第六百三十八條第六百四十條ニ記シタル期限ヲ過ギシ後ハ犯人民事上ノ訴ヲ受ルニ因リ法律ノ善意ニ反シ民事ノ言渡ヨリ自身ニ生ス可キ面目ナル無形ノ刑ヲ受ルニ至ラン而シテ斯ル無形ノ刑ハ犯人ガ刑事ノ訴權ヲ期滿免除スルノ日迄心思紛擾シテ安靜ナラザリシ無形ノ刑ニ重加スル者ナリ何トナレバ則チ其心思紛擾シテ安靜ナラザリシ者ハ立法者ニ於テ犯罪ヲ償フニ足レリト判定シタレバナリ果シ然ラバ則チ是レ違警罪、輕罪、重罪ニ付キ立法者ガ期滿免除ノ特殊ナル期限ヲ設ケタル主旨ニ背ケリト謂フ可シト

縱令刑ヲ適用ス可キ所以ノ者ハ德義ニ對シテ負債ヲ償却セシムルガ

爲メニシテ犯人が心思ノ紛擾シテ安靜ナラザリシ者ハ代事トシ罪ヲ贖フコト十分ナリトスルモ爭テ其心思ノ紛擾シテ安靜ナラザリシ者ハ民事上ノ負債ヲ釋放シタリトス可ケンヤ又其心思ノ紛擾シテ安靜ナラザリシ者ハ如何ニ被害人ニ對シ償ノ拂チナシタリトセン乎被害人ハ之ガ爲ニ決シ利益ナキナリ何ゾ心中ニ苦テ受クルヲ以テ金錢上ノ償ニ代ル可ケンヤ

今法律ニ記シタル所ヲ舉ゲン

第六百三十七條 死刑又ハ無期ノ施體ノ刑又ハ總テ施體或ハ加辱ノ刑ヲ言渡ス可キ重罪ニ付テノ刑事ノ訴及ビ民事ノ訴ハ其重罪ヲ犯シタル日ヨリ滿十年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ其期滿免除ヲ得ルニハ其十年ノ時間吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ヲ受ケザルコトヲ必要ナリトス

若シ其十年ノ時間ニ吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ヲ受ケタルノヨリニテ其裁判言渡ヲ受ケザル時ハ最終ノ吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ノ日ヨリ滿十年ヲ以テ刑事ノ訴及ビ民事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ナリトス但シ其吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ニ全ク管セザル者ニ付テモ亦同一ナリトス

第六百三十八條 前條ニ記シタル二箇ノ場合ニ於テ懲治刑ニ處ス可キ輕罪ニ管スル時ハ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ此期限ヲ算ルニ付テハ前條ノ差別ニ從フ可シ

第六百四十條 違警罪ノ事ニ付キ爲ス可キ刑事ノ訴及ビ民事ノ訴ハ其違警ノ罪ヲ犯シタル日ヨリ滿一年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ其一年ノ時間ニ違警罪ニ付テノ調書ヲ記シ又ハ被告人ヲ召捕ヘ又ハ吟味或ハ訴訟ノ手續ヲ受ケタルヲ問フコトナシ云々

或ル人ハ云テク民事ノ訴ト刑事ノ訴トハ同列ニ置カザル可ラズト然
 レモマンゼン氏及ビルセリエー氏モ又刑事ノ訴ノ満期免除ヲ得ルニ
 ハ民事ノ訴ノ満期免除ヲ得ルヲ要セザルガ故ニ如何ナル場合ト雖モ
 民事ノ訴ノ満期免除ノ期限ハ刑事ノ訴ノ満期免除ト同一ナラズト信
 ゼザルヲ得ザル可シト謂ヘリ然レバ則チ其所謂満期免除トハ同一ナ
 ル期限ナリト雖モ二種相異ナルノ満期免除タルヲ知ルナリ然リト雖
 モ果シテ此ノ如クンバ其所謂満期免除ノ諸効ノ分ツ可ラザルト其
 源由トハ如何ナル可キ乎之ニ由テ是ヲ觀レバ刑ニ付テハ既ニ満期免
 除ヲ得ル者ト雖モ民事上ノ言渡ヲ受ルニ因リ其名譽ヲ損セザル可カ
 ラズ
 是ノ如キガ故ニ刑事裁判所ニ於テハ罪ス可キ性質ノ有無ノ確證ヲ得
 可カラザル事實ト雖モ民事裁判所ニ在リテハ其損害ノ源因タリ若ク

ハ償還ノ源因タル可キヤ否ヤノ確證ヲ求索スル目的トナルヲ得ルナ
 リマンゼン氏モ亦刑事ノ訴ヲ満期免除スル前ニ一旦民事裁判所ニ民
 事ノ訴アリシ以上ハ左ノ原則ニ因テ保護セラル可キヲ信ゼリ曰ク一
 旦裁判ニ罹リシ訴訟ハ損害ヲ受ク可ラズト例ハ違警罪ニ付キ損害ノ
 償金ヲ要求スルガ爲メ民事裁判所ニ訴タル諸手續ノ如キ犯罪ノ日ヨ
 リ満一年間ニ之ガ裁判ナキニ因リ無効ニ屬セズ訴訟法第三百九十七
 條ニ記シタル三年ヲ經ルニ非ザレバ之ヲ取消ス可ラザルナリ然レモ
 又前言ヲ復シテ之ニ應ヘントス曰ク其所謂満期免除ノ諸効ノ分ツ可
 ラザルト其源由トハ果シテ如何ナル可キ乎ト
 若シ刑事ノ訴ノ満期免除ト民事ノ訴ノ満期免除ト其期限ヲ同フセバ
 其規則其要件モ亦同一ナル可キ乎蓋シ刑事ノ満期免除ハ公益上ノ期
 満免除タルガ故ニ公務ヲ以テ必ズ之ヲ遵守セザル可ラズシテ犯人ニ

於テハ拋棄ス可カラザルモノナリ而シテ刑事裁判所ニ刑事ノ訴ノ附屬トシテ民事ノ訴ヲナサズ唯民事裁判所ニ此訴ヲナセシ時ト雖ヒ民法第二千二百二十三條及ビ第二千二百二十四條ノ規則ニ反シ尙ホ前ノ原則ヲ適用ス可キ乎若シ之ヲ適用ス可ラズトセハ何故ニ同一種ノ期滿免除ナリト謂フ可キ乎

大審院ハ民事ノ訴ノ期滿免除ヲ得タリト大審院ニ於テ始テ申立ツ可ラズト裁判セリ是レ大審院ハ此期滿免除ハ一般ノ秩序ニ關スルニ非ザルモノトシタルヲ知ル可キナリ

或ハ治罪法第二條ニ據テ論ズル者アリ蓋シ此條ニ於テハ犯人死去ノ後ハ民事ノ訴ヲナスベキモ之ヲ刑ニ處セント求ムル訴ヲ爲ス可ラズト記載セシ後犯人期滿免除ヲ得ルニ於テハ右二個ノ訴ヲナス可カラザル旨ヲ記シタルガ故ニ期滿免除ノ犯人が死去トナメ相對セシムル

ガ如ク見ユレバナリ然レヒ其第二條ハ第二篇第七章第五章ニ記スル所ハ期滿免除ノ規則ニ從フテト言ヒ期滿免除ノ章ニ照準ス可シトスルヲ以テ今此ノ問題ヲ斷決スルニ足ラザルナリ

又之ヲ駁スル者アリ曰ク若シ果シ立法者ニ於テ刑事ノ訴ヲナス可カラザルニ至リシ後ト雖ヒ民事ノ訴ヲナス可カラシメント欲セハ則チ之ヲ明言ス可キ筈ナリ例ハ夫ノ一千八百二十二年五月二十六日ノ法第二十九條ノ如キ其別格ナル規則ハ一千八百四十八年三月二十二日ノ布告ヲ以テ廢セラレタルニ非ズヤト

且議者ハ共和第四年第二月三日ノ法律第九條及ビ第十條ニ於テハ右ノ如ク問題ヲ決定シタリシガ治罪法ニ於テモ亦此議ヲ擲棄セザルヲ論證セリ

此說タル世人ノ甚ダ信ヲ措キタル者ニテ細カニ其理ヲ推究スル時ハ

若シ犯人刑事ノ訴ノ期滿免除ヲ得タルハ決シテ民事ノ訴ヲ受ク可カラズト云フ義意ヲ生セザル可カラズ果ソ然ラソニハ民事ノ訴ノ其一ノ期滿免除ヲ妨グ可キ諸般ノ手續ハ必ズヤ其他ノ訴ヲ保存ス可キ手續タラザルヲ得ズ論者ハ乃チ斯ル結果ヲ可認セシト雖モ宜ク之ヲ排斥ス可キナリ蓋シ刑事ノ訴ニ因リ吟味及ビ訴訟ノ手續ヲナシタレ時ハ民事ノ訴ヲ保存スベシト云フト雖モ又別シテ刑事裁判所ニ刑事訴ノ附屬トシ民事ノ訴ヲナセシ時ノ如キ被害人ニ於テ數其訴ヲ民事裁判所ニナシ之ニ盡カスルモ爲ニ刑事ノ訴ノ期限ヲ長フスルニ至ルト云フハ不可ナルガ如シ是ヲ以テマンゼン氏及ビル、セリエー氏モ亦檢事ニ於テ其手續アリシ時ハ永久民事ノ訴ヲナスコト得ベシト雖モ民事裁判所ニ於テ民事原告人ヨリ訴訟ノ手續ヲナセシ時ハ刑事ノ訴ニ付テハ其效アル可ラズト思考セリ

今民事ノ訴アリシ後刑事ノ訴ヲナシ遂ニ刑ノ言渡シアリトセン此場合ニ於テ十年三年一年ヲ以テ民事訴ノ期滿免除ノ期限トナス可キ乎一定ノ期限内ニ於テ既ニ事實ノ罪惡ヲ確證ヲ獲タルヲ以テ其不辜ナルヤノ推測ヲ謬ル可キノ恐レナシトスルナリ然ラバ即チ如何ナル名義ヲ以テ通常ノ期滿免除ノ期限ヲ省減セント欲スル乎實ニ此點ニ付キ數多ノ判決ニ於テ第六百三十七條第六百三十八條第六百四十條ニ記スル所ノ期滿免除ノ規則ニ背馳スル者アリト雖モ是レ即チ刑事訴ノ期滿免除ノ基ク所ノ推測ヲ動搖ス可キ恐レナキ時ハ民事ノ訴ヲ期滿免除スルニハ其通常法ノ規則ニ從ハザル可ラズト確認スルニ外ナラザルナリ

此節制説タル其變換シタリシ方法ヲ減却ス可キヲ以テ大審院ニ於テハ之ヲ取ラザリキ是レ大審院ハ刑ノ言渡ヲ以テ民事訴ノ期滿免除ヲ

防止ス可キノ手續ナリトシ其手續ハ事實ノ性質ニ隨ヒ其日ヨリ十年、三年、一年ノ期滿免除ノ期限ヲ起算ス可キ所タルニ過ギズトシタルニ由ルナリ蓋シ一方ニ於テハ刑事ノ訴ノ期滿免除タル者ノ基ク所ハ其之ヲ受ク可キ者ヲ以テ不辜ナリト推測スルニ非ズノ其罪狀ノ確證ヲ獲可カラズト推測スルニ在リトシ又一方ニ於テハ民事上ノ償還言渡ヲナス者ハ唯損害トス可キ事實ノ存スルガ爲メノミトナシ其果ノ故意ニ出デシヤ否ハ全ク之ヲ問ハズトセバ民事ノ訴ニ付キ民事裁判所保護ノミチ仰グ可キニ何故ニ總テノ場合ニ於テ民事ノ訴ヲノ民事上ノ期滿免除ノ規則ニ從ハシメザル乎

今又別ニ刑事ノ訴ノミチナシタルニ却下セラレタリトセン

此場合ニ於テハ二ツノ者アリ必ズ其一ニ從フベシ第一刑事訴ノ期滿免除ノ期限ハ未ダ經過セズト雖モ若シ民事ノ訴ヲナスキハ是レ刑事裁

判所ノ判決ヲ無ニスル者タルヲ以テ復タ民事ノ訴ヲナス可ラズ二期期滿免除ノ權力ハ裁判ノ權力ヨリ重大ナル可ラズ又期滿免除ヲ得可キ者ヲ以テ不辜ナル可シト推測スル事ハ社會ニ於テ眞實トナル所ノ既ニ裁判ヲ經タル事件ヨリ重大ナル權力ナキヲ明カナルガ故ニ刑事訴ノ期滿免除ノ期限ヲ過シ後民事ノ訴ヲナスヲ得可シ

抑治罪法第三百五十八條第三百六十六條ニ據レバ無罪或ハ無刑ヲ言渡ス可キ場合ト雖モ重罪裁判所ニ於テ損害ヲ償フ可キ旨ヲ被告人ニ言渡スヲ得ルヲ以テ何人ト雖モ被告人ニ訴訟ヲ免シタル刑事裁判所ノ斷決ノ後ハ決シ民事ノ訴ヲナス可ラズト主張スルヲ得ザル可キナリ將タ民事上ノ責ハ毎ニ刑事上ノ責ノ總テノ要件ニ從フベキ乎蓋シ無罪或ハ無刑ノ言渡アリシ後民事ノ訴ヲ民事裁判所ニ移附セシ時ハ重罪裁判所ニ於テ爲シ得可キ所民事裁判所ニ於テモ亦之ヲ爲

ステ得可シ又若シ違警罪裁判所或ハ懲治罪裁判所ニ於テ刑事ノ訴ヲ
 却下セシ手續ニ關スルキハ此等ノ裁判所ニ於テハ被害人ヨリ刑ニ處
 ス可キ犯罪ノ確證ヲ立ルニ非ザレハ被害人ニ對シ損害ヲ償ハシム可カ
 ラザルヲ以テ刑事裁判所ニ於テノミ上ニ言フ所ノ者ヲナスヲ得可シ
 余ハ上文ニ於テ二種ノ裁判所ニ民事ノ訴ト刑事ノ訴トヲナシタル場
 合ニ於テモ其二個ノ訴ノ期滿免除ノ期限ヲ同一ナラシメント欲ス
 ト雖モ民事原告人ノ訴ヲ以テ刑事ノ訴ヲ長久ナラシム可シトスルニ
 非ザルヨリハ其期滿免除ヲ同一ナラシムヲ能ハザル可シト言ヘリ
 其期滿免除一種ナル時ハ尙ホ數多ノ結果ヲ生ズ可シ被害人幼者タル
 身分ナルカ如キ其法律上ノ禁アルガ如キハ縱令刑事裁判所ニ於テ既
 ニ宣告ヲナシタル後民事裁判所ニノミ民事ノ訴ヲナスキト雖モ之ニ
 因テ其訴ノ期滿免除ヲ停止ス可キ原因タル可ラザルナリ然レモ何故

ニ此場合ニ於テ下ノ金言ノ義ヲ施サザル乎曰ク無能力者ニ對シテハ
 期滿免除ノ期限ナシト一旦刑事ノ訴ヲナス可ラザルニ至ルト雖モ民
 事ノ訴ヲナスヲ得可シトスル以上ハ何故ニ辨論外ノ利益ノミニ基ク所
 ノ規則ヲ依然適用スルヲチナス乎又何故ニ既ニ出セシ民事ノ訴タル
 ニ一旦裁判ニ罹リシ訴訟ハ損害ヲ受ク可ラズト云ヘル金言ニ因テ保
 護セラル可キ乎抑是ノ如キ訴ハ之ヲナササル前ニ於テ期滿免除ノ期
 限ハ無能力者ニ對シテハ經過セズト云ヘル原則ニ因リ保護セラル、
 ニ非ズヤ是レ即チ余輩カ排駁スル所ノ說ノ自家撞著スル所以ナリ
 此說ノ不都合ナル處止マ是レノミナラザルナリ例ハ以前民法上ノ契
 約ヲ取結ビ之ヲ破ルキハ犯罪タルニ付キ訴ヲ起セシガ如キ其說ノ所
 ニ據レバ大概其期滿免除ノ期限ハ刑事訴ノ期滿免除ト同一ナル可カ
 ラズトセリ故ニ預リ契約ヲ破リ代人其權ヲ擅ニシ計算役員金錢ヲ竊

取シタルニ付キ訴ヲ起セシガ如キ假令此所爲ハ刑法第四百八條ニ記
 スル所ノ輕罪ニシテ僅ニ三年ヲ以テ其刑事訴ノ期滿免除ノ期限トナス
 ト雖モ右ノ訴ノ期滿免除ノ期限ハ三十年タル可シト言ヘリ又其說ニ
 云ラク被害人一ハ二個ノ訴權ヲ有ス一ハ犯罪ヨリ生ジ一ハ契約ヨリ生
 ズル者是レナリ其契約ヨリ生ズル者變更障礙ヲ受ルコトナクシテ其犯
 罪ヨリ生スル者ヲ期滿免除ニ因テ消滅スルコトヲ得可シト
 民法第一千三百七十條ニ記スル所ノ准契約或ハ法律ノ權力ノミヨリ生
 ズル所ノ契約ニ付キ起シタル所ノ訴ニ於テモ亦右同様ニ論下セリ故
 ニ不動産中ニ隱伏セシ財産ヲ詐僞ヲ以テ竊取シタル者ニ對シ其所有
 主ガ起シタル訴ニ付テハ滿三十年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナシ而シテ
 盜罪ノ訴ニ付テハ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限トナスト雖モ民法第
 七百十六條ニ因リ生ズル所ノ訴權ハ之ガ爲メニ消滅ス可ラズトセリ

然レモ犯罪ニ因リ民法上義務アルノ犯人コト奈何ノ契約若クハ准契
 約ニ因テ義務アル者ヨリモ其地位ヲ善クス可ケンヤ惡意ナキ時ハ犯
 罪トナサザルニ其惡意ニ出テシテ以テ却テ保護ヲナス可シトスル手
 抑犯罪ヨリ生スル所ノ訴權ヲ消滅ス可キ期滿免除ハ民法第一千三百八
 十二條ニ記スル所ノ何事ニ因ラズ人ニ損害ヲ加フル所行ヲ爲シタル時
 ハ其償ヲナス可シト云ヘル規則ヨリ生シタル訴權ヲ消滅ス可カラズ
 ト言フコトヲ得ザルヲ以テノ故乎何故ニ余ガ家屋ニ放火セシ者アル時
 ハ余ニ於テ唯十年間ノミ之ヲ訴フルノ權アルニ過ギズ而シテ借屋人
 契約ヲ以テ惡意ニ家屋ヲ處理ス可キコトヲ取結ビタル時ハ不慮ニ出ル
 ノ火災ト雖モ三十年間ハ之ガ責ヲ受サル可カラザル乎何故ニ第一千三
 百八十二條ニ因リ生ズル所ノ訴權ハ第七百十六條ノ如キ規則ニ因リ
 生ズ可キ所ノ訴權ヨリモ輕ク處置セラル、乎抑斯ル結果ヲ致ス者ハ

道理ニ於テ當サニ然ルベキ所タル事
 又止タ是レノミナラズ人アリテ余ガ動産ヲ竊取スル如キ余輩ガ排駁
 スル説ヲナス者ノ概テ決定スル所ニ據レバ其罪通常輕罪タルニ過キ
 ザル時ハ僅ニ三年間ノミ余輩ニ於テ贓物ノ償還ヲ求ム可キ訴權ヲ有
 ス可シト云ヘリ然レモ契約ヲ破ルニ因リ犯罪タル場合ニ於テ其説ニ
 ゼヒシ如ク余輩ハ二個ノ訴權アリ一ハ盜罪ヨリ生ジ一ハ余ガ所有權
 ヨリ生ズル者ナリ而シテ其盜罪ヨリ生ズル者ハ三年ノ期滿免除ニ因テ
 消滅ス可キモ其所有權ヨリ生ズル者ハ眞ノ取戻ノ權タルヲ以テ三十
 年間ハ存セザル可ラズト言フ能ハザル乎是ノ如キガ故ニ民事裁判所
 ニ差出シタル民事訴ノ期滿免除ノ期限ハ此特別ナル問題ニ付キ刑事
 ノ訴ト同一ナル旨ヲ主張スル者ノ間ニ於テモ亦種々ノ論説アルナリ
 一個ノ説ヲ以テ能ク解釋シ得可キ所ノ問題ニシテ區々相異ナルノ議論

ヲ生ズル者は是レ適サニ以テ其之ヲ論ズルニ基本トスル所ノ原則ノ不
 可ナルヲ徴スルニ足ルナリ
 證書贖造ノ事ニ付テハ刑事訴ノ期滿免除ノ期限ヲ過グルト雖モ尙ホ
 其贖造タルヲ證スルヲ得ベキ乎訴訟法第二百三十九條ニ於テハ重罪
 ヲ訴フ可キ權既ニ期滿免除ニ因テ消滅スト雖モ證書贖造ニ付テハ訴
 訟ヲ起スルヲ得ルトスル乎蓋シコルメダトシユ氏カ此條款ヲ解釋ス
 ルニ當リ思慮スル所ハ即チ期滿免除ニ因テ刑事ノ訴權ハ既ニ消滅ス
 ル時ト雖モ證書贖造タルニ付キ之ヲ廢棄セント民事裁判所ニ訴ル
 ヲ得ル者ハ是レ刑事訴權ノ期滿免除ハ防止セラレスト雖モ其民事ノ
 訴權ハ防止セラレタルヲ以テナリトスルニ在リ然レモ法律ニ於テ斯
 ノ如キ例外タル場合ヲ豫定セザルハ固ヨリ明カナリ其之ヲ豫定セザ
 ル者は是レ證書贖造セシ者之ヲ行使セシ日ヨリ滿十年間其訴ヲ受ケ

ザル以上ハ此害ヲ蒙ル者ノ如何ヲ論ゼズ民法上動カス可ラザルノ
 推測ヲ受ク可キノ謂トスル手ドマント氏刑法第二百五十四條及び第
 二百五十五條ニ記スル所ノ犯罪即チ公ケノ書類ヲ藏スル場所ニ貯ヘ
 アル簿冊ヲ毀滅スル犯罪ニ付キ言フ所甚ダ善シ曰ク刑ニ處ス可キ所
 爲チナシタル者其訴ヲ受ク可キニ付テ期滿免除ヲ得ルト雖モ其所爲
 ノ有罪タルヤ否ヤテ證スルニ於テ妨ゲナシト然レモドマント氏ハ刑
 事ノ訴ノ期滿免除ヲ得ル時ハ亦隨テ民事ノ訴ノ期滿免除ヲ得ベキヲ
 論唱セリ

然レモ刑事ノ訴ノ期滿免除アルモ損害ノ償ヲ要求ス可キハ其源因ノ
 犯罪タルガ爲メノミニ即チ民事上ノ責ハ刑事上ノ責ノ結果タルニ
 過ギサル時ニ非サレバ損害ノ償ヲ得ントノ民事ノ訴ヲ受理ス可ラズ
 トスル乎此說ニ從ヘバ期滿免除ハ無罪或ハ無刑ノ言渡ト同様ノ權力

アリ是レ甚ダ過グル所アル者ニ非ザルヲ得ンヤ

大審院ハ二三ノ疑團ヲ懷キタリト雖モ到底此温和ノ說ヲ可トスル者ノ如シ
 何故ニ大赦及び犯人ガ死去ノ場合ニ於テ決定セシ道理ヲ以テ期滿免
 除ノ事ニ付キ民事ノ訴ニ適用セザル乎抑短少ナル期限ヲ以テ期滿免
 除ヲ得ント欲セバ犯人ニ於テ口ヲ其犯罪ニ藉スルヲ得テ而シテ惡意
 ニ出デタリトノ言立ノミヲ以テ其所爲ノ責ヲ免ル可シトスル說ノ如
 キハ衆心甚ダ刺戟スル者アルニ非スヤ

余ガ排駁スル所ノ說ニ於テハ尙ホ他ニ不當ノ事アリ即チ犯罪タル事
 實アル時ハ刑事ノ期滿免除ノ後例外トシ民事ニ對抗スルヲ得可キ
 是レナリフホースタン、エリー氏云ク茲ニ人ヲ殺ス者アリ而シテ其事其
 遺囑ヲ以テ財産ヲ受タル者ニ認歸ス此場合ニ於テハ縱令十年ヲ經テ
 刑ノ期滿免除ヲ得ルモ右ノ例外ニハ妨ゲ無カル可キナリジョースハ訴

ニ付テハ有期ナルモノハ例外トシテハ無期ナリト云ヘル格言ニ據テ
 之ヲ論ゼリ蓋シ真理ノ存スル所ハ即チ斯ル場合ニ於テハ民事ノ訴ヲ
 ナス可カラザルニ在ルナリト曰ク否ラズ夫ノ損害要求ノ事ハ必シモ
 人ヲ殺シタルノ惡意ニ出デタルニ由ルニ非ザルヲ以テ固ヨリ之ヲ訴
 フ可キニ非ズト雖モ然レモ全ク他ノ義意アル例外ヲ要ス可キハ明ナ
 リ其全ク他ノ義意アルノ例外トハ刑事訴ノ期滿免除ノ基ク所ノ道理
 ナ大ニ衝突スル如キニ見ユル者ナリ血縁ノ相續人ハ蓋シ推測ニ由リ
 刑事裁判所ニ於テ確證ヲ得難シトスル事實ト雖モ民事裁判所ニ於テ
 ハ之ガ罪跡ノ確證ヲ立テザル可ラザル旨ヲ言ヒ立ツ可シ

余ハ亦フホイスタン、エリー、氏ガ説ヲ取ラザルニ非ズ其故何トナレハ
 上ニ擧ル所ノ説ニ於テハ刑事ノ訴ノ期滿免除ヲ與フルモ獨リ社會ノ
 利益ニ關スル訴ノミヲ免ルス可クモ其影響ヲ民事上ノ利益ニ及ス可
 ラザルヲ以テナリトホイスタン、エリー、氏ガ根據トスル所ハ之ニ反セ
 ルヲ以テ其説ク所ヤ益解シ難カル可キヲ覺ユルナリ

余ガ駁スル處ノ説ニハ尙ホ不當ナル者アルヲ舉示セント欲ス抑民事
 ニ於テ一定ノ規則トスル所ハ期滿免除ノ期限ノ始マル可キ時現行ノ
 法律ニ照準シ其諸般ノ要件ヲ定メザル可ラズ被害者ニ於テハ從來ノ
 法律ニ據テ豫メ右ノ期限ヲ計慮ス可キガ故ニ別シテ新法ニ因テ其期
 限ヲ省減ス可ラザルナリ苟モ然ラズンハ則チ被害者若クハ其代人ニ
 於テ些毫ノ過失ナク期滿免除ノ期限ヲ終ルニハ尙ホ遠カル可キ時ト
 雖モ新法出ルガ爲メニ俄然其權ヲ亡フニ至ル可シ
 之ニ反シ刑事ニ於テハ期滿免除ノ期限ヲ省減シ犯人ガ都合チ好クス
 ル法律ハ大概既往ニ及ブベキナリ是レ即チ論者ノ今日ニ可トスル所
 ノ説ナリ例ハ重罪ニ付キ期滿免除ノ期限ハ十年タリシニ之ヲ省減シ

テ五年トセン被害人ハ十分ノ證據物ヲ得ルニ奔走シ空シク時日ヲ費シ之ガ爲メニ新法布告ノ時ハ既ニ六年ヲ經過シタリトセン被害人ハ復タ其權ナカル可キナリ故ニ民事裁判所ニ於テ民事ノ訴ヲノ刑事訴ノ期滿免除ニ從ハシメハ是レ其預メ危害ヲ知ル可ラズノ損害ヲ蒙ムル可シ而シ又之ヲノ民事ノ期滿免除ノ規則ニ放任セハ百般ノ利益ハ能ク保護セラル可キナリ蓋シ公益ニ必要ナルニ非ザレハ私益上損害ヲ受ク可ラズ

ル、セリエー氏ハ舊法ニ定メタル期滿免除ノ期限ヲ終ルニ乏缺セル時間ヲ被害人ヨリ剝取スルコトノ不正タルヲ了解セシガ故ニ自家所説ノ結果ナリト雖ヒ斯クハ之ヲ論唱スルコト得ザリキル、セリエー氏カ説ニ據レバ此例外タル場合ニ於テハ刑事訴ノ期滿免除ノ期限ヲ過ルト雖ヒ尙ホ民事ノ訴ヲナス可シトセリ然レヒ此レ其論理ニ適合セザル

ノ説タルヲ以テ寧ロ自家撞著ナキノ議論ニ從ガハザル可キ

余ガ前ニ舉示セル議論ニ付キ或ル人ハ一千八百二十二年五月二十六日ノ法律第二十六條ニ據テ之ガ反對ノ説ヲナスナリ

余ヲ以テスレバ此條目ハ其通常民事ノ期滿免除ノ期限ヲ省減スル事ニ付テノミ普通法ヲ廢除ス可シト雖ヒ其刑事訴權ノ消滅セシ後ニ於テモ民事ノ訴ヲナスコト得セシメタルニ由リテ之ヲ廢除スルニハ非ザルナリ一千八百四十八年三月二十二日ノ布告ハ乃チ余ガ説ニ反對ナル者ニ非ザルノミナラズ却テ之ヲ鞏固ニスルナリ如何トナレバ其第二條ニ於テ刑事訴權ノ消滅スルノミニ因リ民事訴權モ亦當然消滅ス可シトスル者ハ即チ是レ同時ニ如何ナル場合ト雖ヒ民事ト刑事トハ分テ訴訟ヲナス可ラズト云フモノタレバナリ

此問題ハ古法ヨリ傳來シ既ニ理論ト實際トニ於テ二個ノ解説アリ皆

共ニ觀ルニ足ル者ニテ現ニルーツドラコンブジューツスノ如キハ
民事ト刑事トハ同一ナル期滿免除無カル可ラズト云ヒジュリユスク
ラリユスクフアルナシユースセルビヨンノ如キハ民事ノ訴ニ付テハ期
滿免除ノ期限ハ三十年ナル可シト云ヘリ

巴里ツールーズボルドウ上等裁判所ニ於テハ民刑二事ノ訴ノ期滿免
除ヲ同一ナリトシグルノールブルシジョン上等裁判所ニ於テハ之ニ反
對ナル説ヲナセリ

其二事ノ訴ノ期滿免除ヲ以テ同一ナリトスル説ヲナス者ハ大ニ區別
ヲ設ケ制限ヲ立テ、之ヲ論シタリ故ニ盜罪ノ贓物償還ノ訴ハ刑事ノ
訴ノ期滿免除ニ因テ消滅ス可キヤトノ問題ニ付テ巴里上等裁判所ハ
初メ之ヲ然ラズトセシモ後終ニ之ヲ可トスルニ至リ又ツールーズ上
等裁判所ハ始終之ヲ不可ナリトセリ蓋シツールーズ上等裁判所ハジ

ユーツスアルジャントンノ説ニ從ヒシナリ

刑事ノ訴ヲ期滿免除スル前被告人死セシ時其相續人ニ對シ民事ノ訴
ヲ起スヲハ民事ノ期滿免除ノ總要件ニ從ヒ別シテ三十年ノ期限ナル
要件ニハ從ハザルヲ得ザリキ

共和第四年第二月三日ノ法律ニ於テハ更ニ明文ヲ掲ゲテ以上ノ諸論
ヲ斷決セリ

治罪法ニ於テハ斯ノ如ク明瞭ナル能ハズ其文面ハ却テ疑議ヲ生シ得
セシメタリ然リト雖モ刑事裁判所ニ民事ノ訴ヲナシ民事ノ訴ヲ以テ
刑事ノ訴ノ附屬トナシタル時ニ非ザレバ治罪法即チ刑事調査法ニ於
テ民事ノ訴訟ヲ處理セサルノ意ナリシ手

以上一問題ニ付キ論シ來レル者ニ之ヲ證明スル固ヨリ難シト雖モ
又其緊要ニ屬ス可キハ明カナリボワタールハ此事件ニ付キ更ニ一章

刑ノ期滿免
除ノ効

ヲ設ケテ詳ニ之ヲ論シ其摘載スル所真正ナル議論ノ方法タルヲ以テ
 讀者ノ亦此書ニ就テ考閱アラントテ希望ス唯ボワタールノ説ハ之ヲ
 駁シテ而シテ後其意ノ存ス所ヲ知ル可キノミ

第二 刑ノ期滿免除ノ効ハ如何

刑ノ期滿免除ハ特赦ヨリ生ス可キ者ニ均シキ二三ノ効ヲ生スルヲ以
 テ之ヲ得ル者ハ刑ノ執行ヲ免レ財貨刑及ビ施體刑ノ如キハ之ヲ受ザ
 ルモノトス

然レモ復權ノ事ニ付テハ期滿免除ヲ得ルヲ以テ言渡サレタル刑ヲ執
 行シタリト同視セズ又此執行ヲ釋免シタリト同視セザルガ故ニ刑ノ
 言渡ヲ受ケタル者遺逃シ多年ノ後遂ニ之ガ期滿免除ヲ得ル時ハ復權
 ヲ願フヲ得ズ余亦前章ニ於テ其復權ヲ願フヲ得ザル者ハ刑ノ期
 滿免除ハ代事ヲ以テ罪ヲ償フト云ヘル推測ニ基カザルノ一證タルヲ

述ベタリ

刑ノ期滿免
除ヲ得ルハ
ハ附加刑
消滅ス可キ
乎

刑ノ期滿免除ヲ得ル者ハ其刑ノ言渡ノ確定シタルニ因リ又ハ其執行
 ニ付キ受ク可キ所ノ無能力ヲ滅却スルヲ得ズ故ニ剝奪公權、監視及
 ビ一千八百五十四年五月三十一日、六月三日ノ法律第三條ニ記シタル
 生存中ノ贈與若クハ遺囑ヲ以テ授受ス可ラザル無能力ノ如キハ之ヲ
 受ザル可ラザルモノトス又准死ノ如キモ同様ナリキ民法第三十二條

法律上ノ禁ハ刑法第二十九條ニ於テ有期刑ニ屬セシメ其時間ノミ之
 ヲ受シメタルヲ以テ其主刑ノ期滿免除ヲ得ル者ハ將來ニ於テ其權ヲ
 復スルヲ得タリ然ルニ今日ニ至リテハ法律上ノ禁ハ無期ノ性質ア
 ル刑ノ附加刑トナリ無期刑タルヲ得ベキヲ以テ無期刑ニ處セラレタ
 ル者二十年ノ後ニ於テ之ガ期滿免除ヲ得タル時ハ尙ホ法律上ノ禁ヲ
 受ケザル可ラザル乎

無期刑ニ附
帶スル法律
上ノ禁ニ付
テハ如何

蓋シ左ノ如ク言ヒ得可キニ似タリ曰ク

刑ニ處セラレタル者刑ノ執行ヲ免レタルト雖モ其受ケタル所ノ法律上ノ禁ハ其民事上ノ自由ヲ妨グルヲ止メザルヲ以テ之ヲ免レタリト謂フ可ラズ故ニ其有セザリシ自由ヲ期滿免除ニ因リテ得可キノ理ナシト

然レモ何ヲ以テ法律上ノ禁ノ目的トスル乎刑ニ處セラレタル者チノ刑ヲ免レ又ハ快樂ノ事ヲ以テ痛苦ノ事ニ易ヘ以テ刑ヲ變換スルヲ得セシメザル是レナリトレイヤールガ一千八百十年二月一日ノ法律草案説明書ニ云ヘルヲアリ屈辱ヲ受ケ愁傷ニ沈ム可キ日ニ際シ浪費放逸酒色ヲ事トスルヲハアル可ラズ然ルニ往此ノ如キ事ヲ生セシハ實ニ痛ム可キナリト又トレイヤールハ一千八百八年十月八日參議院ニ於テ討議ノ際法律

上ノ禁ニ付キ論ズルノ言アリ曰ク刑ニ處セラレタル者チノ無用ノ騷吝ニ陷溺セシムルハ是レ風儀ヲ破ルノ端緒ニシテ而シテ其警衛人ニ賄賂ヲ行フ可ラシムルハ亦甚ダ危險ト謂フ可シト

苟モ是ノ如キ者ヲ以テ法律上ノ禁ノ目的トセバ期滿免除ヲ得タル主刑ノ無期タリ有期タルヲ論ゼズ復タ問題ノ講究ヲ待ツ可ラザルナリ況ヤ一千八百五十年六月八日及ビ一千八百五十四年五月二日ノ法ニ照應ス可キ刑法第二十九條ニ據レバ法律上ノ禁ハ其附屬ス可キ刑ノ期限ニ從フニ於テチヤ然ラバ則チ無期刑ノ附加刑タル法律上ノ禁ハ期滿免除ヲ以テ刑ヲ消滅スル源因トスル場合ニ於テモ亦主刑ト俱ニ消滅セザル可ラズ

ウホー及ビタイラノシエー氏ガ一千八百三十四年一月十三日ノ法案第十三條ニ於テ右ノ問題ヲ決定スル所一千八百五十四年五月三十一日、

六月三日ノ法律トナリシ法案ニ付キリシエール氏カ差出シタル意見書ニ論ズル所ト同一ナリキ其文ニ云ク法律上ノ禁ヲ受ル者ハ自己ノ財産ヲ管理シ之ガ利益ヲ享有ス可カラズ然レモ又其禁止ハ取消ス可ラザルモノニ非ズ刑人ガ情况ノ變動ニ從フ可ク其刑ノ期限ニ從フテ以テ特赦或ハ期滿免除ノ効ニ因テ之ヲ消滅ス可シト

治罪法第六百四十一條

刑ノ期滿免除ノ規則ト訴ノ期滿免除ノ規則トハ甚ダ和異ナリテ其異ナル所猶特赦ノ大赦ト異ルガ如シ
期滿免除ノ利益ハ特赦ノ利益ノ如ク犯人ニ於テ之ヲ辭スルヲ得ズ是レ期滿免除ノ制ハ公益ニ基ク者ナルヲ以テ私益上之ヲ承諾スルヲ要セズ一ニ法律ノ意ニ從フ可キガ故ナリ是ヲ以テ治罪法第六百四十一條ニ下文ノ如ク定メラレタリ曰ク「缺席シ或ハ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受タル者其刑ノ期滿免除ノ期限ニ至リシ後ハ其缺席シ或ハ抗傳シテ

言渡サレタル刑ヲ免レンガ爲メ裁判所ニ出ルヲ得可ラズト

抗傳裁判ノ未必ノ條件ニ屬ス可キ者ハ其刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ル迄ノ時間ノミトス治罪法第六百七十六條

抗傳シテ刑ニ處セラレタル者其行狀ニ因リ社會ニ於テ之ニ或ル刑ヲ執行セシムル能ハザル時ニ在リテ何ゾ其裁判ヲ取消ス可ラズトスルヲ得ノ抑裁判言渡ノ取消ス可ラザルニ至ル者ハ刑ノ期滿免除ノ結果ナレバ言渡サレタル者ニ於テ其期滿免除ヲ拋棄セシキハ固ヨリ更ニ裁判ヲ要求スルヲ得可シ

抗傳シテ懲治刑ニ處セラレタル者其受ク可キ所ノ期滿免除ハ訴ノ期滿免除ニ非ズノ刑ノ期滿免除タル時ハ五年ヲ經タル後ト雖モ二十年間過ギザル以上ハ捕縛ス可キ乎或ハ故意ニテ裁判所ニ出ルヲ得ル乎此ノ問題ハ數多ノ事項ヲ含蓄シ管轄ノ件ニ付キ疑議ヲ生ズ可キナ

抗傳裁判ヲ受ケ懲治刑ニ處セラレタル者五年ヲ經未ダ二十年ヲ過キ自ラ裁判所ニ出ルヲ得ヘキ乎

リ即チ重罪裁判所ニ於テ重罪ノ性質ナシト決シタル事件ニ付キ抗傳
 シテ刑ノ言渡ヲ受タル者其刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ラザル前故意或
 ハ止ムコトヲ得ズ裁判所ニ出シ時ハ如何ナル裁判所ニテ之ヲ審判ス可
 キカノ問題アリ此問題ニ付キ治罪法第四百七十六條ヲ援引シ其言渡
 ハ既ニ廢滅ニ歸セントスルヲ以テ犯人ハ初メ重罪ノ名稱ヲ下サレシ
 事件ニ因リ更ニ吟味ヲ受ク可ク而シテ其吟味ハ陪審ニ於テ之ヲナサザ
 ル可ラズトスル者アリ又管轄上ノ問題ヲ決スル時ハ他ノ事ヲ決スル
 ニ至ル可シトスル者アリ即チ陪審ハ之ヲ判定スルニ全ク自由ニシテ重
 罪タルヤ否ヤヲ問ハレシキハ之ヲ然リトスル權利モアリ義務モアリ
 テ初メ言渡シタル刑ハ復タ存セザルガ故ニ之ヲ増重ス可キヲ慮リ抗
 傳ノ時ノ裁判ニ於テ眞實ナル名稱ヲ失ヒシ犯罪ヲ以テ輕罪ナリト強
 テ決定ス可カラザルナリ然レモ若シ果シテ是ノ如クシテ抗傳シテ刑

ノ言渡ヲ受ケタル者更ニ對審ヲ開カル、時ハ施體或ハ加辱ノ刑ニ當
 ス可キモ計リ難キヲ以テ刑ヲ言渡サレジ日ヨリ五年ヲ經タル後ハ裁
 判ヲ受ケント願ヒ出ルコトヲ得可キニ似タリ而シテ期滿免除ノ期限ニ至
 リシヤ否ヲ知ルハ結局ニ至リ事實ニ確定シタル性質ニ因ラザルヲ得
 ザル可シラグラブラン氏ハ乃チ此義ニ據リテ之ヲ決シタリト雖モ一
 千八百二十七年二月二日ニ於テ大審院ハ之ヲ排斥シタリ而シテ大審院
 ガ決スル所メルランシユヘルシエーローテルフオースタン、エリーローシ
 エールノ諸氏之ヲ贊稱セリ
 余ハ大審院ガ說並ニ論士ノ說ヲ可トスルナリ蓋シ刑ヲ言渡サレタル
 者ノ自ラ裁判所ニ出テ又ハ縛ニ就ク事ハ其刑ヲ執行ス可キ時間ニ在
 ルニ非ザレハ未必ノ條件トスルコトヲ得ズ而シテ懲治刑ハ之ヲ言渡シタ
 ル日ヨリ五年ノ時間執行ス可キ者トス

若シ重罪裁判所ニ於テ抗傳裁判ヲナシ宥恕ス可キ理由アルカ或ハ刑ヲ輕減ス可キ情狀アルニ因リ懲治刑ヲ言渡シタル時ハ其刑ニ處セラレタル者ハ重罪トシ之ヲ言渡サル可キヲ以テ二十年間自ラ裁判所ニ出ルノ權アル可シ

若シ抗傳シテ施體ノ刑ニ處セラレ又ハ重罪ニ因リ懲治刑ニ處セラレタル者第十九年目ニ至リ自ラ裁判所ニ出テ又ハ捕獲セラレタルニ對シ審ヲ始ム可キ前遁逃セシ時ハ初メ言渡シタル刑ヲ取消シ新裁判ヲ以テ之ニ換ユ可キ乎或ハ之ニ反シテ初メ言渡シタル刑ヲ依然存シ置ク可キ乎余輩ハノルランガルノノ説ニ反シ治罪法第四百七十六條ニ記ス所ハ抗傳ノ刑ノ言渡ノ廢滅ニ屬ス可キト否サルトニ關テスト信スルナリ蓋シ刑ノ言渡ヲ受タル者一定ノ期限間ニ裁判ヲ受ザルニ因テノミ其言渡ノ結局ヲ定ム可キナリ

故ニ犯人ニ於テ得ベキ者ハ訴ノ期滿免除ニ非ズノ刑ノ期滿免除ナルノミナレハ余輩ハ或ル刑法家ノ如ク刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ル可キ時間ハ再ビ經過シ始ム可シト言フナリ而シテ初メ刑ヲ言渡シタル日テ以テ其期限ヲ起算ス可シ如何トナレハ法律ニ於テ刑ノ期滿免除ヲ停止ス可シトスルモ之ヲ防止ス可シトナサバ爾ヲ以テナリ凡ソ社會上ノ應報ト之ヲ施行ス可ラザル原因トニ付キ之ヲ正當トスル眞理由ヲ知ル者ハ必ズ立法上ノ説ヲ可認ス可キナリ

缺席裁判ノ時ハ二箇ノ場合アルヲ以テ決スル所モ亦二様ナラザルヲ得ズ即チ若シ其裁判尙ホ控訴ス可キ時ハ訴ノ期滿免除ハ其裁判ノ爲メニ防止セラル可キノミナレハ訴ノ期滿免除ヲ得タリト決ス可ラズ若シ又其裁判ハ既審事ノ權力ヲ得タリシナラバ未ダ刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ラズト雖モ其裁判ヲ廢滅スルヲ得ズ故ニ第六百四十一條

缺席裁判ニ
付テ期滿免
除ノ期限ヲ
經ル前ニ再
可キ乎

治罪法第六百三十五條

ハ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受タル者ノミニ適用ス可キモノトス
皇帝ハ特赦ニ付テ其要件ヲ定ルヲ得可シ法律ハ期滿免除ニ因リテ
刑ノ執行ヲ免ル可キ者ニ付テ要件ヲ定ムルヲ得可シ

治罪法第六百三十五條第二項ニ云ク

「其刑ニ處セラレタル者ハ其重罪ノ爲メ身體又ハ所有物ニ害ヲ受ケ
シ者又ハ其者ノ宗系ノ遺物相續人ノ住スル州内ニ住ス可ラズ
又政府ヨリ其刑ニ處セラレタル者ノ住居ス可キ地ヲ別段指定スル
ヲ得可シ」ト

此條ハ重罪ノ爲メニ言渡サレタル刑ノ期滿免除ニ付テ特別ナルモノ
ナリト雖モ施體或ハ加辱ノ刑ニ處セラレタル者ハ其刑ヲ實行セシト
其期滿免除ヲ得ルトナ論ズ附加刑トシ畢生間監視ニ附スルヲ以テ
往々無用ニ屬スルヲアリ刑法第四十七條然レモ一方ニ於テハ刑ヲ輕減ス可キ

治罪法第六百四十二條

情狀ニ因リテ懲治刑ニ處ス可キナル時ハ第六百三十五條ノ末項ヲ
用ルニ至ル可ク又一方ニ於テハ犯人ヲ監視ニ附スルモ政府ニテ常ニ
其住居ス可キ地ヲ指定スル者ニ非ズ一千八百三十二年四月二十八日
ノ法ニ據レハ禁止外ノ地ニ於テ犯人ハ其住居ス可キ地ヲ選ムノ權アリ
一千八百七十年十月二十四日、三十日ノ布告以前ニ在リテハ一千八
百五十一年十二月八日、十二日ノ布告第三條ニ於テ監視ニ附セラレタ
ル者ノ住居ス可キ地ハ政府ニテ指定ス可キノ規則アリタリ而シテ治罪
法第六百三十五條一千八百八十八年十一月十日布告スル時ハ一千八百十
年二月十二日ヨリ同二十日迄ニ布告セラレタル刑法第四十四條ハ未
ダ編纂セラレザリキ

治罪法第六百四十二條ニ於テ刑事裁判所ヨリ民事上ノ償ヲ言渡シタ
ル事ハ刑事ノ言渡ノ如ク二年、五年若クハ二十年ヲ以テ期滿免除ノ期

限トナス可キヤ否ヤノ問題ヲ明ニ斷定セリ其文ニ云ク
「重罪、輕罪、違警罪ニ付キナシタル民事ノ言渡ハ之ヲ取消ント訴ルヲ
ヲ得ザルニ至リシ時民法ニ記スル規則ニ循ヒ其期滿免除ノ期限ヲ
定ム可シト

民事訴ノ期滿免除ノ事ニ付キ余ガ前ニ論シタル所ノ者ニ於テ此箇條
ハ反對說ヲ起サシム可キ乎蓋シ治罪法ナル者ハ刑事裁判所ニ於テナ
シタル諸手續及ビ此裁判所ノ諸決定ノ結果ノミヲ規定スルモノダレ
ハ其第六百四十二條ニ於テモ亦民事ニ付キ刑事裁判所ニテナシタル
決定ノ効ノミヲ規定シ民法ニ侵入セザルヲ知ル可キナリ

第三十章 罪人引渡ノ事

エキストラヂシヨ

前章ニ吾佛國法律ヲ物上法ト隨人法トニ分テ之ヲ論ズルニ當リ地ト
人トニ付テ其權力ノ區域ヲ講說シ爲メニ治罪法第五第六第七條並ニ

罪人引渡

一千八百六十六年六月二十七日ノ法律ヲ以テ修正シタル條款ヲ學示
シタリキ而シ此等ノ條款ハ余ヲ以テスレバ刑事調査法ニ屬センヨリ
寧ロ原法ニ屬ス可キ者トスルナリ

右ノ條款ニ付テハ曩者補充ノ解釋ヲナス可キモ其時ノ未ダ至ラザル
ヲ以テ尙ホ早シトシ之ヲ延引セシト雖モ今ヤ此事ヲ論究セント欲ス
即チ罪人引渡シノ事是レナリ罪人引渡ノ事タル原法ニモ調査法ニモ
屬スベシト雖モ毫モ其二法ニ於テ規定セラルハトナシ

刑法ノ適用ヲ妨障シ言渡セシ刑ノ執行ヲ遮止スル原因中ニ刑ニ處ス
可キ犯人ノ外國ニ住居スルヲ算入スベシ

罪人引渡ノ事タル即チ此原因ヲ除却ス可キ方法トナス茲ニ佛人佛國
ニ於テ重罪ヲ犯サンニ其未ダ刑辟ニ罹ラザル前逃走ノ外國ニ行ク時
ハ佛國ハ其主權ヲ國疆外ニ及ボス可カラザルヲ以テ其犯人ハ抗傳裁

罪人引渡ノ
目的

罪人引渡ノ事

判ノ規則アルが故ニ全ク裁判ヲ免レザルニ非ズト雖モ刑ノ執行ニハ全ク免ル、トナ得ベシ又縱令對審ヲ經テ刑ニ處セラレ、トアルモ逃脫スルヲ得可カラザルニ非ズ而シテ外國ニ至リテ倚ル所アラハ其言渡サレタル刑ヲ顧ミザルヲ得ベシ

外國人佛國ニ於テ罪ヲ犯ス時ハ二國ニテ之ヲ罰セザルヲ得ザルヲアリ即チ秩序ヲ亂サレタル國ハ勿論犯人ノ故郷ニ因リテ其屬スベキ國ト雖モ其法律ニ隨人ノ性質アルキハ亦此國ニ於テモ之ヲ罰セザル可カラザルナリ然レモ若シ犯人遁逃シテ己レヲ刑ニ處ス可キ法律無キ國即チ余稱シテ中立國ト云フ地ニ至レバ右二國ノ法ニ制セラレザルヲ以テ刑辟ニ罹ルヲナカル可シ例ヘバ佛法ヲ犯セシ者白耳義人タリトセン其白耳義人既決後或ハ未決前ニ瑞西ニ遁走セシ時右二國ハ其犯人ニ付テ復タ權力ナキ者ノ如シ是レ蓋シ二箇ノ理由アルナリ其一

ハ其二國が有スル所ノ警察權ハ其警察權ノ由テ起ル所ノ權ヨリ大ナラズシテ外國ニ於テハ之が職掌ヲ有スル者ナク又管轄スベキ者ナシ而シテ其第二ノ理由ハ實際ハ暫ク置キ法上ヨリスレバ各國ハ皆平等ニシテ獨立タルモノナレハ若シ其他國ニ隨從スルヲアレバ是レ一國ニシテ一國タラザルヲ以テ右利益ヲ害セラレタル二國ハ他國ニ命令スルヲ得ザレバナリ

然リ而シテ所謂交際法ナル者ノ原則ニ從ヒ數箇ノ要件ヲ設ケ數箇ノ事情ヲ定メテ以テ犯人ガ滯留スル所ノ國ニテ之ヲ其罪ヲ犯シタル國若クハ其故土ニ送致ス可キヲ許セリ

此送致ヲ罪人引渡ト謂フ

今此事件ニ付キ三箇ノ問題ヲ講究セン

第一 罪人引渡ノ事ハ刑權ノ基本タル原則上ヨリシテ正當トナス

可キ乎

第二 如何ナル要件ニテ罪人引渡ヲ請求シ又之ヲ許諾スベキ乎

第三 罪人引渡ナル事ノ性質如何如何ナル規則ニ從フテ之ヲ請求

シ之ヲ許諾ス可キ乎又其結果ハ如何

先ツ罪人引渡ノ正當ナルヤ否ヤヲ論ゼン

事實ニ就ヒテ述論セハ抑此制度タル其名ハ異ニスルモ往昔ニ在リテ

ハ既ニ行ハレタルモノニテ如何ナル時代ト雖モ國トシテ之ヲ用ヒザ

ルハナシ然レモ元來此制度ハ全ク特別ノ事ニ屬シ政府ノ爲メニハ却

テ不利ナル者ニテ其規則トセシ所ハ則チ隱匿ノ權ニ在リ而シテ其隱匿

ノ權ハ奉供ト稱セシ地即チ社會權ノ管內タル地ニ於テ現ニ社會權ヲ

害スト雖モ之ヲ行フコトヲ得タルナリ社會權ヲ害スト雖モ之ヲ行フコ

ト得タル所以ハ蓋シ或ル關係上ヨリ政略ニ於テ政府ヨリ一層高尙ナ

罪人引渡ノ
史論ニ適フ
其歴ヲ

ル主權則チ宗門主權ヲ政府ニ於テ公然認許シタルガ故ナリ

刑法アリト雖モ右ノ事件ニ付キ罪犯ヲ問ハザルニ置クノ規則ヲ擴張

シ慈惠待容ノ精心ヨリ生シタル義務ヲ過大ニスルニ至リシ者其源因

タルヤ數多アリ蓋シ往昔ニ在リテハ當今萬國ノ間互ヒニ行ハル、如

キノ交際ナルモノ無ケレバ亦其互ヒニ辨用スル如キコトハアラザリキ

又其文明ノ隔絶スル開化ノ等シカラザル甲國ハ乙國ノ裁判ニ就ヒテ

毫モ信ヲ置クコトヲ得ルナク所謂宇內普通ノ性質アル裁判ナル者ハ得

テ見ル可ラザリシナリ

夫ノ隱匿ノ權ニ係レル規則ハ往々于犯ヲ被ムリ其于犯ハ漸次ニ増加セ

シテ以テ始メハ暴惡ノ重罪ノニ例外ニ屬シタリト雖モ後ニ及ンデ總

テ大危害ヲ生ズ可キ重罪モ亦此部ニ算入スルニ至リシナリ是ヲ以テ

第十一世紀ヨリ第十二世紀ノ間ニ於テ罪人引渡ノ制ハ佛國ノ普通法

トナリシ者ノ如シト雖是レ大ヒニ然ラザルモノアリ蓋シ此時ニ當
 リ全國分裂シ侯伯其國ニ據リ所謂ル主權ナルモノハ所有權ヨリ生ジ
 而シ人民ハ土地ニ屬スル者タリシヲ以テ其人民ヲ裁判スルニハ其屬
 スル所ノ地ヲ有スル者ヨリ之ガ取戻シヲ請求セシハ明カナリト雖ヒ
 然レモ是レ唯封建制ノ結果即チ封建制アリテ而シテ後行ハル所ノ交際
 及ヒ權利上ノ結果タルニ過ギズ其封建制ノ規則ニ於テハ今日罪人引
 渡ノ件ニ付キ各國ニ於テ往々ナス所ニ反對ナル者アリキ即チ隨人法ハ
 最モ行ハレタリ讀者ハ記憶スルナラシ第十三世紀ヨリ第十六世紀迄
 ニ封建ノ制倍々壞敗セシニ乘シ王家汲々其權ヲ中央ニ集合シ僅ニ以テ
 犯處管轄ノ裁判所ハ他ノ裁判所ノ前ニ先審スルノ權ヲ有ス可キ定則
 ナ立ツルニ足リシヲ是レ後來佛國トナリシ國ハ當時分裂セシニ拘ハ
 レズ其小各國ノ間自カラ關係連結シ全ク外國視スルヲ能ハザル者ア
 ルヲ以テナリ

罪人引渡ノ事ニ付キ佛國ニ於テ條約ヲ結ビシヲ見ルハ第五世シヤ
 ル、王トサウアー侯トノ約束ヲ以テ嚆矢トナス第十五世紀ニ於テハ
 又他ノ例ヲ見ルナリ第十八世紀ニ於テハ此事大ニ進歩シ左ノ註ヲ許
 多ノ交際締約書ニ記載シ實ニ今日ニ至ツテハ漸々其數ヲ加ヘ又増加セ
 ザルベカラザルナリ「アッサンブレ」コンスデ、チユアント」ハ一千七百九
 十一年二月十九日ノ法律ヲ以テ罪人引渡ノ規則ヲ認決シ特別法ヲ設
 ケテ之ヲ記定センヲ欲セリ國會ハ乃チ布告シテ云ク憲法掛官吏ハ
 絶ヘズ交際掛リト會集シ或ル重罪被告人引渡ノ事ニ付キ佛國ト歐羅
 巴諸國トノ間ニ取結ブヘキ規則ヲ議定スベシ云々ト其進歩シタル實況
 知ルベシ」一千七百六十五年九月二十九日佛國西班牙ト取結ビシ條約〇一千七
 百六十五年十月三日九日佛國トウエルトンヘル侯ト取結ビシ條約〇一千七百
 七十八年三月一日西班牙ト葡荷牙トノ間ニ取結ビタル條約ニ付キ一千七百八
 三年七月五日佛國ニ於テ同意ノ旨ヲ述ベタル條約〇一千七百八十七年八月三

罪人引渡ノ事

十一日佛國大武利太尼トノ條約○一千七百九十八年八月二十九日佛國ト瑞西
 トノ條約此條約ハ一千八百三十九年九月二十七日及一千八百二十九年七月十八日
 日ニ於テ又更ニ取結ビタツ云フノ間ニ取結ビタルアミアンノ和利太尼條約○一
 八百三十四年十一月二十一日ノ佛國ト白耳義トノ條約○一千八百四十三年八月
 月二十三日本佛國トサルテ一ギニト佛國ト白耳義トノ條約○一千八百四十三年
 國ト英國ト非ス英國ハ被テ告人ヲ陪審ニ佛國ニ於テ履行シタル諸手續ハ英國ノ
 スルベカニラザルヲ口實トナシモ英國ヨリ罪人ヲ引渡セシ障ヲハ僅カニ一回ナリ
 ザルベカニラザルヲ口實トナシモ英國ヨリ罪人ヲ引渡セシ障ヲハ僅カニ一回ナリ
 キ一八百六十五年ニ於テ佛國ハ即チ彼ノ英一千八百四十三年ノ條約ニ按據シ
 談判シタリシニ翌一年ニ於テ佛國ハ即チ彼ノ英一千八百四十三年ノ條約ニ按據シ
 ノ捺印アル以上ハ英國ニ於テモ之ヲ確證ト看做ス可キニ決セリ今日ニ在リテ
 ハ英國ハ一千八百七十二年八月九日ノ法律ヲ以テ荷蘭引渡ノ要件ヲ規定スト云
 フ一千八百四十四年十二月七日ヘイバ(即チ荷蘭引渡ノ要件ヲ規定スト云
 年七月十三日葡荷牙トノ條約○一千八百五十五年六月十三日及一千八百五
 八十七年二月七日澳斯利亞トノ條約○一千八百五十五年六月十三日及一千八百五
 八十七年二月七日澳斯利亞トノ條約○一千八百五十五年六月十三日及一千八百五

以上事實ニ據テ之ヲ論ゼリ今法ニ就ヒテ叙述セン
 罪人引渡ノ制ハ正當ナルヤ否ト云フニ就キ疑團ヲ懷キシ者アリト雖

駁説

モ抑此制タル命令ヲ犯ス者ニ應報ヲ加フルノ目的アリテ法律ヲ遵奉
 セシムルノ方法ナレバ犯人ヲ取戻サンコトヲ要求スル國ニ在リテハ此
 事ノ正當ナル固ヨリ疑ナ容ル可カラザルナリ然リト雖モ其犯人ヲ送
 附スル國ニ在リテモ亦正當ナルベキ乎或人ハ云ク政府ハ道德ノ命スル
 所ヲ擧ケテ悉ク皆之ヲ行フベキノ任職アルモノニ非ズ其唯任職トス
 可キ者ハ其指揮スル所ノ社會ノ保維及ビ開達ニ必須ナル法律ノミチ
 保護スルニ在ルニ過ギズ故ニ政府ハ其統治スル所ノ社會ニ對シテノ
 ミ義務アリ而シテ其權ハ其義務ヨリ生ズ可キヲ以テ其社會ニ對スルニ
 非ザルヨリハ權利ナル者ナシ之ヲ奈何ゾ其關係ナキノ犯人ヲ罰スベ
 ケンヤ若シ果シテ直接ニ之ヲ罰ス可キノ權アリシナレバ宜シク之ヲ
 罰ス可シト雖モ其指揮モセザル所ノ刑罰ニ同意スル如キハ決シテ其
 ナス可キ所ニ非ザルナリ

罪人引渡ノ事

答辨

蓋シ政府ハ其統治スル所ノ社會ニ對シ實ニ狭少ナル義務ノミチ有ク
ト雖ヒ然レヒ他ノ社會ニ於テ直接ノ利益ヲ得可キガ如キ事ヲ我政府
ニ於テ執行スル時ハ乃チ亦我が社會ノ利益タルベキナリ夫レ犯罪ノ
中其一箇ノ社會ヲ害スルニ止マラズ諸社會一般ヲ害シ文明ノ根本ヲ
傷ク可キニ因リ事情ト場所トニ拘ハラザル者アリ是ノ如キ犯罪ハ之
ヲナセシ土地及ビ犯人ノ奉ズ可キ法律ノミコテ罰ス可キニ非ザルナ
リ又天下何レノ國ヲ論ゼズ何レノ法ヲ論ゼズ皆認メテ重罪トナス可
キノ犯罪ナル者アリ而シテ諸國ハ即チ其本一族ニ起リシモノナレハ今
其分派セル諸社會ヲ害ス可キ所爲アルトハ之ヲ罰スルモ固ヨリ當然
タル可シ況ンヤ人ノ交通愈々開ケテ精神ノ流布事實傳播ノ峻速ナル今
日ニ在リテハ過大ノ罪惡ヲシテ刑網ニ免レシムル如キコトハアル可カ
ラザルナリ

罪人引渡シ
ノ要件

且ヤ政府ハ己レガ管内ナル地ニ於テ重罪ヲ犯セシ者ヲ罰スルニ付キ
利益ヲ受クルハ勿論ナリ而シテ必ズ之ヲ罰セント欲セバ外國ヨリ罪人
ヲ引渡ス可キヲ要ス然レヒ苟クモ我ヨリ彼ニ望マハ我亦彼レニ之ヲ
許サ、ルヲ得ス是互相義務ヲ同フスルハ萬國交際法ニ於テ宜シク遵
守ス可キ所ノ法律タレバナリ
如何ナル要件ニテ罪人引渡ヲ要求シ又之ヲ許可スベキ乎此等ノ要件
ハ成文法ヲ以テ豫定ス可キ者乎此事タル自主國ト自主國トノ關係ニ
在リ而シテ今成文法トハ即チ數多ノ自主國ノ上ニ位セル天下普通ノ主
宰者アリテ而後存スルモノナリ然ルニ一君主ノアルアリテ諸自主國
ノ上ニ位スル所ハ是レ其自主國ハ復タ自主國タラザル可シ然ラバ則
チ如何ナル成文法ニ於テモ罪人引渡ノ事ニ付キ萬國ノ間ニ其要件ヲ
規定スルコトヲ得可カラザルナリ夫レ然リト雖モ所謂締盟條約ナ

罪人引渡ノ事

ルモノアリ萬國ノ間互ニ之ヲ取結ブ可キヲ以テ夫ノ罪人引渡ノ要件
モ亦概テ此契約ノ如キ者ヲ以テ之ヲ規定スルヲ得若シ此條約無キ
キハ萬國交際法之ヲ確定スベシ萬國交際法トハ開明諸國習俗ノ成果
ニシテ而シテ其習俗ハ一定不變ノ者ニ非ズト雖モ文明ノ進歩ニ關係ス
可キ者ナリ

又欠ク可カラザルノ要件ニシテ萬般ノ事ヲ綜理スルモノアリ其自然
遵守ス可キモノタルヲ以テ之ヲ記載スルヲ要セズトス若シ政府ニテ
罪人ヲ外國ニ引渡スルハ其訴ノ手續ヲ容易ナラシメ且之ヲ確固ニス
可シ是レ即チ外國裁判所ニ協力スルナリ其毫モ權力ヲ施ス能ハザル
所ノ手續ニシテ而シテ一己ノ隨意ヲ以テ是ノ如ク關涉スル者若シ其手
續ノ制ニ於テ文明ノ所業ニ悖リ道理ノ定則ニ反シ例ハ拷問ノ如キ
者アル時ハ以テ正當トナスベキ乎不仁ノ所爲ニ非ザル乎蓋シ疑似人

引渡事件ノ條約ヲ諾認スルニハ其之ヲ取結ブ所ノ二國ニ於テ同一ナル
ル裁判所ノ制アリ又同一ナル訴訟ノ規則アルヲ要セズ假令其異ナル
所大ナリト云フト雖モ必ラズヤ此ノ國ノ裁判制ハ彼ノ國ノ人情ニ背
馳セザルヲ要ス

若シ夫レ條約ナキハ大概如何ナル要件ニ從フテ右引渡シテナス可
キ乎

此要件ハ則チ犯罪ノ性質若クハ其引渡シノ目的タル人ノ身分ニ準ス
可シ

犯罪ニ因リ疑似人ヲ引渡スニ三箇ノ要件アリ左ノ如シ

- 第一 其犯罪ハ疑似人引渡シテ要求スル國ニ於テ最高等ノ刑ナル
施體加辱ノ刑ニ處ス可キモノタルヲ要ス蓋シ罪人ヲ引渡スハ事
重大ニ屬スルヲ以テ必ラズヤ爲メニ至當ノ利益ナクンバアラザ

犯罪ノ性質
ニ關係スル
要件

ルナリ若シ其犯ス所僅ニ輕罪タルニ過ギザルキハ其本國ヲ去リ親族ニ離レ自國ノ保護ヲ受ク可キノ利益ヲ失フガ故ニ社會一般ノ秩序ヨリセバ既ニ十分ナル辟罰ヲ被ムルガ如シフホースタンエリー氏ハ以爲ラク輕罪ト雖モ亦諸國ニ在リテ一般ニ社會ヲ害ス可キモノアリト此說ヤ皮相ヲ以テスレバ能ク理ニ適フガ如ク或ハ輕罪ヲ犯スモノモ亦彼ノ引渡シノ部ニ加フルヲ以テ一進歩ナリト思惟スル者アラン然レモ余輩ハ以爲ラク應サニ重罪ト稱スベキヲ輕罪ト稱セシガ如キ不長ナル刑ノ等級ヲ設ケシ國ニノ

此駁論ヲ當ツルコト得可シト
 第二 其犯罪ハ罪人引渡シテ要求スル國ノ法ニ於テ罰スルノミナラズ文明諸國ノ法ニ於テ罰スルヲ要ス此第二ノ要件ハ殊ニ第一ノ要件ト異ナル者トス第一ノ要件ハ犯人ヲ要求スル國ノ意望タル

ル一事ヲ證スルニ止マルモ第二ノ要件ハ犯罪ノ實ニ重大ナルコトヲ證スルニ在リ

第三 其犯罪ハ純乎タル國事ニ屬セズシテ通常重罪タルヲ要ス又縱令全ク通常重罪タラザルモ両性ノ重罪タラザル可カラズ其純乎タル國事ニ屬セザルヲ要スル者是レ國事犯ハ必ラズシモ常ニ罪惡ノ性質アルベキニ非ザルヲ以テナリ蓋シ國事犯ハ數罪惡ノ性質アリト雖モ之ヲ目的トシテ制定スル所之ヲ判定スル國ニ於テステ尙ホ區々一定ナラズ況ンヤ他國ニ在リテハ其差異得テ而シテ知ル可カラザルヲヤ

又一方ニ於テハ國事犯ヲナス者其害ヲ加ヘントスル所ノ社會ヨリ離隔スル時ハ復タ其社會中ニ在ル時ト同様ノ危害ハナキモノニテ其違投シタル國ニ住居スルニ於テハ大抵侵害ヲ加フル能ハザル可シ夫レ

罪人引渡ノ事件ハ之ヲ承諾スル政府ニ在テ之ヲ要求スル政府ノ裁判ニ信ヲ措クヲ以テノミ其所爲ヲ正當トナスベシ彼ノ一時ノ政談家ガ國事犯ハ犯罪中最モ判然ナラザル者ニテ其裁判ハ裁判中最モ判然タラザル裁判ナリト云ヒシハ余ノ固ト敬服セザル所ナリ蓋シ裁判所ノ設ケアル者ハ社會秩序ノ爲メニシテ而テ國事犯ハ他ノ犯罪ト均シク亦社會秩序ノ爲メニ刑罰ヲ加フベキ者トス是レ即チ法律上ノ推測ニシテ而テ是ノ如ク推測スル者通常ノ場合ニ於テハ能ク事實ト適合スルナリ然リト雖モ此推測ノ權力ハ延ビテ外國ニ及ボス可カラズ況ンヤ國事犯ニ付テハ德義ニ背クコトノ僅少ナルヲヤスジエヲロジニ、コル候ハ此文明諸國ノ方法ノ解釋ニ付キニ個ノ源由ヲ示セリ第一ハ國事犯ニ付キ罪人引渡シテ要スル政府ハ其所爲ノ公平ニ出デシヤ十分信ヲ置ク可キ者ナク而シテ罰セント欲スル所ノ重罪ハ自己ニ對スル所爲ナルヲ以テ其政府ハ乃チ裁判者ト原告トヲ兼ル者ナラン第二ハ罪人ヲ引渡スルハ是レ之ヲ要求スル政府ガ國內ノ事務ニ侵入スルモノナリト下ボナド氏ハ云ク本國ニ於テ罪人引渡シタリトノ事務ニ侵入スル外國人ニ付キ其政府ヨリ之ヲ引渡サレンコトヲ請

セシキハ宜シク之ヲ還附スベシ但シ謀メ定メタル場合ニシテ其犯罪ハ明カニ社會ノ基礎ヲ害シ如何ナル國ト雖モ至重ノ刑ヲ以テ罰スル者タルニ限ル可シ一國限リノ犯罪及ビ國事犯ニ付テハ其犯人ヲ外國ニ引渡ス可カラズ是レ慈惠對客ノ權ハ復タ寺院ノ有スル所ニ非ズト雖モ不幸者ノ爲メニハ全世界ハ均チ寺院タル可ケレバナリト載セタリ八百七十年八月九日英國議院ニ於テ發議シタル法案第三條ニ左ノ文ヲ載セタリ「罪人遺レテ英國ニ發シタル片其本國ヨリ之ヲ要求スル所其惡事タル所爲國事犯ノ性質アルカ或ハ身體保護ノ規則ニ從ヒ本人ヲ裁判所若クハ檢事ノ面前ヘ誘致シ吟味ノ末本人ヨリ國事犯ノ性質アル所爲ニ付キ吟味ヲナサンガ爲メ又ハ刑ニ處セラレシガ爲メ本國ヨリ其身ヲ引渡ヲ要求スル旨ヲ證明スルニ於テハ英國政府ニテ之ヲ引渡サハル可シト引以上舉クル所ノ諸要件ハ條約ヲ以テ其一ニテ除却スルヲ得可ク又悉皆之ヲ除却スルコトヲモ得ベシ

人ニ付テノ要件

引渡ヲ請求スベキ人ニ付テハ如何ナル要件ニ從フテ之ヲ請求セハ外國ノ承諾ヲ受ク可キ乎抑某國ノ人民ヲ其政府ヨリ引渡サレシコトヲ要求スルコトヲ得可キヤ大概之ヲ不可トスルナリ蓋シ犯人ハ本國ノ法律ニ於テ罰ス可キモノタルカ或ハ然ラザルカノ二ツノ者アリ若シ刑ニ處ス可キハ其法ノ

隨人タル規則ニ因リ之ヲ罰スベク苟クモ之ヲ刑ニ處ス可カラザルハ既ニ罰スルノ適當ナラザル事件ニシテ外國ヨリ干涉シテ之ヲ罰セシムルヲ望ム可カラズ一千八百六十六年六月二十七日ノ法律布告以前ニ在リテハ佛人外國ニ於テ犯スルノ重罪ハ其佛人ニ對シ犯スニ非ザレバ佛國ニ於テ之ヲ罰セザルノ規則タリシガ故ニ上ノ道理ハ佛國法律ニ無キ所ナリキ是レ一千八百十一年十月二十三日ヲ以テ佛人ヲ外國政府ニ引渡スハ皇帝ノ權内ナリト布告セシ所以ヲ釋明スルコ足ルニシ蓋シ皇帝ハ能ク此權ノ使用ヲ慎ミタリト云ハザル可カラズ

一千八百十一年十一月二十三日ノ布告ハ今日ニ現行ス可キ者乎帝國政府以來ノ諸政府ニ於テ行フ所ヲ見ルニ全ク之ヲ擲棄シタルガ如シ然レハ法律ハ行ハレザルガ爲メニ之ヲ廢シタリト看做ス可カラザルヲ以テシエテロシヨユテリスル氏ハ一千八百四十九年ニ於テ一千

一千八百十一年十一月二十三日ノ布告

八百十一年ノ布告ハ未ダ廢除セザルヲ以テ尙ホ施行シ得ベシト論シタリキ

之ガ反對ノ説ヲナス者ハ云ク一千八百四十八年十一月四日ノ憲法ニ於テ明文ナキ以上ハ一千八百十四年ノ詔命第四條第六十二條一千八百三十年ノ詔命第四條第五十三條一千八百四十八年十一月四日ノ憲法第二條第三條第四條ノ規則アルヲ以テ不備不當ノ法律ニシテ之ヲ布告シタル政府ノ世ニ於テ既ニ頽敗ニ屬セシ者ノ如キハ復タ援引ス可カラズト

然ラバ則チ問題ハ廢除ノ論タルカ佛國政府ハ法律ヲ設ケテ外國政府ニ對シ自カラ束縛スル所アル可キ乎抑法律ハ國民ノ爲メニ羈絆者タル者ナリト雖モ一千八百十一年ノ布告ハ佛國人民ニ義務ナル者ヲ命ゼシニ非ズ却テ其人民ニ對スル保證ニシテ人民ハ之ガ爲メニ既得ノ

不長ナル立法ノ問題

權ヲ受ケタルニ非ス而シテ其布告ハ唯政府ニ對シテノミ權力アル可キナリ然ルニ躬自カラ束縛スルノ理ナキヲ以テ此問題ハ即チ法律上ニ屬セザル者ニテ一國名譽上ノ論タルヲ知ルナリ而シテ一國名譽上ニ於テ冀望スル所ハ其國民ヲ外國ニ引渡スヲナク之ヲ保護スルニ在ル可シ政府ハ其國民ニ非ザル者其管内ニ於テ外國人民若クハ外國政府ヲ害ス可キ重罪ヲ犯シタルヲ外國ニ引渡ス可キ乎

若シ其犯罪ハ刑法ノ地限ナル性質ニ因リ刑ニ處ス可キハ他國ノ爲メニ我罰權ヲ拋擲スルハ適當ナラザルガ如シ又若シ其所爲ヲナシタル地ノ法律ニ從ヘバ刑ニ處ス可カラザルハ何故ニ外國政府ニテ之ヲ罰スルヲ許ルシ且容易ナラシム可キ乎是レ豈ニ自國法律ノ不備ヲ咎メ且其欠典ヲ舉示スルニ非サルヲ得ン乎

政府ヨリ其國民ニ非ラザル者ノ引渡ヲ要求ス可キ乎

甲ナル政府ノ臣民タラザル者ヲ甲ナル政府ヨリ引渡サレシトテ請求スルコト假想セン若シ其請求ヲ受ケタル政府ニテ自國ノ人民ヲ引渡ス以上ハ同一ナル理ニ因テ他國ノ人民モ亦引渡スベシト雖モ然レモ或人ハ云ク若シ其自國ノ人民ヲ引渡サザルハ他國ノ人民ニ付キテモ亦其引渡ヲ請求スル國ニ不信用ヲ懷クヲ以テ之ヲ引渡ス可キノ理ハアル可カラザルナリト余ハ之ニ答ヘテ云ハントス其自國ノ人民ヲ引渡スコト拒ム者ハ是レ常ニ疑心ヲ懷クガ故ニハ非ズト夫レ政府ハ自國ノ人民ニ付テハ屢隨人ノ原則ニ從フテ之ヲ罰スルコトアリト雖モ外國人ニ付テハ此原則アルニ非ズ又其或ハ隨人ノ原則ニ從ハザルコトアルモ政府ハ政府相當ノ感覺ニ因リ自國ノ人民ニハ能ク保護ヲ爲ス可ク而シテ其保護ハ他國人民ガ利益ノ爲メニハ之ヲ施サザル可シ二三ノ學士ハ他ノ點ニ因リテ論フ之ヲ不可ナリトセリ其說ク所ニ依ルニ

罪人引渡シトハ臣民ヲ他國ニ附與スルノ謂ニシテ即チ追蹤ノ權ノ如キ者ヲ使用スルヲ謂フト然レモ事物ヲ義解スルヨリ始ムル者ハ之ヲ決定スルヨリ始ムルト同シ余輩ヲ以テスレバ又公益上ヨリスレバ罪人引渡トハ之ヲ外國ノ刑事裁判所ニ還附スルヲ謂フナリ而シテ如何ナル國ノ人民ト雖モ又法律ハ物上タリヒ隨人タリヒ凡ソ其法律ヲ犯ス者ハ刑事裁判所ニテ之ヲ罰スルヲ得ヘシ

説ヲヨシレウキス候ハ之ガ反對ノ渡ヲ要求スル政府ニテ其裁判方法ノ良好ナルニ付キ確乎タル保證ヲ表示セザルアリ又之ニ反シテ其十分ナル保證ヲ表示スルアリ第一ノ場合ニ於テハ自國ノ人民ト雖モ引渡ス可カラザルヲ長ケタル政府ヨリ自國ノ人民ヲ附與セザルノ理ハアル可カラズ彼ノ羅馬ヲ見ズヤ其人民共和ノ國內ニ於テ外國使臣ニ對シ暴行ヲナスハ之ヲ其國ニ引渡シタルニ非ズヤト

若シ甲國ハ罪ヲ犯セシ地タルノ名義ノミニテ罪人引渡シテ要求シ而シテ乙國ハ犯人ノ鄉國タル故ヲ以テ亦之ヲ要求セシキハ乙國ニ於テ必ず之ヲ得可キノ權アル乎

二國ニテ罪人引渡ノ請求時

此問題ニハ二個ノ場合アルベシ第一ハ二箇相異ナルノ重罪ヲ犯セシ場合ニシテ而シテ其一箇ハ刑法ニテ物上ノ性質ト隨人ノ性質トニ因リ罰ス可ク又其他ノ一箇ハ物上ノ性質ノミニ因リ罰ス可キモノトス第二ハ一箇ノ重罪ヲ犯セシ場合ニシテ而シテ其罪ハ犯人ガ本國ノ法律若シハ之ヲ犯セシ地ノ法律ニ因リ刑ニ處ス可キ者タリ

第一ノ場合ニ於テハ最モ不問ニ置ク可カラザル所爲ヲ罰シ得ンガ爲メニ二箇重罪中ノ輕重ノ差異ニ因リ二國ノ中孰レカ犯人ノ引渡シテ受ク可キ乎ヲ確定ス可シ又若シ其犯罪同等ナリシトキハ右引渡ヲ請求シタル遲速ニ隨フテ之ヲ定ム可シ二罪ニ付キ刑ニ處スルニ其利益タル等シキトキハ大概犯人ガ本國ノ裁判所ヲ以テ最モ保證ス可キ裁判所ナリト看做スベシ若シ罪ヲ犯セシ地ニ於テ犯人ヲ捕ヘシキハ地限ノ原則ハ隨人ノ原則ノ爲メニ屈ス可キニ非ザルヲ以テ固ヨリ之ヲ

其本國ニ送附セザル可シト雖モ然レモ其中間ニ立ツ可キ國アリ若シ
 其國二國ノ要求ヲ受クルモハ孰レカ最モ保ス可キヤチ慮カリ其可ナ
 ルモノヲ撰ンテ犯人ヲ引渡ス可シ苟クモ自主國ニシテ是ノ如ク犯人
 ヲ他國ニ送附スル者は是レ必ズシモ他國ノ利益ヲ慮パカルニ非ズ假令
 間接ニ非ザレバ受ク可カラズト雖モ又唯自家ガ利益ノ爲メノミ蓋シ
 獨立タル一國ニシテ他國ノ器具トハナル可カラズ其自カラ行ハザル
 ノ刑罰ニ付キ斯クハ助成スルコトアリト雖モ是レ全ク自國ニ於テ應サ
 ニ保護ス可キ處ノ秩序ヲ保維セントスルニ異ナラザルナリ
 第二ノ場合ニ於テ同一ナル重罪ヲ犯セシニ因リ地限法ト隨人法トノ
 間互ニ牴觸スルトキハ寧ロ地限ノ原則ニ從フ可キガ如シ余亦甚疑ヒ
 ナキニアラザレモ到底犯人カ本國ニ於テ之ヲ罰セザル可カラズト信
 ズルナリ如何トナレバ犯人ガ本國ノ法ハ最モ公平ナルモノト推測ス

可ク而シテ之カ引渡シテ承諾スル國ニ於テ正當ナル利益アル所ハ即チ
 其犯罪ヲ不問ニ附セザルニアレバナリ
 甲國ニテ裁判センガ爲メ罪人引渡シテ要求シ而シテ乙國ニテハ既ニ言
 渡シタル刑ヲ執行センガ爲メニ亦之ヲ要求スルモハ其二箇要求ノ間
 又相軋轢スルニ至ラン此二箇ノ利益ノ中其孰レニ撰定ス可キ乎之ヲ
 要求スル二國ハ皆犯人ガ本國ニ非ズト假想センニ抑訴ヲ起スルハ罪
 ノ有無未ダ判然セザルモノニテ唯之ヲ想像スルニ過ギズト雖モ一旦
 刑ニ處シタル以上ハ其確證スルヲ以テ其重罪ヲ犯シタル明白ナル者
 ハ須ラク還附セラレテ刑ノ執行ヲ受ク可シ然レモ亦一定ノ規則トナ
 ス可カラズ即チ其既ニ刑ニ處セラレタル罪ハ今訴テ受ケタル罪ヨリ
 甚ダ輕キコトアリ例ヘバ一ハ謀殺ノ罪ニシテ一ハ盜取ノ罪タル如キハ
 縱令盜取ノ罪ハ既ニ刑ニ處セラレタリト雖モ寧ロ謀殺ノ罪ヲ事トセ

ザルヲ得ンヤ又之ガ反對ナル場合ニ於テ其最モ重キ罪ハ刑ニ處セラレ而シテ其未ダ裁判ヲ經ザル罪ヲ犯シタルハ右言渡ノ日ノ以前ニ係ルキハ不累加刑ノ大則ニ據リテ萬國交際法上ノ難事ヲ決斷ス可カラザル乎余輩ガ唯茲ニ一言セント欲スル所ノ者ハ引渡ス可キ者ハ既ニ裁判ヲ經ルガ又ハ未ダ之ヲ經ザル者ナルヤヲ決定スベカラザル是レノ

罪人引渡請
求ニ付例外

若シ引渡シテ要求セラレタル者其遁投シタル國ニ於テ重罪或ハ輕罪ヲ犯セシニ付キ訴ヲ受ケ又ハ假リニ禁錮セラレタルキハ其言渡サル可キ期限ヲ經ルマデ其引渡シテ延引セザル可カラザルガ如シ是レ直接ノ利益ハ間接ノ利益ニ比スレハ稍大ナルヲ以テナリ然レモ若シ犯人其地ノ人民ト取結ビタル契約ノ義務ニ付キ訴ヘテ受ケタルガ或ハ禁錮セラレタルキハ公益ハ私益ヲ制ス可キヲ以テ犯人ヲ引渡サザル

可カラズ但シ其民事上ノ原告人ハ懸リ官吏ニ訴ヘテオスノ權ヲ失フコトナカル可シ

右ノ二事ハ數多ノ條約ニ於テ記載セラレ就中一千八百五十年四月二十八日ニサツクス王國ト取結ビタル條約ニ於テ明掲セシ所ナリ其サツクス王國トノ條約ハ法律ヲ以テ認可セラレタルモノナリ一千八百五十九年八月九日ノ英國議院ノ法案第三條ニ左ノ文ヲ載セタル外國ヨリ送レテ英國ニ投スル者其引渡シヲ請求セシメタル所爲ノ外他ノ犯罪ニ付キ英國裁判所ニ於テ訴ヲ受ケタルキハ其放免セラレカ或ハ刑期ヲ終ルマデハ之ヲ外國ニ引渡ス可カラズト

刑又ハ訴ノ
期滿免除

若シ其罪ヲ犯シタル日ヨリ訴又ハ刑ノ期滿免除ノ期限ヲ經タルキモ亦之ガ引渡ヲナス可キ乎又ハ其期滿免除ノ要件ヲ遂ゲタルヤ否ハ如何ナル法律ニ據リテ考定ス可キ乎
蓋シ若シ公益上復タ刑罰ヲ要セザルキニ強ヒテ之ヲ行ハントスルハ固ヨリ不當ナル可シ今唯如何ナル場合ニ於テ刑ヲ言渡シ若シハ執行

罪人引渡ノ事

スルハ公益上復々無用トス可キヲ論定セザル可カラズ夫レ余輩が以テ原則トスル所ハ即チ政府が罪人ヲ外國ニ引渡ス者ハ是レ之ヲ要求スル政府が利益ノ爲メニ非ズシテ畢竟自國が利益ヲ慮ルニ在リ苟モ其自國が利益ノ爲メノミトセバ則チ其要求ヲ受ケタル國ノ法律ニ從フテ訴若シハ刑ノ期滿免除ノ期限ヲ經タルヤ否ヤヲ決定ス可シ是レ上ニ舉示セシ一千八百五十年四月二十八日ノ條約第九條ニ載スル所ナリ此條約タル實ニ法律ヲ以テ認可セラレ爾來取結ビシ所ノ諸般ノ條約ニ於テ標準トナリシヲ以テ余ハ茲ニ之ヲ舉ゲタルノミ一千八百五十年一月二十六日ヲ以テ確定セラレタル罪人引渡ノ事ニ係レル日耳曼聯邦法律第一條ニ於テモ亦是ノ如ク定メタリト云フ如何ナル程規ヲ以テ罪人引渡ヲ請求シ其承諾ヲ受クベキヤ罪人引渡ノ事タル固ト法律ノ執行ニ非ス唯約束ヲ執行スルニ過ギザ

罪人引渡程規

ルヲ以テ之ヲ認許スルト拒絕スルトハ司法ノ權ニ關スルコトナシ蓋シ此事件ハ政府ト政府自主國ト自主國トノ關係上ニ屬シ而シテ其政府其自主國ハ高尚ナル道理ノ感覺ニ因リ條約ニ因テノミ羈絆ヲ受ク可キカ故ニ唯政府ノミ右引渡シヲ要求スルヲ得可ク而シテ又其要求ヲ受ケタル政府ノミ之ヲ許諾スルヲ得ベシ罪人引渡ノ事ハ不及既往ノ定則ニ拘ラザルモノナレバ之ヲ認許セル條約以前ノ犯罪ニ付テモ亦其引渡シヲナスベシ蓋シ罪人引渡シ事件ハ條約ノ有無ヲ問ハザルヲ以テ之ヲ取結ビシ日ハ無用ニ屬スレバナリ佛國ニ於テハ檢事長ノミ近隣諸邦ノ法官ト書類ノ往復ヲナシ諸證據ヲ交付ヲ要ムルヲ得可シ而シテ若シ罪人引渡シヲ請求セント欲セバ罪人引渡シノ請求狀並ニ其源由ヲ記載シタル書翰ヲ制シ且取監狀又ハ重